

2022年度 3月修了 修士論文

スポーツを伝える「情報番組」の役割

The Role of News Shows in
Disseminating Sports Information

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 トップスポーツマネジメントコース

5022A324-1

恵 俊彰

研究指導教員： 平田 竹男 教授

目次

第1章	序章	1
第1節	研究動機	1
第2節	「情報番組」と「スポーツ番組」の定義	1
第3節	「情報番組」と「スポーツ番組」の放送時間の違い	2
第4節	先行研究	2
第5節	研究目的	3
第2章	研究方法	4
第1節	情報番組「ひるおび」で取り上げたスポーツの内容分析	4
第1項	調査対象	4
第2項	調査期間	4
第3項	調査内容	4
第2節	番組制作者へのアンケート調査	4
第1項	調査対象者・調査期間	4
第2項	調査内容	5
第3節	取材対象者（元アスリート・現指導者）への調査	5
第1項	調査対象者	6
第2項	調査内容	6
第4節	「ひるおび」「news23 スポーツコーナー」「S☆1」の放送内容の比較	6
第1項	放送時間の比較	6
第2項	特徴的な3つの話題における放送内容の分析	6
第3章	結果	7
第1節	「ひるおび」の13年間の内容分析結果	7
第1項	1年ごとの内容分析	7
第2項	13年間のスポーツ放送回数	30
第3項	13年間で取り上げたスポーツの割合	32
第2節	番組制作者へのアンケートの調査結果	34
第1項	回答者の属性	34
第2項	最も印象に残ったスポーツ	37
第3項	最も印象に残ったスポーツを取り上げた理由	38
第4項	取材対象	40
第5項	取材の際に意識するポイント	41
第6項	情報番組への期待	41
第3節	取材対象者（元アスリート・現指導者）へのアンケート調査	43
第4節	「スポーツ番組」と「情報番組」、同じ話題での比較	46
第1項	放送時間と映像使用制限	46
第2項	6つの話題の放送状況	47
第5節	3つの話題における放送内容の分析	48
第1項	2021年大谷翔平 MVP 獲得	48
第2項	2021年松山英樹マスターズ制覇	50
第3項	2022年W杯カタール大会	50
第4章	考察	55
第1節	情報番組がスポーツを取り上げる基準	55
第1項	国際大会における基準	55
第2項	歴史的偉業と社会性・事件性、そして問題提起	56

第2節	報道番組、スポーツ番組、情報番組の相違点	57
第1項	番組制作者達の考え方	57
第2項	取材対象者（元アスリート・現指導者）の視点	58
第3項	映像使用制限による効果	58
第4項	スポーツ経験者による番組制作	59
第3節	「情報番組」がスポーツを伝える独自の方法	59
第1項	「競技のルール」「社会の変化」「人柄」を丁寧に説明する	59
第2項	専門家として経験者をキャスティング	60
第5章	結論	62
謝辞	63	
参考文献		64
付録	65	

図表目次

表 1	各番組でスポーツを扱う時間	2
表 2	ひるおびの放送回数とスポーツの放送回数・内容	30
表 3	回答者のスポーツ経験	36
表 4	スポーツを取り上げた中で最も印象に残った内容	37
表 5	「取り上げた話題の中で記憶に残っているもの」で挙げられた上位 10	46
表 6	印象的な話題の各番組での放送時時間（分）と映像使用制限	46
表 7	W 杯カタール大会中のスタジオゲスト	53
表 8	ウクライナの W 杯予選	56
図 1	2010 年月別放送回数	7
図 2	2010 年スポーツ別割合	8
図 3	2011 年月別放送回数	9
図 4	2011 年スポーツ別割合	10
図 5	2012 年月別放送回数	10
図 6	2012 年スポーツ別割合	11
図 7	2013 年月別放送回数	12
図 8	2013 年スポーツ別割合	13
図 9	2014 年月別放送回数	14
図 10	2014 年スポーツ別割合	15
図 11	2015 年月別放送回数	16
図 12	2015 年スポーツ別割合	17
図 13	2016 年月別放送回数	17
図 14	2016 年スポーツ別割合	18
図 15	2017 年月別放送回数	19
図 16	2017 年スポーツ別割合	20
図 17	2018 年月別放送回数	20
図 18	2018 年スポーツ別割合	22
図 19	2019 年月別放送回数	23
図 20	2019 年スポーツ別割合	24
図 21	2020 年月別放送回数	25
図 22	2020 年スポーツ別割合	26
図 23	2021 年月別放送回数	27
図 24	2021 年スポーツ別割合	28
図 25	2022 年月別放送回数	29
図 26	2022 年スポーツ別割合	30
図 27	13 年間の月別放送回数	32
図 28	13 年間で取り上げたスポーツの割合	33
図 29	現在所属している番組	34
図 30	番組でスポーツを取り上げた、担当した経験	35
図 31	回答者の年齢	35
図 32	男女比	36
図 33	回答者の競技レベル	36
図 34	最も印象に残ったスポーツを取り上げた理由	39
図 35	最も印象に残ったスポーツを取り上げた理由	39
図 36	スポーツを番組に取り上げる理由の 5 段階の平均値	40
図 37	取材対象者（報道番組、スポーツ番組、情報番組）	41
図 38	取材するときに意識するポイント	41

図 39 情報番組がスポーツを通して伝えたいこと、伝えるべきこと	42
図 40 「報道番組」「スポーツ番組」が考える情報番組が伝えること	43
図 41 目標達成シート	49
図 42 涙の解説者「沈黙の 55 秒」2021 年 4 月 13 日 TBS「ひるおび！」より	50
図 43 「カタールでは負けない」フリップ	51
図 44 11 月 23 日の主要配水量	52
図 45 マンションの部屋の灯りの変化	52
図 46 ボールの判定「サッカー規則 2022/2023」	53
図 47 FIFA ワールドカップ 2022 公式球	53

第1章 序章

第1節 研究動機

筆者は、2002年から週末の「スポーツ番組」の司会を10年経験し、2009年から現在までは、平日3時間の生放送の「情報番組」を13年担当している。「情報番組」は事件や事故、政治や経済、芸能ニュース、そして「スポーツ」など毎日起きている様々な話題を伝えている。「情報番組」の話題選びの基準の一つに視聴率がある。視聴率の良い話題、つまり視聴者が見たいと思われる話題は優先して取り上げられる。13年間お昼の「情報番組」の司会を担当して「情報番組」がスポーツを取り上げる回数は年々増えてきたと感じている。もし増えているなら、事件や事故、芸能ニュースなど様々な話題を取り上げるお昼の「情報番組」においても、スポーツを見たい人が増えているということになる。

テレビの歴史はスポーツの歴史でもある。1953年NHKがテレビ放送を開始した。開始初日の受信契約数は約866件で、当時テレビは家庭にあるものではなく、ほとんどが盛り場や駅、公園にあった。いわゆる街頭テレビである。街頭で人々はテレビを通してプロレスやボクシングに熱狂していた。つまり、テレビスタート時から「スポーツ」は欠かせないコンテンツであり、テレビを通して人々はスポーツに関わっていたのであった。1963年には、日米初の衛星中継実験が行われ、海を超えて米国から始めて伝えられた衛星映像はケネディ大統領暗殺であった。テレビにとっては「事件」もまた欠かせないコンテンツである。

このように「スポーツ」はテレビの重要コンテンツであるが、「スポーツ番組」と「情報番組」の両方の司会を経験して言えるのは、同じようにスポーツの話題を伝えているのに、伝える内容に違いがあるということである。つまり、「スポーツ番組」はまず結果を伝える、「情報番組」ももちろん結果を伝えるが、内容的にはむしろ結果以外の情報を伝えている場合が多い。

では、「情報番組」はどのような「スポーツ」を選び、どのように伝えているのであろうか。視聴者は「情報番組」の伝える「スポーツ」を通して何を知りたいのだろうか。

例えば日常生活で生じる様々な問題を解決する糸口、そのヒントを求めているのかもしれない。つまり「情報番組」には「スポーツ番組」がスポーツを伝えることとは違う役割があると思われる。「情報番組の役割」を知ることは、情報番組の司会を担当する自分自身にとって一番確認しておきたい情報であり、また視聴者にとっても視聴者が求めている情報が得られるより良い「情報番組」の放送につながるはずである。

第2節 「情報番組」と「スポーツ番組」の定義

本研究では、情報番組、スポーツ番組を以下のように定義する。

「情報番組」とは、政治、経済、事件、事故、芸能、スポーツなど、世の中で起きたあらゆる出来事の中から、その日の最大関心事を取り上げる番組のことをいう。具体的な番組としてはTBSで言うところの「ひるおび」、NTVで言うところの「ミヤネ屋」などが該当する。

「スポーツ番組」とは野球やサッカーはもちろん、様々なスポーツを取り上げ、選手に直接取材をし、時には特集を組んでそのスポーツを深く掘り下げる、スポーツ専門番組のことをいう。今回の調査では日々のニュース番組の中で放送されるスポーツコーナーもスポーツ番組に含むこととする。「スポーツ番組」は週末に多く放送されていて、TBSで言うところの「S☆1」であり、NHKでは「サンデースポーツ」、日々のニュースで言うところの「news23のスポーツコーナー」である。

第3節 「情報番組」と「スポーツ番組」の放送時間の違い

情報番組「ひるおび」、「スポーツ番組」の放送時間は下表のとおりで、「news23 のスポーツコーナー」は基本的に7分。週末のスポーツ番組「S☆1」は土曜日が28分、日曜日が58分。情報番組の場合、全体が3時間で、取り上げる話題によって放送時間は自由に決めることができる。「ひるおび」の場合、午後の2時間に関しては、基本的には3つの話題を取り上げる傾向にあるので、1コーナーがおおよそ25分。しかし、盛り上がる話題の場合は、事件でも政治でもスポーツでも2時間全てを1つの話題で割くことも可能である。

表 1 各番組でスポーツを扱う時間

番組名	放送日	番組の放送時間帯	スポーツの放送時間
news23 スポーツコーナー	月～木	23:00～23:56	7分* (23:40～23:47)
	金	23:30～0:20	5分* (0:00～0:05)
S☆1	土	0:30～0:58	28分
	日	0:00～0:58	58分
ひるおび	月～金	10:25～13:55	25分*

* 「ひるおび」で扱う場合は1コーナー約25分を基本として放送する

* 統計上、現在のnews23 スポーツコーナーは上記のような時間配分

第4節 先行研究

ラテ欄や新聞記事等のインタビューの内容分析からスポーツがどのように伝えられるかについて調査し、オリンピック選手の試合後のインタビューから得られる「言葉」やその選手の「ストーリー性」が報道に大きく影響すると言及していた研究（大橋, 2012）のように、スポーツ選手の成績だけが世間から注目される要素ではないことは明らかであるが、番組制作の観点から「スポーツ番組」と「情報番組」がどのような視点でスポーツを取り上げているかについては明らかにされていない。

また、テレビのバラエティ番組を対象にしたスポーツやスポーツ選手の取り上げられ方の発展について言及した研究（山本, 2018）では、スポーツ発のアイデアとバラエティ番組の制作者らの表現力、そしてタレントや芸人が務めるMCという媒介者が相互に補完し合う構造の中でスポーツバラエティ番組が発展してきたと説明している。また、選手のすごさを見せるだけでなく、選手自身に語らせるトーク型番組が登場したことで、選手をひな壇に座らせ、まさしくタレントのように扱うというパターンがテレビの中で定着したと説明しているが、情報番組での扱いについては十分な情報は無かった。

テレビとスポーツに関する研究は映像技術に関する研究（林, 2019）、テレビでは届きにくい情報などを、SNSを通じて届けることを試みた研究（宮下, 2021）や、スポーツメディアの動向を調査した研究（大橋, 2020）などはあるが、情報番組でのスポーツの取り上げられ方やその役割に言及した研究はない。

第5節 研究目的

「情報番組」がどのような理由や基準でスポーツを取り上げて、どんな内容を伝えているのか。そこで本研究は、スポーツを伝える「情報番組」の役割を明らかにすることを目的とする。

この目的を達成するためのリサーチクエスチョンとして以下の6つを設定した。

RQ1：情報番組で放送されるスポーツに関する話題はどのような内容か。

RQ2：情報番組では、スポーツに関する話題をどの程度報道しているのか。

RQ3：番組制作者はどのような意図をもって、その内容を選んでいるのか。

RQ4：番組制作者は情報番組にスポーツの何を伝えて欲しいと考えているのか。

RQ5：情報番組やスポーツ番組に出演した経験のあるアスリートや指導者は情報番組がスポーツを伝えることに何を期待しているのか。

RQ6：スポーツ番組と情報番組では同じ出来事の伝え方に違いがあるのか。

第2章 研究方法

RQ1、2を明らかにするために、情報番組「ひるおび」で取り上げたスポーツの内容分析を、RQ3、4を明らかにするために番組制作者へのアンケート調査を、さらに、R5については取材対象者へのアンケート調査を、そしてRQ6を明らかにするために情報番組「ひるおび」とスポーツ番組（news23 スポーツコーナー、S☆1）の比較を行なった。

第1節 情報番組「ひるおび」で取り上げたスポーツの内容分析

「情報番組」が取り上げたスポーツ競技、頻度、放送内容を明らかにすることを目的に、以下の内容について調査分析した。

第1項 調査対象

調査する番組はTBS系列で平日の午前10時25分から午後1時55分までの約3時間、週5日生放送している情報番組「ひるおび」である。「ひるおび」の標準的な内容・番組構成は、午前10時25分から映画や本などのエンターテインメント情報と暮らしに役立つ生活情報を1時間、そして報道局のニュースを30分放送。午後の2時間は政治、経済、事件、事故、スポーツなど、その日の最大関心事を3つ程度ピックアップして深く掘り下げている。

第2項 調査期間

情報番組「ひるおび」は2009年3月30日から放送されているが、今回の調査の対象期間は、現在の放送内容が固まった2010年1月1日から2022年12月31日までの13年間とする。

第3項 調査内容

2010年から2022年までの13年間に「ひるおび」がどんなスポーツ競技を取り上げていたのかについて、1年ごとに内容分析をした。

具体的には、日々の放送内容をチェックし、取り上げられた年月日、取り上げられたスポーツ、放送した主な内容、放送時間、主なスタジオゲストなどのデータを収集し、取り上げる回数の多い競技、さらに放送時間が長い競技の特徴を検証した。

具体的には、13年間の全放送回数におけるスポーツを取り上げた回数と放送された割合の算出。さらに13年間でスポーツを取り上げた回数の多い年、多い月などを分析した。

第2節 番組制作者へのアンケート調査

本節では第1節で明らかになった情報番組が取り上げたスポーツ競技、頻度、放送内容が、どのような過程を経て番組制作者によって決定されたのか。また番組制作者はどのような理由でそのスポーツを取り上げ、誰に取材をしたのか。そして取り上げたスポーツ競技を通して視聴者に何を伝えたいのかを調べるために、情報番組、スポーツ番組、情報番組のテレビ番組制作者に「各番組のスポーツの取り上げ方に対するアンケート調査」を実施した。

第1項 調査対象者・調査期間

テレビ番組の制作は大きく4つに分類される。報道番組、情報番組、スポーツ番組、バラエティ番組である。それぞれの制作スタッフは、報道局、情報制作局、スポーツ局、制

作局に属している。各制作局間での人事異動もあるため、制作スタッフはシフトにより様々な番組制作に携わることになる。

今回の調査では、スポーツを取り上げて番組を制作する可能性のある、スポーツ番組担当者 197 人、情報番組担当者 480 人、報道番組担当者 140 人、計 817 人を対象とした。期間は 2022 年 10 月 17 日から 10 月 31 日までの 2 週間とし、調査は Google フォームで実施し、285 人から有効回答を得た（有効回答率 35%）。

第 2 項 調査内容

調査項目は大きく分けて、以下の 4 点が含まれていた。以下の通りである。

1) 対象者の属性に関する項目

1. 年齢、2. 性別、3. 現在所属している番組、4. 現在の番組における立場・役職、5. スポーツ経験有無、6. 経験したことのあるスポーツ、7. スポーツ経験の主な実績、8. 番組でスポーツを取り上げた経験の有無

2) 取り上げた話題に関する項目

以下の選択肢から取り上げた経験がある話題と内容について解答してもらった。

○大谷翔平 ○佐々木朗希 ○村上宗隆 ○松山英樹 ○大坂なおみ
○錦織圭 ○WBC ○サッカーW 杯 ○ラグビーW 杯 ○箱根駅伝
○オリンピック・パラリンピック ○日大悪質タックル ○大相撲八百長問題 ○体罰問題
○その他（記述）

また、選択した話題を取り上げた理由とその程度について、以下の項目毎にたずねた。

○成績（記録）が歴史的偉業である	○放送する権利を持っていたから
○社会性・事件性がある	○視聴率が良かったから
○育成・指導法が面白い	○ストーリー（ケガからの復活など）があるから
○一般紙の一面が取り上げているから	○人としての魅力があるから
○元気になる。夢がある	○その他（記述）

3) 取材に関する項目

何を取材したかについて、「試合内容・結果、指導法、人柄、価値・影響力、問題点、課題点、その他」から、あてはまるものを選んでもらった。さらに、取材時の意識するポイント（重要視すること）について、「選手への配慮 ○他の部署への配慮 ○視聴者が求めているもの○スクープ性 ○その他（記述）」から選んでもらった。

4) 情報番組が伝えるスポーツに関する項目

情報番組がスポーツを通して伝えたいこと、伝えるべきことについて、「○日々の結果 ○大記録・歴史的偉業 ○人物・ドラマ（人柄） ○変化する世の中（影響） ○使える情報、為になる情報（便益） ○独自であることの素晴らしさ・個性 ○問題提起（変革） ○その他（記述）」から、一つ選んでもらった。

第 3 節 取材対象者（元アスリート・現指導者）への調査

取材される側はスポーツ報道に対してどういった印象を持っているのか。取材される際に「情報番組」と「スポーツ番組」の違いを認識しているのか。さらに「情報番組」や

「スポーツ番組」がスポーツを伝えることに対してトップアスリートであった人達、またトップアスリートの指導者は何を期待しているのか、アンケート調査を行った。

第1項 調査対象者

川口能活（サッカー元日本代表）、福西崇史（サッカー元日本代表）、五郎丸歩（ラグビー元日本代表）、原晋（青山学院大学陸上部監督）の4名である。対象者は研究成果公表において、個人情報が含まれることを了承した。

第2項 調査内容

調査項目は以下の13項目であった。

- 1) スポーツ番組に取材された経験の有無
- 2) スポーツ番組の取材で特に印象に残っている取材の内容
- 3) 取材された内容を放送で確認するのか。
- 4) 放送内容で、納得できた時、納得できなかった時のそれぞれの場面と理由
- 5) 情報番組の視聴経験の有無
- 6) 情報番組がスポーツを取り上げていることを知っているか。
- 7) 情報番組に取材された経験の有無
- 8) （あると答えた方）特に印象に残っている取材の内容
- 9) スポーツ番組と情報番組のどちらに取材される方が良いか、またその理由
- 10) 情報番組やスポーツ番組で選手・指導者として何を伝えられることが嬉しいと考えるか。
- 11) 情報番組とスポーツ番組でのスポーツの伝え方に違いを感じるか、またその理由
- 12) スポーツ番組へ期待すること。
- 13) 情報番組がスポーツを伝えることに期待すること。

第4節 「ひるおび」「news23 スポーツコーナー」「S☆1」の放送内容の比較

第1項 放送時間の比較

第2節で示した、番組作成者へのアンケートの中の質問にあった「スポーツを取り上げた中で最も印象に残った内容」の上位10のうち、事件性を含まない6つの話題について、「news23 スポーツコーナー」、「S☆1」、「ひるおび」のにおける放送日、放送時間（3番組は放送時間帯も放送尺も違うが、選ばれた話題を伝えた時間）を単純に比較した。

第2項 特徴的な3つの話題における放送内容の分析

人物・ドラマ（人柄）、大記録・歴史的偉業に該当する2事例と映像使用制限があるにも関わらず、多くの時間を割いて放送した1事例の計3つの話題を対象に、最も長い時間放送した情報番組「ひるおび」が、その競技をどのように伝えたのか。選んだ話題ごとに「ひるおび」の放送内容を細かく分析した。

第3章 結果

第1節 「ひるおび」の13年間の内容分析結果

情報番組「ひるおび」(2010年1月1日から2022年12月31日)までの13年間の放送でスポーツを取り上げた回数を集計し、内容を分析した。

第1項 1年ごとの内容分析

1. 2010年

1) 放送回数と取り上げられた話題

2010年にひるおびは256回放送され、そのうちスポーツに関する話題の放送回数は49回(スポーツ放送割合19.1%/年)であった。月別では2月と6月が11回と多かった(図1)。

2010年2月はバンクーバーオリンピックが開催され、6月はサッカーワールドカップ南アフリカ大会が開催されており、この2つの国際大会に関する話題が取り上げられていた。各月に取り上げられていた話題の詳細をみると、2月と3月は五輪特集と相撲で横綱朝青龍が不祥事で引退、5月は宮里藍選手がトレス・マリアス選手権(アメリカ女子ツアー)で優勝、6月はサッカーW杯岡田 JAPAN 南アフリカ大会、11月は世界バレーで全日本女子が銅メダル獲得、12月は野球で斎藤佑樹選手の入団セレモニーやフィギュア全日本選手権を取り上げていた。

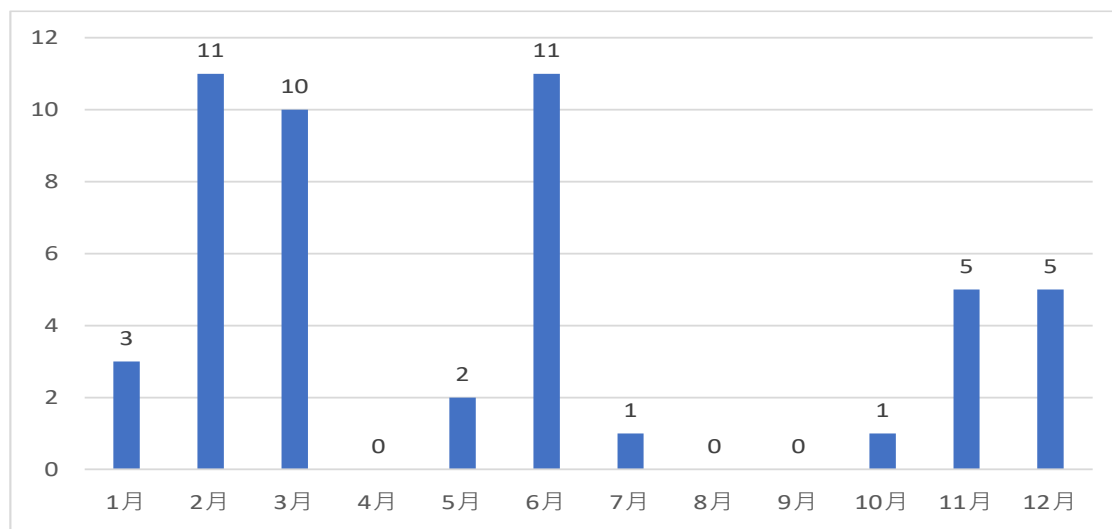


図1 2010年月別放送回数

2) 大会別・種目別の分析

次に、放送された内容を大会別・種目別に分類すると、バンクーバー五輪が20回(41%)、サッカーワールドカップ南アフリカ大会が13回(27%)、大相撲が6回(12%)、バレーボールが4回(8%)、ゴルフが2回(4%)、その他が4回であった(図2)。

バンクーバーオリンピックではフィギュアの選手が大活躍。浅田真央 vs キム・ヨナ、愛知県出身のフィギュア選手の特集、高橋大輔初の銅メダルを特集した。また上村愛子親子秘話、小平奈緒選手を支える地元企業、選手を支える日本の匠の技術など成績以外にも注目した内容で構成されていた。また、スノーボード・ハーフパイプ男子代表

国母和宏選手の服装と会見での発言は物議を醸し、全日本スキー連盟からは国母選手の五輪出場辞退の申し入れがあったが、日本代表選手団の橋本聖子団長は会見を開き、国母選手を予定通り五輪に出場させると発表した。社会性、事件性、問題提起といった要素を含む出来事についても取り上げていた。サッカー南アフリカ大会は予選リーグ突破もあって情報番組も多く扱いたい話題であったが、映像使用に制限があり試合映像があまり使えなかった。そこで、岡田監督や本田圭佑選手などの特集を組んで、人柄に寄せた構成で放送していた。

ゴルフで宮里藍選手のトレス・マリアス優勝を取り上げた理由は、アメリカ女子ツアーでの優勝という偉業であったことである。この年宮里選手は米女子ツアーで日本人最多のシーズン5勝をあげ、米女子ツアー通算6勝を上げたが、取り上げたのは、このアメリカ女子ツアーでの優勝だけだった。

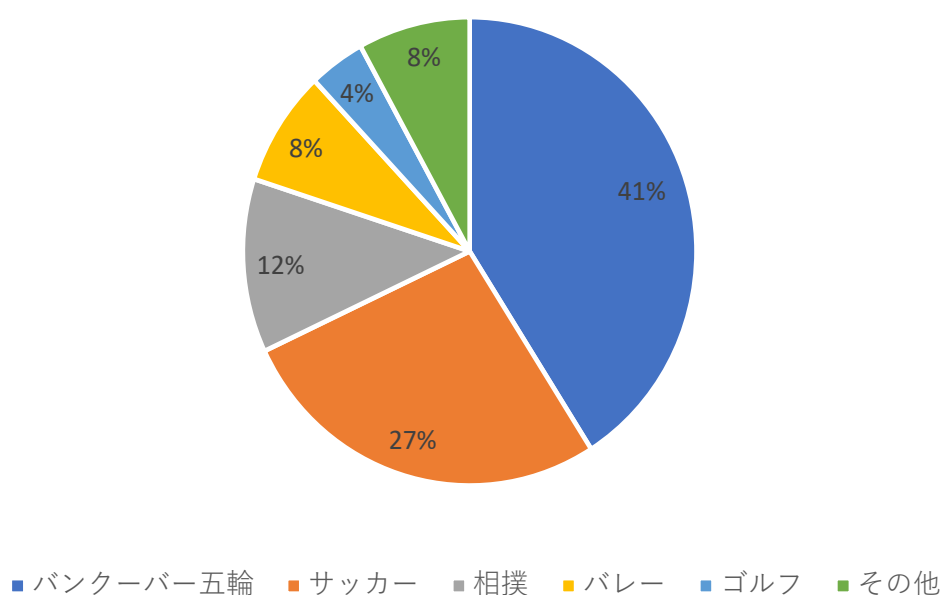


図2 2010年スポーツ別割合

2. 2011年

1) 放送回数と取り上げられた話題

2011年にひるおびは256回放送され、そのうちスポーツに関する話題の放送回数は71回（スポーツ放送割合26.8%/年）であった。

月別では7月の12回が最多であった（図3）。同年7月はFIFA W杯女子ドイツ大会で、日本の女子サッカーチーム（なでしこ）が優勝。9月の11回もなでしこのロンドン五輪アジア最終予選に関する話題であった。

1月の9回、2月の7回はサッカーと野球を多く取り上げていた。サッカーはアジアカップ、野球は斎藤佑樹投手の自主トレとキャンプ取材。しかしながら、3月に起きた東日本大震災の影響で3月からスポーツを取り上げる機会が激減し、6月は一度も取り上げなかった。11月、12月はフィギアスケート浅田真央選手を取り上げていた。

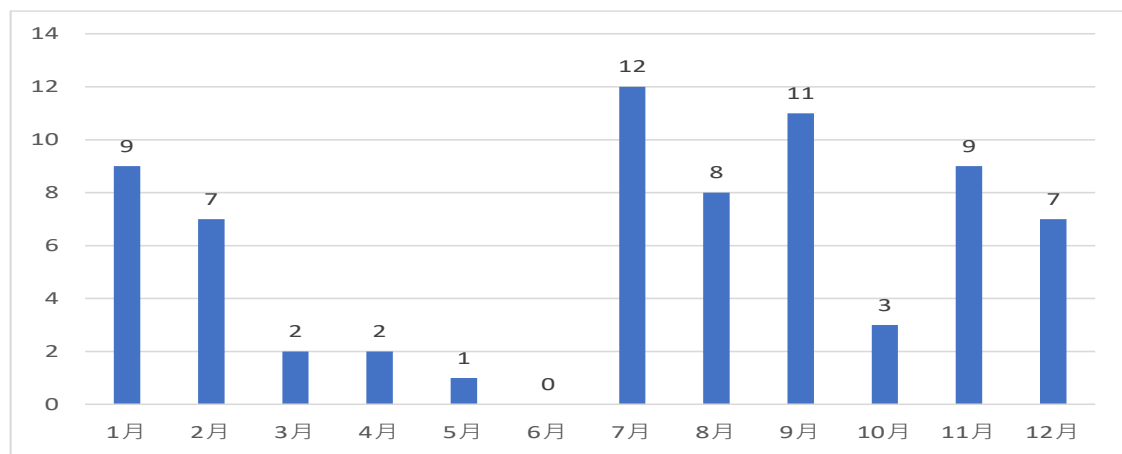


図 3 2011 年月別放送回数

2) 大会別・種目別の分析

サッカーが 34 回(48%)で最多であった(図 4)。男子のアジアカップもあったが、なんといっても「なでしこ」大活躍の一年であり、ワールドカップドイツ大会優勝、凱旋会見も行い、民放各局の情報番組に生出演し、8 月には国民栄誉賞が授与され、9 月にはオリンピックアジア最終予選を 1 位で通過し、11 月には紫綬褒章が送られた。さらに、9 月には活躍した選手の 1 人である川澄選手の特集も組んだ。

フィギアスケートは 10 回取り上げていた。GP ファイナルを欠場したが、12 月に最愛の母親を亡くした浅田真央選手の全日本選手権優勝を伝えた。

陸上の 9 回は世界陸上。映像使用に制限がないので競技映像を中心に、室伏選手の金メダル、ボルト 100m 失格などを伝えていた。体操の 6 回は世界選手権で、内村航平選手の高速ひねり、田中兄弟の特集も組んだ。翌年にロンドン五輪を控えていた状況での世界選手権は陸上も体操も注目度が高かった。その他は 5 回。その中の 2 回は相撲で、八百長問題であった。2 月に春場所の開催中止が決定していたため東日本大震災での直接的な影響はなかった。

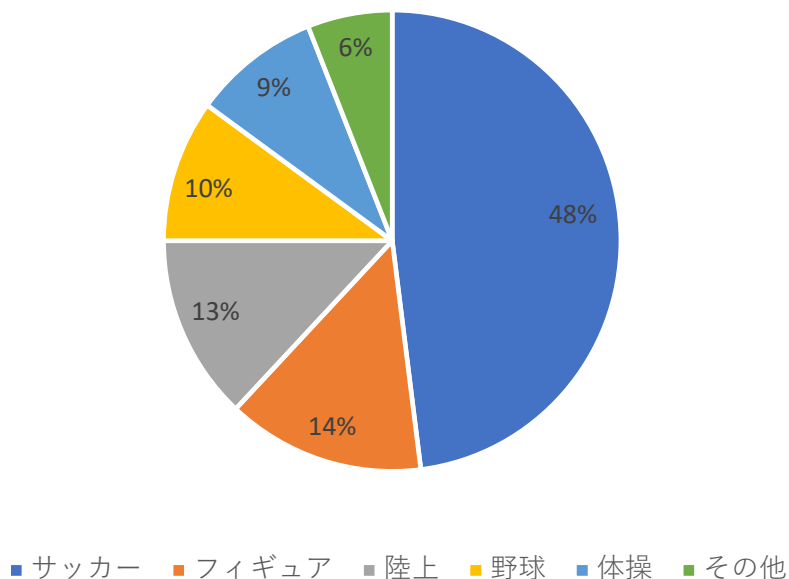


図 4 2011 年スポーツ別割合

3. 2012 年

1) 放送回数と取り上げられた話題

2012 年にひるおびは 262 回放送され、そのうちスポーツに関する話題の放送回数は 80 回（スポーツ放送割合 30.5%/年）であった。月別では 8 月の 18 回でロンドンオリンピックが最多であった（図 5）。

7 月の 14 回もロンドンオリンピック関係で、特に五輪代表選手壮行会は注目されていた。2012 年は夏場以外にも満遍なくスポーツを取り上げている一年であった。1 月は男子テニス、全豪オープンで錦織圭選手が 8 強入りし、2 月、3 月はオリンピックのマラソン選考会とスキージャンプ高梨沙羅選手の W 杯での好成績、7 月はイチロー選手のヤンキース移籍、9 月は岐阜国体で高校 3 年生の山口観弘が 200 メートル平泳ぎで世界新記録、10 月は楽天ジャパンで錦織圭選手が優勝。12 月には松井秀喜選手の引退を取り上げた。

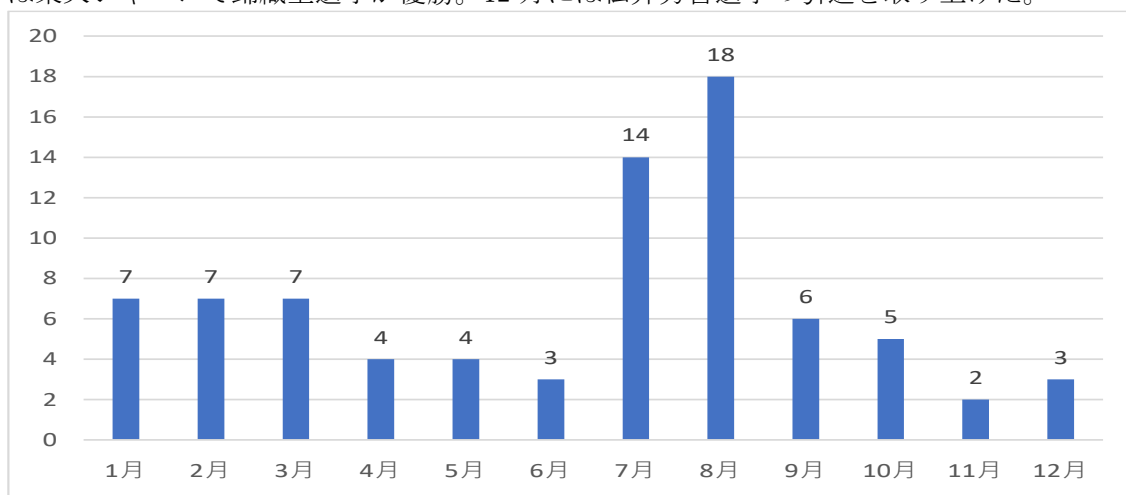


図 5 2012 年月別放送回数

2) 大会別・種目別の分析

ロンドン五輪は33回(41%)で最多であった(図6)。メダル獲得総数は金7、銀14、銅17。合わせて38個と2004年のアテネオリンピックの37個を抜いて過去最多となった。サッカーは10回(12%)で、多くは女子チームなでこの話題であった。なでしこは2011年の勢いそのまま、3月のアルガルベカップ準優勝、W杯U-20での3位も伝えた。

続いてフィギュアは9回(11%)で、11月のGPシリーズ、12月の全日本選手権と2012年もフィギュアを引っ張っていたのは浅田真央選手であった。

野球は7回で、7月にイチロー選手が Yankees に移籍したこと、そして Yankees での活躍が印象的であったゴジラこと松井秀喜選手が12月に引退を表明した事を伝えた。

陸上はマラソンを取り上げた回数が6回。五輪マラソン選考会では川内優輝選手、藤原新選手に注目し伝えた。

テニスは2回でどちらも錦織圭選手に注目し、1月の全豪OP8強と10月の楽天ジャパン優勝を伝えた。

その他は13回でスキージャンプの高梨沙羅選手のW杯表彰台、競泳スーパー高校生山口観弘選手の世界新記録、バトミントン潮田玲子選手、カヌー松下桃太郎選手、クレール中村由起枝選手、バレー木村沙織選手、卓球福原愛選手、フェンシング千田健太選手など、競技や成績よりも人物に注目した内容を放送した。

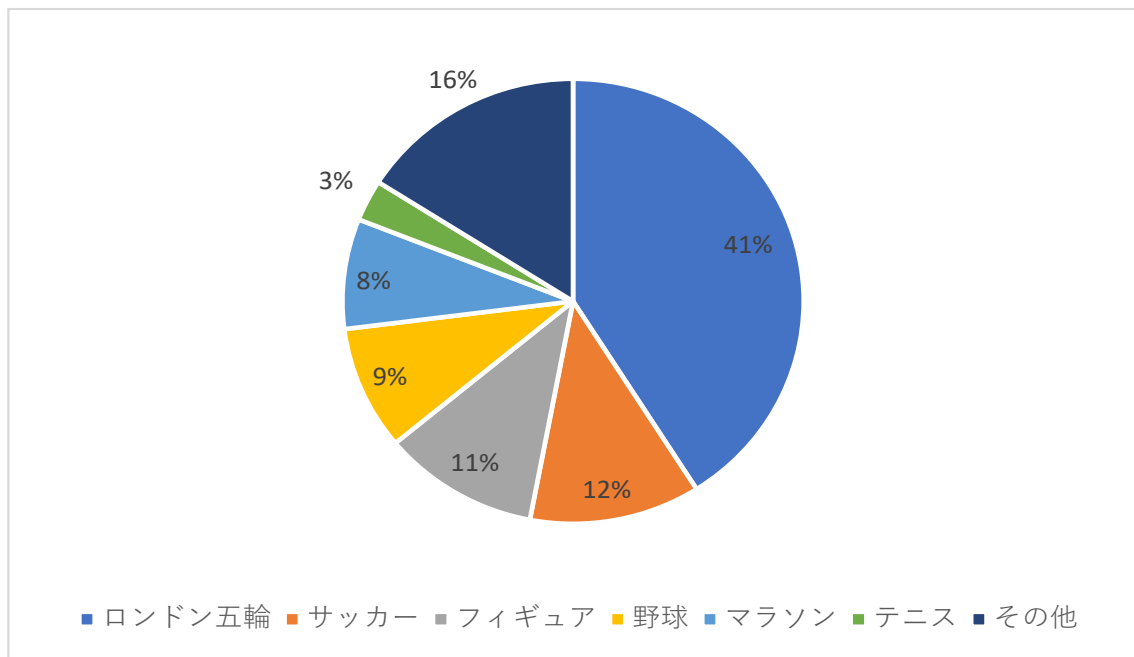


図6 2012年スポーツ別割合

4. 2013年

1) 放送回数と取り上げられた話題

2013年にひるおびは256回放送され、そのうちスポーツに関する話題の放送回数は71回(スポーツ放送割合27.7%/年)であった。月別では3月と8月の10回が多かった(図7)。

3月は野球の国際大会WBC第3回大会、8月は世界陸上が開催された年であった。

10月は9回で、体操の世界選手権があった。2月の8回はフィギュア、レスリング、スキージャンプ、10月、11月は楽天日本一で田中将大特集、ワールドシリーズでボストン・レッドソックスが優勝。上原浩治投手の特集を組んでいた。2月の6回はフィギュアスケートの羽生結弦選手と浅田真央選手を特集していた。

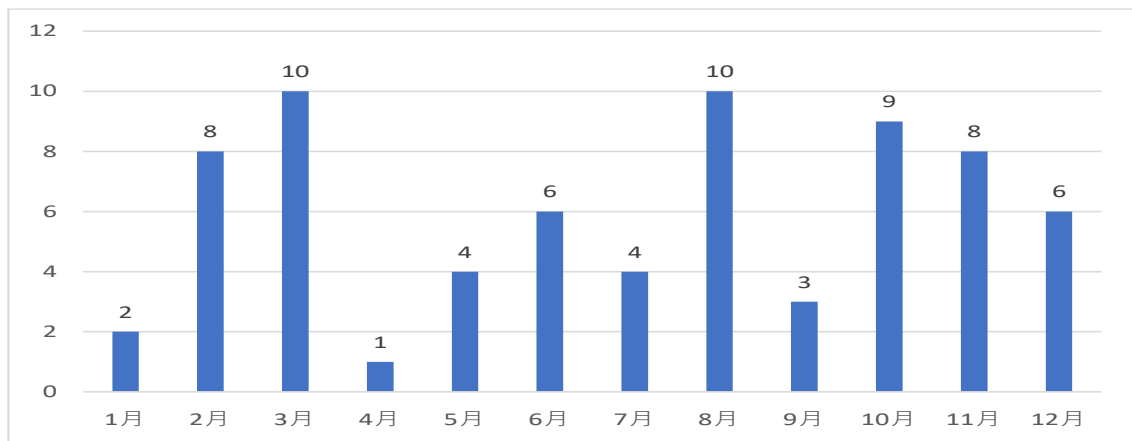


図 7 2013 年月別放送回数

2) 大会別・種目別の分析

野球が 22 回 (31%)、陸上とフィギアが 13 回 (19%)、サッカー 8 回 (10%)、体操 5 回 (7%)、レスリング 3 回 (4%) であった (図 8)。

野球は WBC 第 3 回大会があり山本浩二監督の下、2006 年、2009 年に続き 3 連覇を狙ったが結果はベスト 4 に終わった。そのため、WBC を取り上げた回数は他の開催年に比べ少なかった。しかし、日本のプロ野球が盛り上がった年で、楽天が日本一になり、田中将大投手が脅威の 22 連勝。さらにメジャーリーグではボストン・レッドソックスがワールドシリーズを制覇。カーディナルスとのワールドシリーズでも 6 試合中 5 試合登板して無失点、さらに世界一を決めた第 6 戦でセーブを挙げて栄光の胴上げ投手となった世界一の守護神上原投手、そして上原投手を支えた家族にも注目した。またこの年は、長嶋茂雄さんと松井秀喜さんの師弟コンビで国民栄誉賞を受賞した年でもあった。

世界陸上があった 8 月、桐生選手や山縣選手に注目。さらに選手の地元を取材し、選手が使っているスパイクなどに注目していた。

フィギアは 2 月の四大陸選手権、浅田真央選手と佐藤信夫コーチの 2 年 5 ヶ月にわたる二人三脚を伝え、7 月は安藤美姫選手の出産、12 月のグランプリファイナルでは浅田真央選手、羽生結弦選手を取り上げた。2010 年以降番組がフィギアを取り上げた割合は毎年 10% 以上。情報番組においてフィギアは確実に日本のプロ野球よりも取り上げられていた。

サッカーは翌年の W 杯ブラジル大会の出場をかけたアジア最終予選で B 組 1 位通過。ザック JAPAN が世界最速で W 杯出場を決めたことを伝えた。

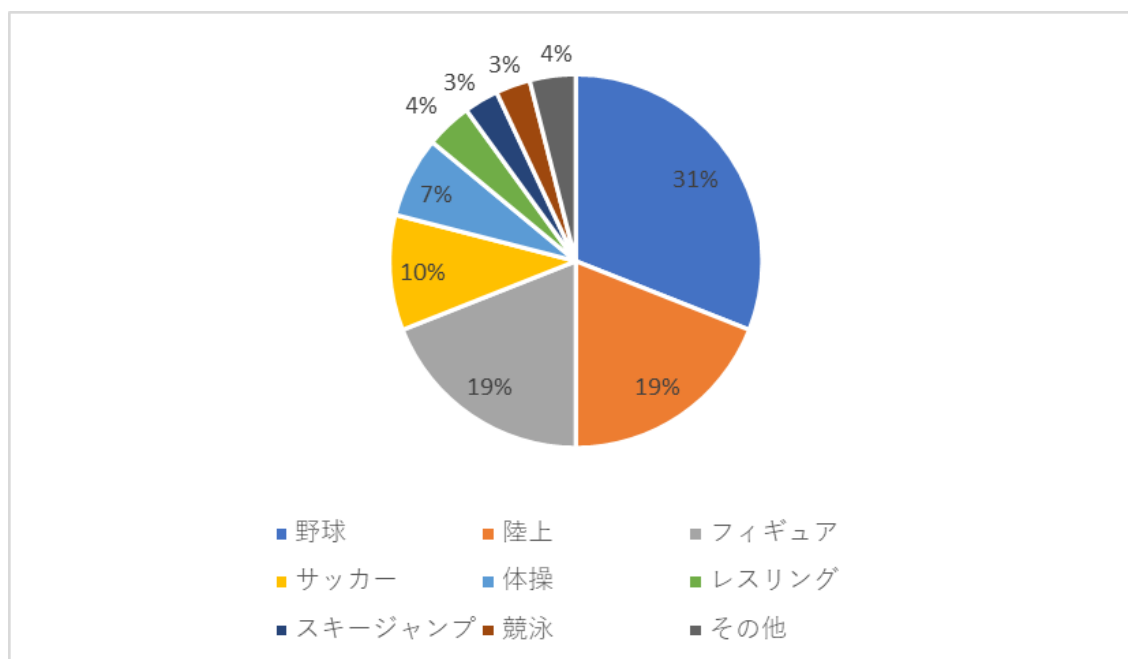


図 8 2013 年スポーツ別割合

5. 2014 年

1) 放送回数と取り上げられた話題

2014 年にひるおびは 256 回放送され、そのうちスポーツに関する話題の放送回数が 80 回（スポーツ放送割合 31.3%/年）であった。月別では 2 月の 17 回が最多でソチオリンピックを取り上げていた（図 9）。

1 月の 12 回も多くはソチオリンピック企画で 7 月、8 月は全くスポーツを取り上げていなかった。この年の 7 月には集団的自衛権を認める憲法解釈変更を閣議決定。8 月は、平成 26 年 8 月豪雨。7 月 30 日から 8 月下旬にかけて台風 11 号、台風 12 号の影響により広範囲で豪雨が発生。情報番組は連日この災害を伝えていた。

9 月はテニス、全米オープンで錦織圭選手が準優勝、11 月には ATP ツアーファイナルに出場という快挙を達成。この年から情報番組においてテニスを取り上げる回数が増え始めた。6 月はサッカーワールドカップブラジル大会が開催。前回 2010 年の岡田ジャパンがベスト 16。しかも W 杯予選は一位通過。世界最速で出場を決めたため期待が大きく、W 杯開催前から様々な企画が多く取り上げられた。サッカーが年間 80 回取り上げられ、前年より 9 回増えていた。

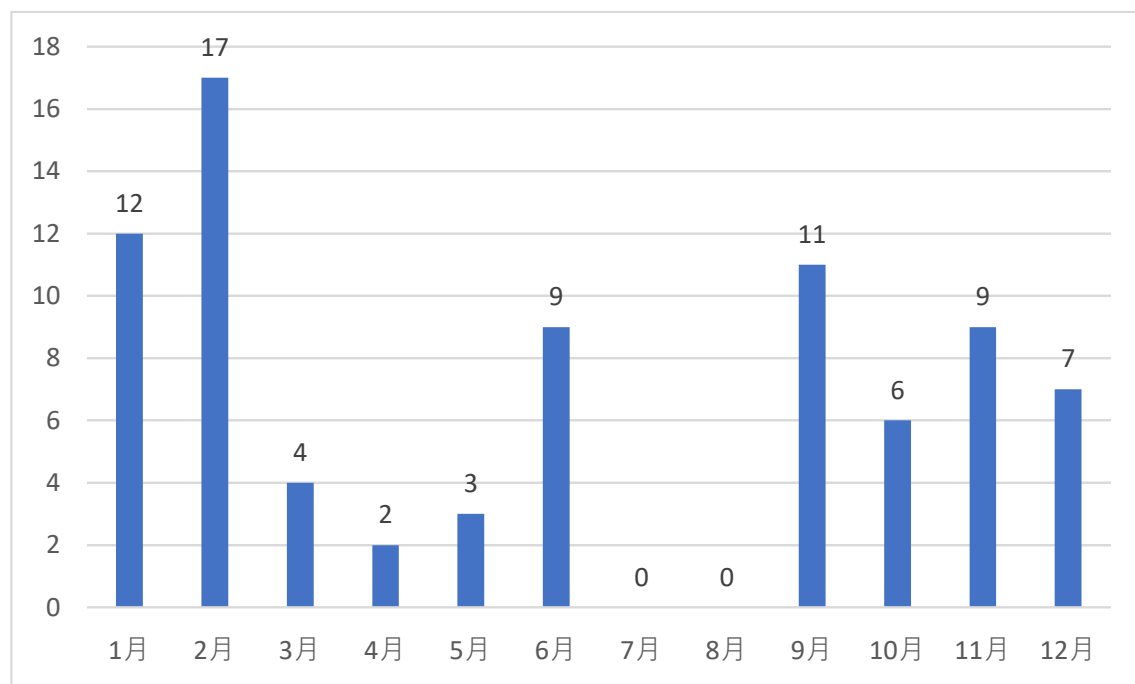


図 9 2014 年月別放送回数

2) 大会別・種目別の分析

最多はソチオリンピックで 42 回 (52%) であった（図 10）。1 月から事前企画を放送。41 歳の葛西紀明選手の強さやスケート選手を支える日本の技術、スケート選手のスーツの生地やサングラスに注目した内容を伝えた。2 月は冬季五輪としては過去最多の人数となる男子 52 人、女子 72 人の合計 124 人の選手が参加。そして金メダル 1 個、銀メダル 4 個、銅メダル 3 個、計 8 個のメダル獲得したソチオリンピックの競技を取り上げた。具体的にはフィギアスケートの浅田真央選手のまさかの 6 位、羽生結弦選手の金メダル、スキージャンプで葛西紀明選手の個人ラージヒルで銀メダル、団体で銅メダルを獲得や、モーグル上村選手、ノルディック複合では渡部暁斗選手が 20 年ぶりの銀メダル獲得したことなど

を伝えた。大会後もメダリスト手の歓喜と涙の総集編を放送したり、帰国した平野歩選手（15 歳）をスタジオ生出演でゲストに迎えたりと様々な内容を放送した。

次に多かったのが 16 回 (20%) のテニス。9 月に錦織圭選手が全米オープン準優勝。5 月のマドリードオープン優勝で男子初の世界ランク 9 位。10 月は楽天ジャパンオープン日本人初の 2 大会連続優勝という快挙とともに、錦織選手の人柄や錦織選手を支えた人々を取り上げていた。

サッカーは 15 回 (19%) 取り上げた。W 杯は 1 次リーグ敗退であったが、本田圭佑選手や大久保嘉人選手に注目する一方で、ザックジャパン専属シェフが明かす日本の勝負飯、本田選手の魔球を産んだスパイクなどに注目した。

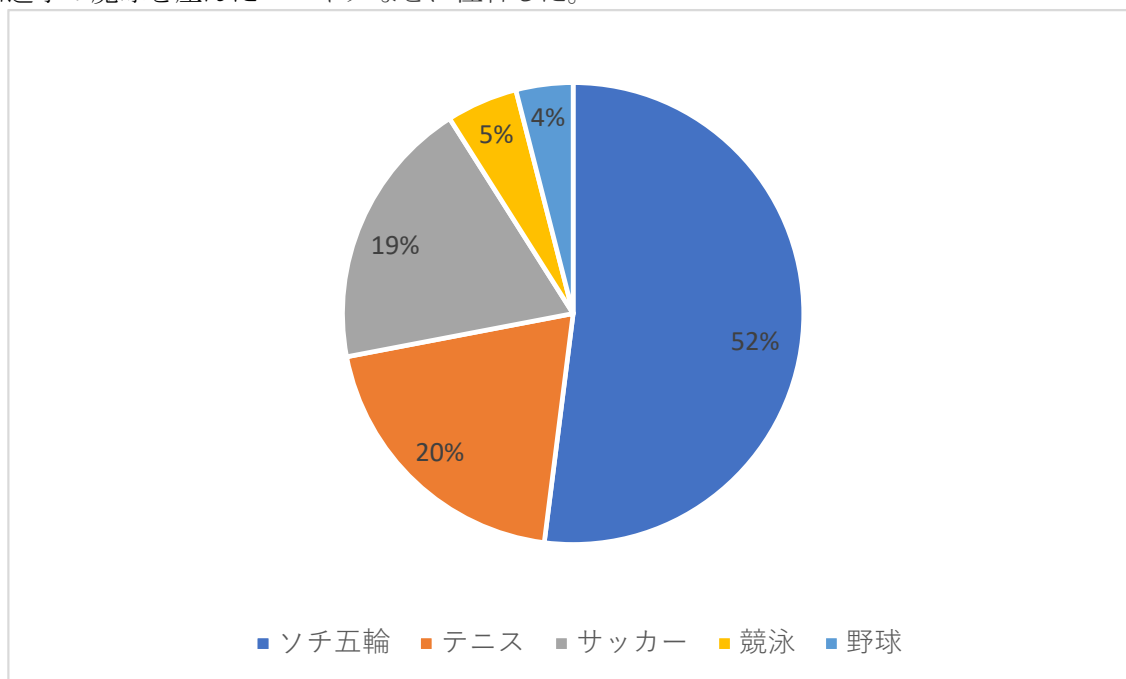


図 10 2014 年スポーツ別割合

6. 2015 年

1) 放送回数と取り上げられた話題

2015 年にひるおびは 257 回放送され、そのうちスポーツに関する話題の放送回数は 66 回（スポーツ放送割合 25.7%/年）であった。月別では 5 月と 8 月の 8 回が最多であった（図 11）。

リオデジャネイロ五輪の前年なので、オリンピック予選も兼ねて開催された水泳の世界選手権、体操の世界選手権。それ以外でも、サッカー女子 W 杯や世界陸上北京大会などを取り上げた。さらに、野球は世界プレミア 12。そしてラグビー W 杯イングランド大会と多くの競技で世界大会が行われていた一年でもあった。

個人競技では 1 月、前年のテニス全米オープンで準優勝した錦織選手の全豪オープン 8 位。2 月、3 月は黒田博樹投手（野球）を取り上げた。5 月も錦織圭選手の全仏オープン。6 月は錦織選手のウインブルドン。6 月、7 月はサッカー女子 W 杯カナダ大会。8 月は世界陸上北京大会と水泳世界選手権。11 月は野球の世界プレミア 12 の小久保 JAPAN。12 月はフィギア GP シリーズに関する内容を放送していた。

回数は 5 回であるが、この年一番盛り上がった世界大会は 9 月に行われたラグビー W 杯イングランド大会。南アフリカ戦の勝利は「ブライトンの奇跡」と報じられ、2019 年の日本開催に期待を持たせる出来事とし大きく取り上げた。

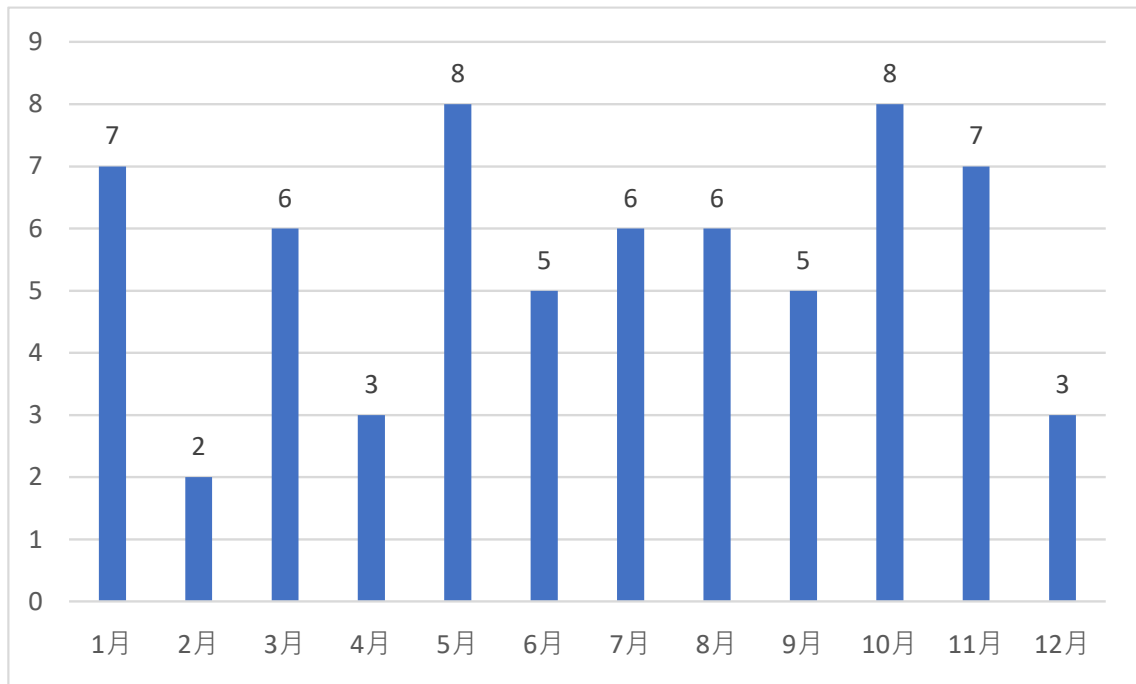


図 11 2015 年月別放送回数

2) 大会別・種目別の分析

最多はテニスで 23 回 (35%) であった (図 12)。前年の全米オープン準優勝の錦織圭選手の活躍が目立った。1 月は全豪オープン 8 位。5、6 月の全仏オープン 8 位。6 月のウィンブルドンは棄権。メジャー大会以外でも、2 月メンフィスオープン大会 3 連覇。4 月バルセロナオープン 2 連覇。8 月シティオープン優勝。試合、成績も伝えたが、「マイケル・チャンコーチが伝えた 3 つの法則」などコーチとの関係も放送した。

次は 11 回 (17%) でラグビー W 杯イングランド大会。ただし、番組での映像使用には制限があり、試合の映像を長く使えなかった。そこで、試合全体ではなく、29 対 32 の 3 点ビハインドで迎えた試合終了間際、日本代表が敵陣のゴールライン手前でペナルティを獲得した時のヘッドコーチのエディ・ジョーンズの指示に注目した。エディ・ジョーンズは同点に持ち込むペナルティキックの指示をだし、キャプテンのリーチ・マイケルはスクラムを選択した。その結果、日本はトライを決めて 34 対 29 で逆転勝利。監督の指示とキャプテンの判断を分析した。

また、番組では日本ラグビーを支えた大学と企業の 80 年代のラグビーブームを振り返る内容も放送した。ゲストの出演も多く、メンタルコーチの荒木香織さんや元日本代表選手、そして帰国後には日本代表の選手にも生出演してもらった。さらに大会後の 11 月には W 杯効果で子供達のラグビー人気を取り上げていた。

野球は 8 回 (12%) 取り上げた。2 月にはメジャーリーグの提示した 20 億円を断って広島カープに入団した黒田博樹投手の生き方を特集した。

6 月に行われたサッカー女子 W 杯。なでしこ JAPAN の連覇はならず 2 位に終わったが、なでしこの活躍をしっかり取り上げていた。

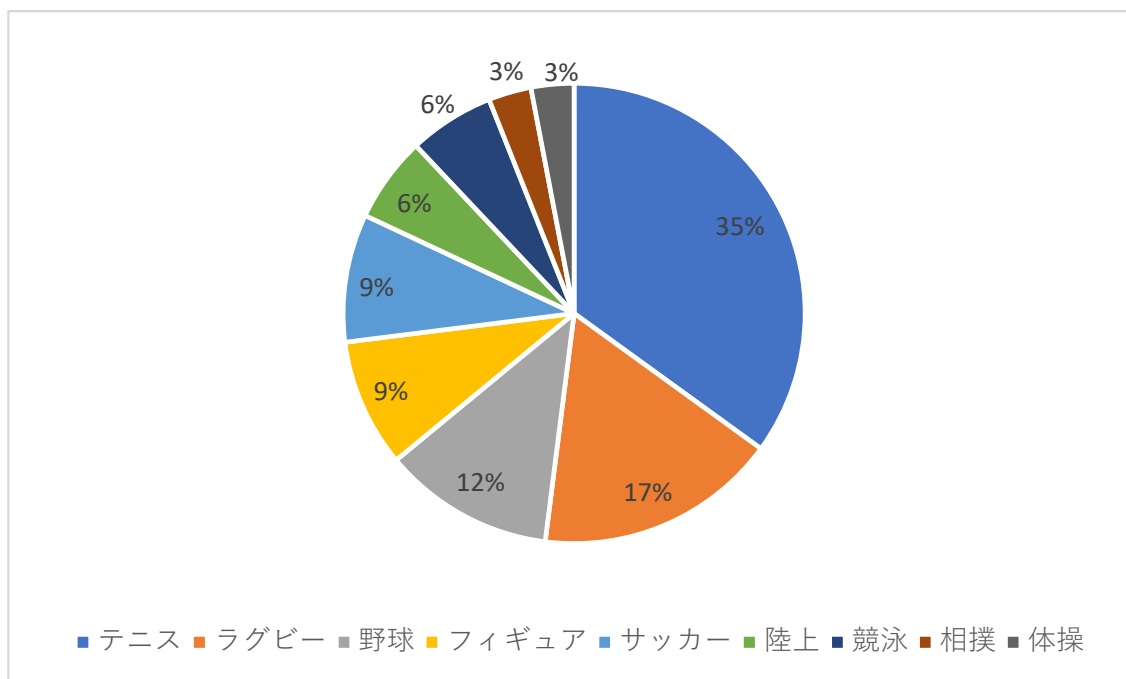


図 12 2015 スポーツ別割合

7. 2016 年

1) 放送回数と取り上げられた話題

2016 年にひるおびは 259 回放送されて、そのうちスポーツに関する話題の放送回数は 50 回（スポーツ放送割合 19.3%/年）であった。月別では 8 月が最多で 17 回だった（図 13）。この年はリオデジャネイロ五輪が 8 月 5 日から 8 月 21 日まで開催された。3 月の 10 回はオリンピックの選考会、卓球の世界選手権、大相撲で白鵬の優勝が取り上げられた。2 月と 11 月は全くスポーツを取り上げなかった。2 月には元プロ野球選手が、11 月には有名アーティストが覚醒剤取締法違反で逮捕されていた。違法薬物は情報番組が大きく取り上げる話題である。スポーツに関する話題の年間取り上げ回数が 50 回というのは、この 13 年間で 3 番目に低い数字であった。

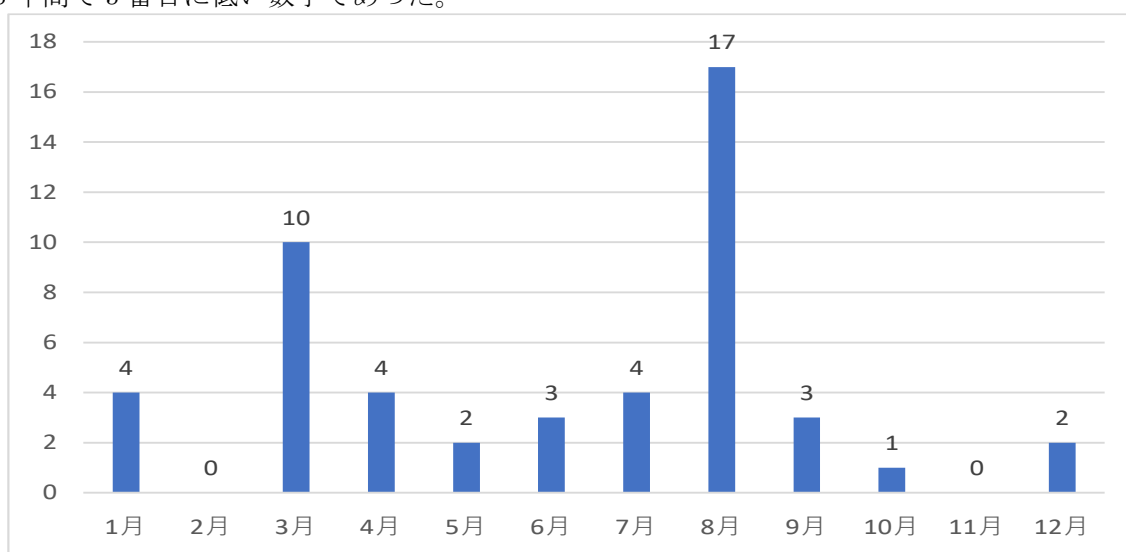


図 13 2016 年月別放送回数

2) 大会別・種目別の分析

最多は24回(48%)のリオデジャネイロ五輪関連の話題であった(図14)。メダルは過去最多の2012年のロンドンオリンピックの38個を上回る41個(金12、銀8、銅21)獲得。競泳萩野公介選手の400個人メドレー金メダル、瀬戸大也選手の銀メダル、体操男子団体金メダル、卓球男子団体初の銀メダル、バドミントン(女子ダブルス)タカマツペア金メダル、テニス錦織圭選手銅メダル獲得などを伝えた。

一方3月2日にはロシアのシャラポワ選手に(全豪オープン期間中、準々決勝でセリーナ・ウィリアムズ選手に敗れた日のドーピング検査の結果)メルドニウムに陽性反応が出た結果を通知したこと、4月にはバドミントンNTT東日本所属選手が違法カジノ店で賭博をしていた問題が発覚(対象の選手には無期限の出場停止)したこと、大会直前の7月には警官ストライキでリオ五輪治安悪化などの不祥事も伝えた。

相撲は7回(14%)取り上げた。1月は琴奨菊全勝優勝。3月は白鵬優勝、9月は豪栄道全勝優勝を扱ったが、それぞれ扱い方には違いがあった。琴奨菊は経済効果で、各地でお祝いセール。白鵬は「ダメ押し」に苦言を呈した横審を取り上げた。8月には元横綱千代の富士の訃報を伝えた。

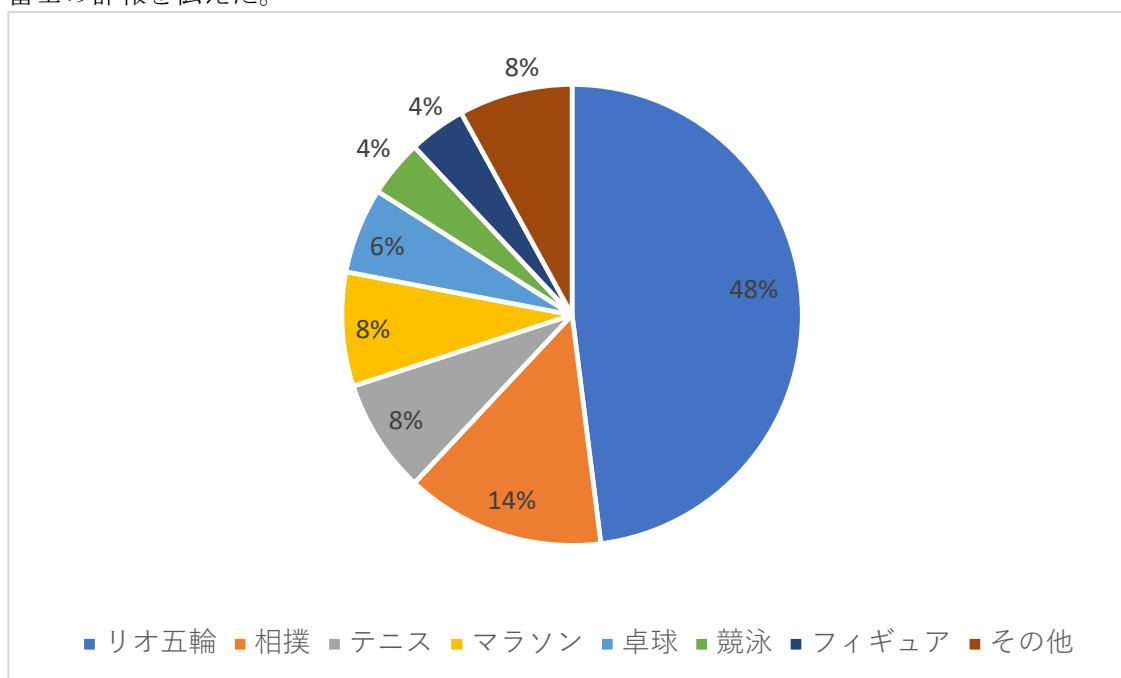


図14 2016年スポーツ別割合

8. 2017年

1) 放送回数と取り上げられた話題

2017年にひるおびは255回放送され、そのうちスポーツに関する話題の放送回数は63回(スポーツ放送割合24.7%/年)であった。月別では12月の20回が最多で次が11月の13回であった(図15)。7月と10月是一回もスポーツの話題を取り上げなかった。12月、11月はどちらも相撲の話題であった。しかし白鵬が39度目の優勝(通算最多優勝)を果たした7月は相撲を取り上げていなかった。1月の10回も相撲。初場所で大関稀勢の里が優勝。その結果横綱に昇進したことを伝えた。

2017年の国際大会は3月のWBC第4回大会、4月はフィギュアの世界選手権、6月は卓球の世界選手権、8月は世界陸上があった。

11 月には松山英樹選手が来日中のトランプ大統領とゴルフをしたという話題も取り上げた。

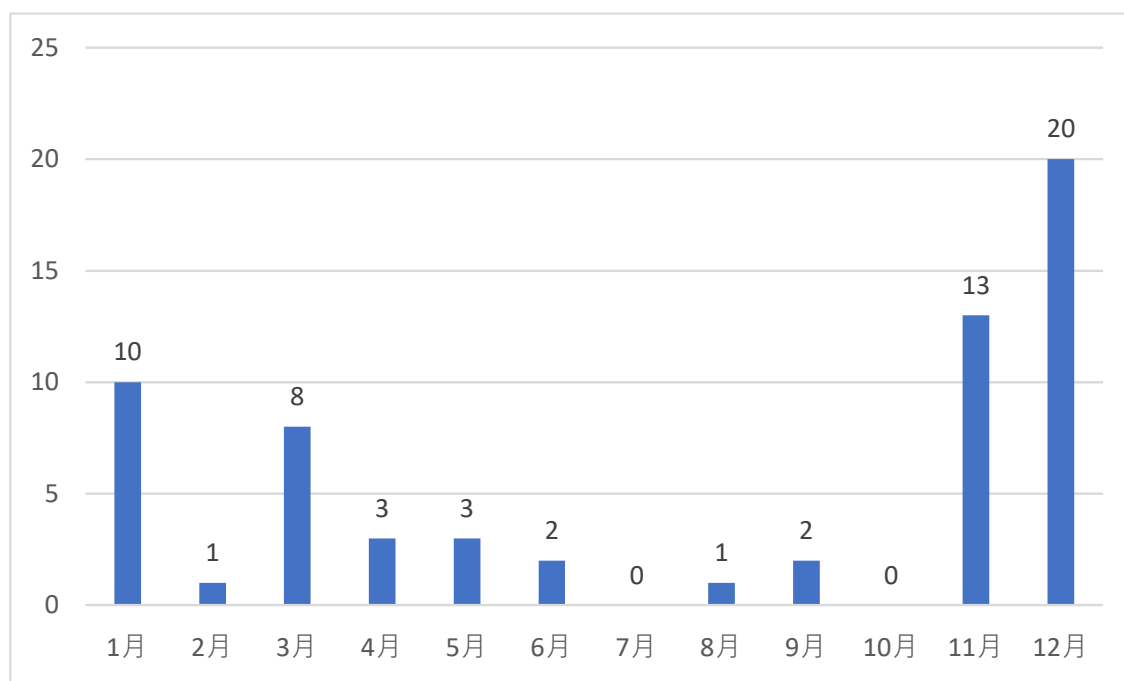


図 15 2017 年月別放送回数

2) 大会別・種目別の分析

最多は相撲の 43 回（68%）で相撲が 13 年間を通して最も多く扱われた年だった（図 16）。ちなみに他に 60%を超えていたのは 2020 年の陸上で 62%である。ただしこの年はコロナの影響が大きく、年間でスポーツを取り上げた回数は 8 回。そのうち半数以上が陸上だった。

相撲で扱った話題は、まず 1 月は初場所で稀勢の里が優勝したことである。大相撲の映像、つまり取組の映像を放送で使うことには制限がある。そのため「兄弟子が語る新横綱の素顔」、「なき恩師との忍耐の日々」、「稀勢の里奉納土俵入り・化粧まわし」などの企画を組み、人柄や支えた人々を伝えていた。3 月は稀勢の里涙の連続優勝、5 月は高安の大関昇進といった好成績、偉業を取り上げた。

11 月以降の相撲は取組ではなく、貴乃花親方の不可解の行動、場所中に提出された貴ノ岩の診断書、そして貴ノ岩を診断した医師は重症を否定するなど、九州場所 3 日目に発覚した日馬富士暴行事件関連を伝えていた。さらに貴乃花親方が相撲協会の貴ノ岩聞き取りを拒否し、12 月には日馬富士が引退した。開かれた理事会は 3 時間半にも及び、相撲協会と貴乃花親方の対決構図が鮮明になった。番組はモンゴル出身力士、その歴史と世代間の違いを検証し、相撲協会がまとめた 15 枚報告書の中身を専門家の意見も交えながら分析するなどの内容を放送していた。

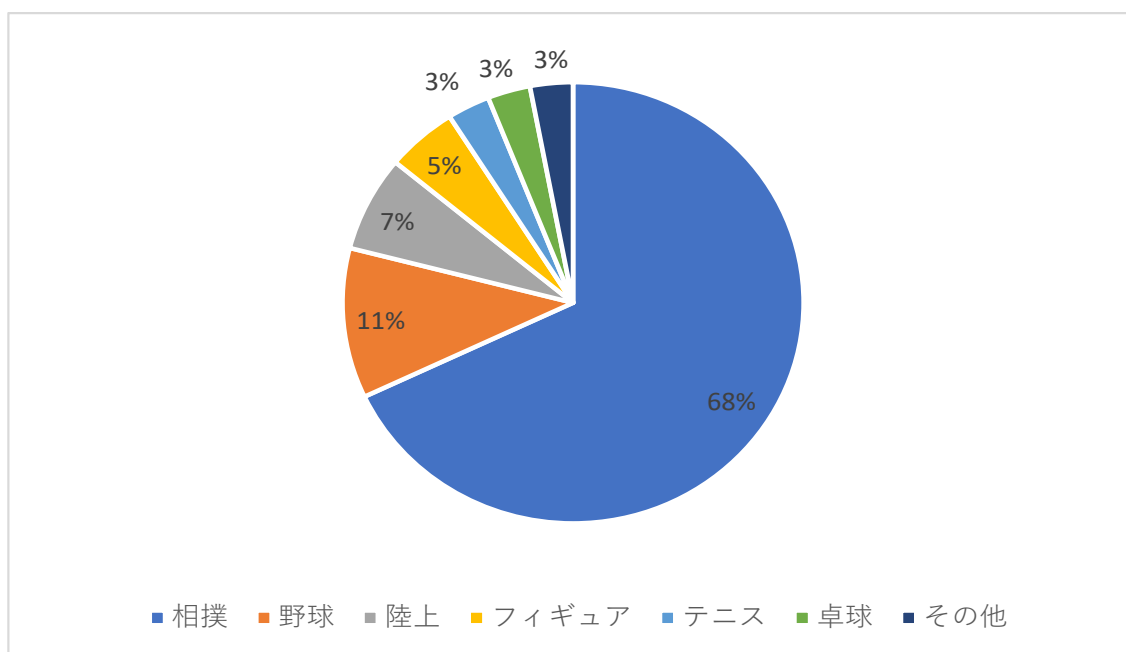


図 16 2017 年スポーツ別割合

9. 2018 年

1) 放送回数と取り上げられた話題

2018 年にひるおびは 256 回放送され、そのうちスポーツに関する話題の放送回数は 123 回（スポーツ放送割合 48.0%/年）であった。月別では 5 月の 24 回が最多（図 17）。この年の年間放送割合 48.0%は 13 年間で最も多く、ほぼ 2 日に 1 日のペースでスポーツを取り上げていた。

国際大会は平昌オリンピック、サッカーW 杯ロシア大会、アジア競技大会が開催された。2 月は平昌オリンピック、4 月は大谷翔平選手のメジャーデビューなど野球、5 月は日大の悪質タックル問題、6 月はサッカーワールドカップロシア大会、9 月はテニスの全米女子オープン、11 月はフィギュアスケート GP シリーズフィンランド大会、12 月は相撲で、前年は被害者であった貴ノ岩が付け人に暴行したことに関連した話題を放送していた。

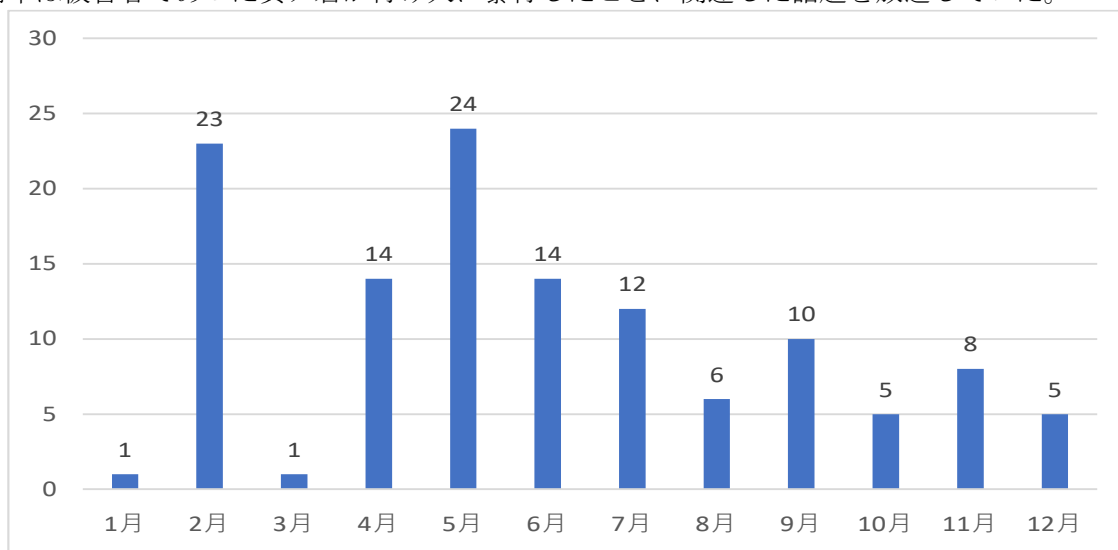


図 17 2018 年月別放送回数

2) 大会別・種目別の分析

最多は野球で 31 回取り上げ、年間の放送割合が 25% (図 18) だった。野球が同年に開催された平昌オリンピックを抑えての年間最多放送回数を獲得した背景には、4 月にメジャーデビューして 11 月には新人王獲得した、大谷翔平選手の 1 年間通しての活躍が考えられる。

情報番組の取り上げ方としては、大谷翔平選手とベーブ・ルースとの比較、大谷効果でのチケット完売、グッズ売り上げ増、さらにメジャー選手はチャーター機で 6 時間移動しながら転戦していることなど、日本とは異なる過酷な試合環境にあることなどを伝えていた。また、大谷選手が愛される理由、振る舞いや言葉使い、野茂英雄選手と大谷翔平選手の共通点、白井一幸元コーチが語る二刀流の歩みなど、大谷選手の人柄を取り上げていた。

次に多かったのは日本大学アメリカンフットボール部で起こった悪質タックル問題。28 回 (23%) 取り上げた。問題の悪質タックルが起きたのは 5 月 6 日。日大フェニックスと関西学院大学ファイターズとの定期戦であった。番組は「日大は不誠実である」という関西学院大学の怒りの会見を取り上げた。日大選手も謝罪会見を開き、「QB を潰せ」とコーチ監督から指示があったことを明らかにした。対して日大監督コーチが緊急会見を開き、悪質タックルの指示を否定。一連のやり取りから日大アメフト現役部員が「うそ暴く」との声明文を発表し、関東学連が日大前監督とコーチを除名処分した。番組は悪質タックルの映像を徹底分析し、日大のナンバー 2 であった前監督の指示があったのかを検証。6 月以降もこの話題は続き、日大の職員が田中理事辞任求め会見、そして日大の教職員は報復の恐怖を語るなど、悪質タックル問題は日大理事長の責任問題にまで発展した。日大理事長の責任問題に発展して以降、番組では「スポーツ」ではなく「事件」として伝えていた。

平昌オリンピックは 24 回 (20%) 放送した。まずはアスリートの敵は「寒さ」と「強風」。最も寒いオリンピックとして、天候からオリンピックを分析した。そして人口 4 万人の開催地平昌の街情報を伝えた。選手の活躍は、平野歩夢選手がハーフパイプ銀メダルを獲得。平野選手の心を支えた父の存在に注目。成績をきっかけに人柄を伝えた。

女子スピードスケート 1000m では史上初の小平選手が銀メダルで高木選手が銅メダル獲得。さらに 500m では小平奈緒選手が日本女子では初の金メダル獲得。金メダル獲得以上に情報番組が取り上げたのは、500m で 2 位になった韓国の李相花選手との友情の物語であった。小平選手の記録は 36 秒 94。2010 年バンクーバー、2014 年ソチを連覇した李相花選手の記録はわずかに 0 秒 39 小平選手に届かず 2 位。3 連覇を逃した李相花選手はリンクを 1 周。小平選手は李相花選手を出迎えた。小平選手に関しては、支えた地元病院の手厚いサポートも特集を組んで紹介した。

また、高木美保選手を支えたナショナルチームの存在について放送し、マススタートで金メダル獲得し初代女王に輝いた高木菜那選手の活躍とともに、恩師が語る高木姉妹の素顔、さらに女子パシュートの滑りを徹底分析した内容を伝えた。

五輪経済効果にも迫り、パシュート使用のサングラス、羽生結弦選手の写真集、カーリング女子の活躍で北海道のふるさと納税が急増していることを伝えた。

サッカーは 12 回 (10%) で、日本が 6 大会連続出場した W 杯ロシア大会を大きく取り上げた。一次リーグ、日本はグループ H に入り、コロンビア、セネガル、ポーランドと対戦。初戦を大迫選手の得点で勝ち越したが、映像使用には制限があるため、W 杯での活躍ではなく、大迫選手が出場した高校サッカーを振り返り、「大迫半端ない」が誕生したロッカールームでの会話を紹介した。

テニスは 10 回 (8%)。8 月にはセリーナ・ウィリアムズとの決勝を制した大坂なおみ選手の全米オープン初優勝を伝えた。試合中、セリーナ・ウィリアムズがコーチング (観客席からのコーチのサイン) による警告を 3 度受けて、1 ゲームを失ったことやグランドスラ

ムでの日本人初勝利、異様な雰囲気にも包まれたブーイングの中での涙の表彰式をつぶさに伝えた。

フィギュアは8回(6%)。グランプリシリーズ フィンランド大会で羽生結弦選手が優勝。相撲は4回取り上げた。去年被害者であった貴ノ岩が付け人に暴行。これにより貴ノ岩は引退した。

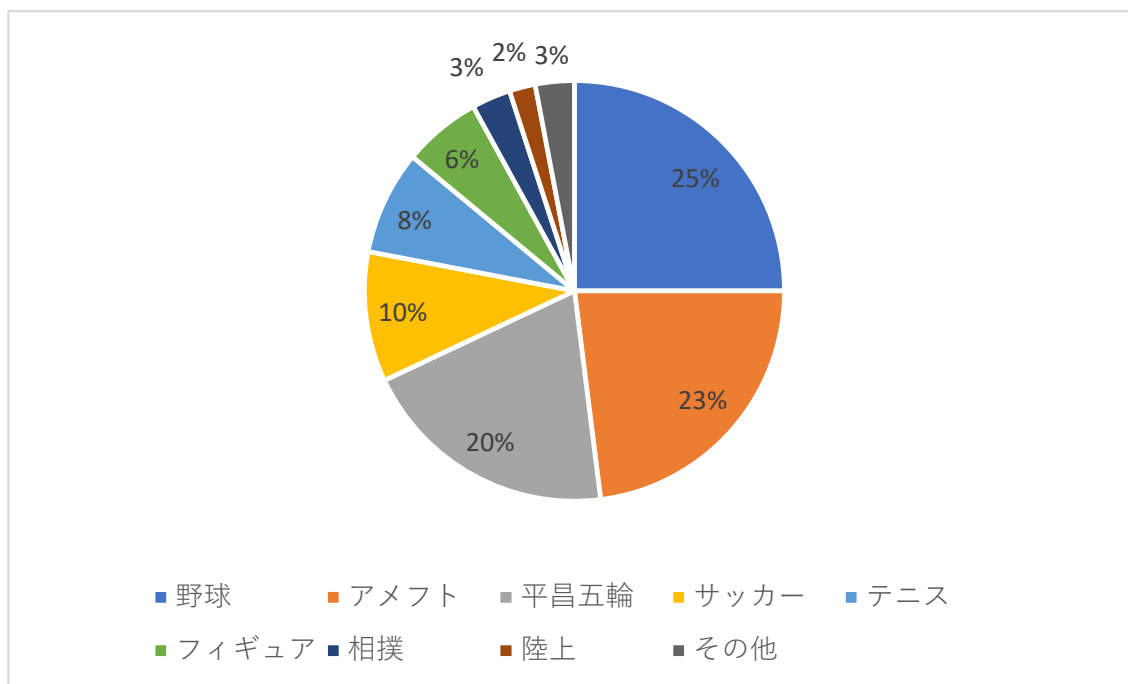


図 18 2018 年スポーツ別割合

10. 2019 年

1) 放送回数と取り上げられた話題

2019 年にひるおびは 256 回放送され、そのうちスポーツに関する話題の放送回数は 66 回（スポーツ放送割合 25.8%/年）で、最多は 1 月の 11 回（図 19）あった。

国際大会は、2 月のフィギアスケート四大大陸選手権、5 月の IAAF 世界リレー大会、8 月は世界陸上カタール・ドーハで開催された。

4 月はゴルフ、マスターズでタイガー・ウッズが優勝。2008 年の全米オープン以来 11 年ぶりのメジャー大会優勝で、メジャー大会通算 15 勝目を挙げた。大坂なおみ選手が全豪オープン優勝で 2 連覇を達成。

この年最大のイベントは、9 月、10 月のラグビーワールドカップ日本大会で日本中がラグビーに熱狂した様子を伝えていた。

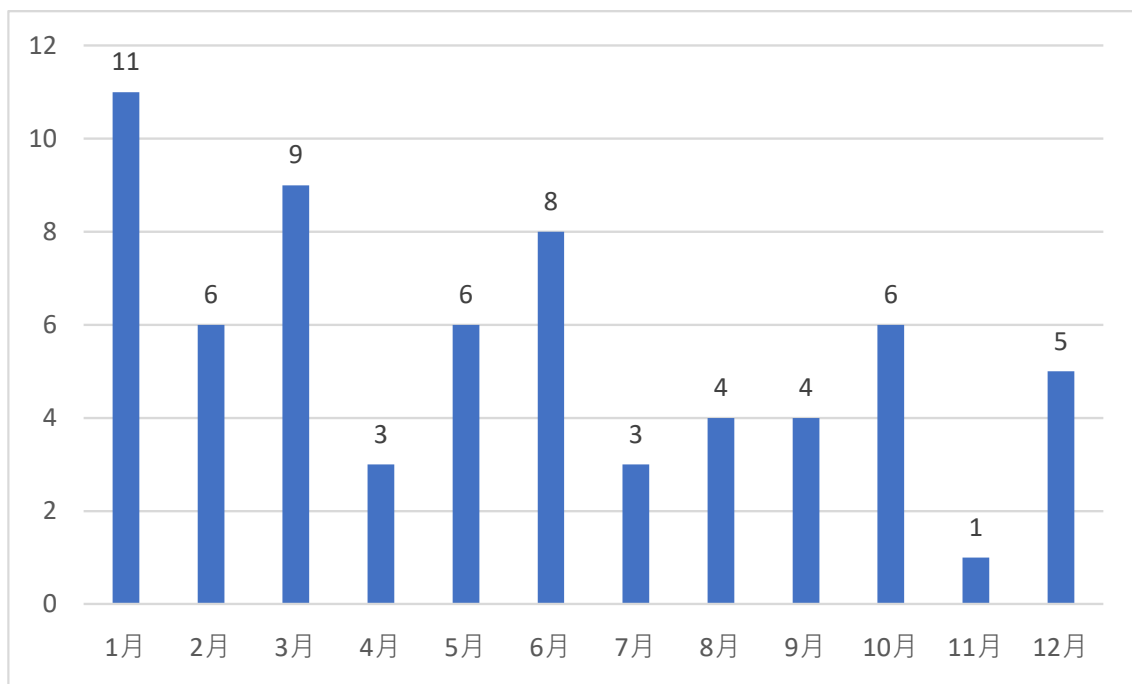


図 19 2019 年月別放送回数

2) 大会別・種目別の分析

最多は 14 回のテニスで放送割合が 22% (図 20) であった。全豪オープン優勝で連覇を果たした大坂なおみ選手。日本人として初めて世界ランク 1 位になった大坂選手の「チームなおみ」を徹底検証し、吉川コーチとの出会いやラケットメーカーの取材を放送した。また、10 キロ減量して肉体改造を行ったトレーナーを取り上げ、サーシャコーチとの契約解消、ジェンキンス新コーチとの初陣などを取り上げた。

また、ジーン元コーチが「大坂の得る生涯獲得賞金と契約金の 20%の支払い」を求めて大阪選手を提訴したことも扱った。

1 月はケガからの復活を遂げた錦織圭選手の ATP ツアー 3 年ぶりの優勝を取り上げた。錦織選手に関しては、全仏オープンベスト 8、ウインブルドンベスト 8 も取り上げていた。

陸上は 10 回(15%)取り上げた。サニブラウン選手の 9 秒台や翌年に予定されている東京オリンピックに向けて、リレー侍の「バトンパス」の修正を取り上げた。

野球は 9 回(14%)で、5 月、6 月に手術から復帰した大谷翔平選手を取り上げた。

相撲は 8 回(12%)で稀勢の里の引退、大関に昇進した貴景勝に注目した。

この年最も注目されていたのはラグビー W 杯日本大会。日本代表の W 杯初のベスト 8 進出や世界 2 位のアイルランドを撃破するという大活躍にも関わらず、取り上げた回数は 8 回だった。番組にとっては、映像使用に制限がある影響が大きく、試合映像を使用しづらい状況のため、ラグビー元日本代表選手をスタジオに呼び、「ジャッカル」や「オフロードパス」を実演してもらうなどして、試合ではなくラグビーの技術を伝えていた。

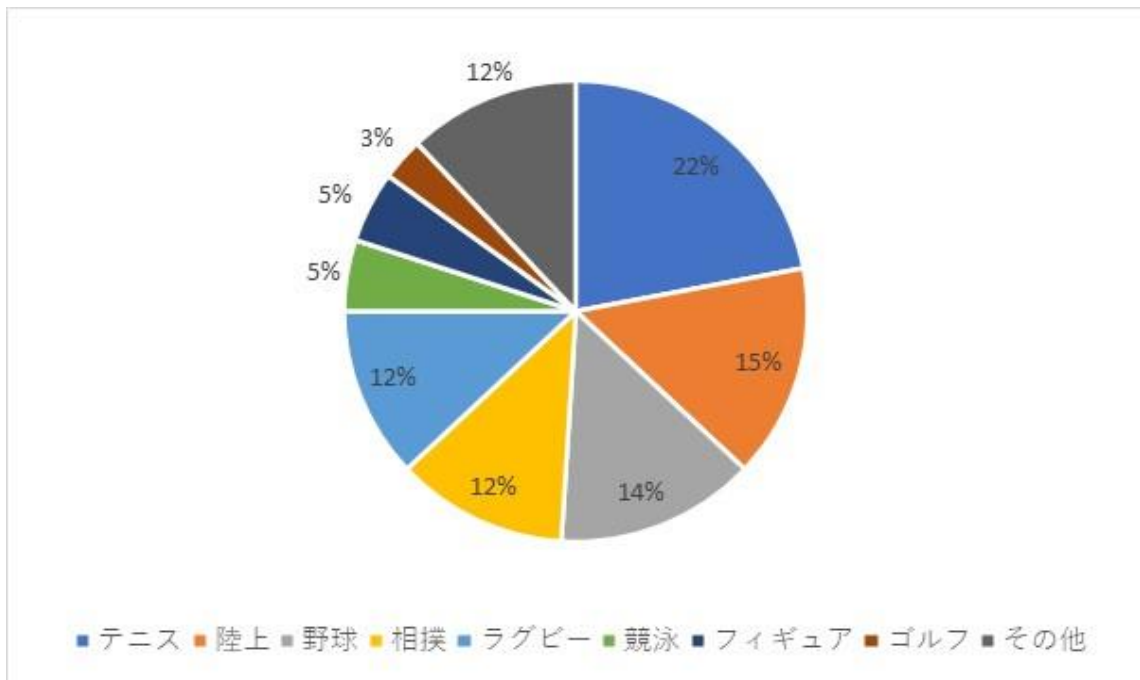


図 20 2019 年スポーツ別割合

11. 2020 年

1) 放送回数と取り上げられた話題

2020 年にひるおびは 255 回放送され、そのうちスポーツに関する話題を放送した回数は 8 回（スポーツ放送割合 3.1%/年）で、これは 13 年間で最も少ない数字であった。1 月の 5 回が、この年の最多月であった（図 21）。

この年は、新型コロナウイルス感染症の拡大により、ほとんどのスポーツイベントが中止となった。そのなかで、1 月は相撲が 1 回。幕内で最下位に当たる幕尻の徳勝龍の 14 勝 1 敗での初優勝を取り上げた。3 月は 2020 東京オリンピック・パラリンピックの延期、21 年夏開催の決定。9 月はテニスの全米オープンが開催され、大坂なおみ選手が優勝したことなどを放送していた。

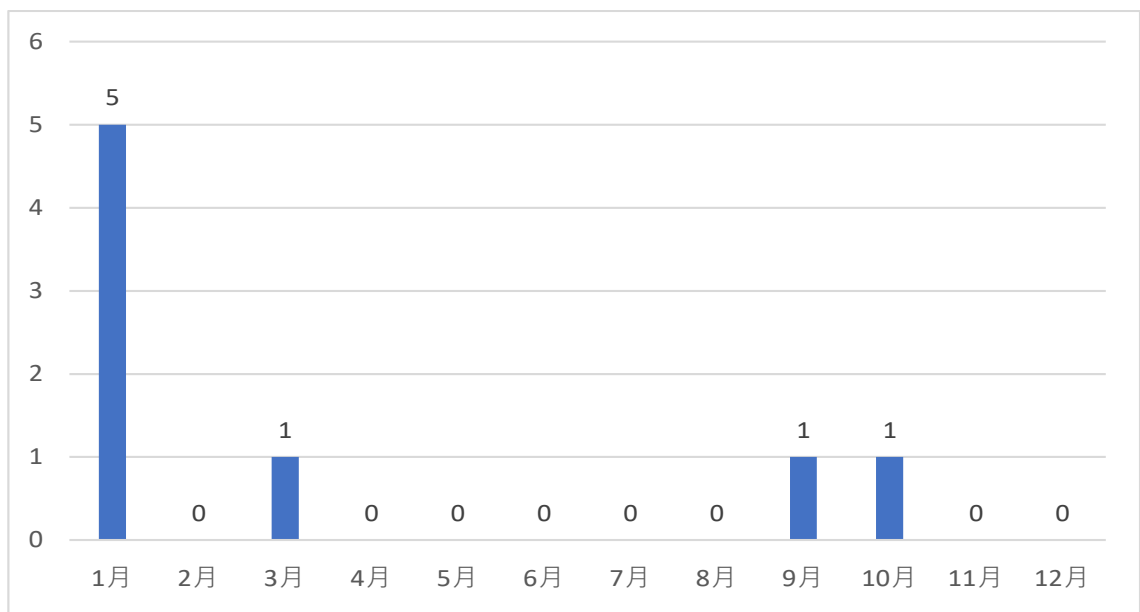


図 21 2020 年月別放送回数

2) 大会別・種目別の分析

1 月は相撲が 1 回。幕内で最下位に当たる幕尻、徳勝龍の 14 勝 1 敗での初優勝を取り上げた。他の 4 つは陸上で、第 96 回箱根駅伝青山学院が 5 度目の総合優勝、イギリスの複数メディアが報じたナイキ厚底シューズが使用禁止報道、腹筋女王松田瑞生選手が大阪国際女子マラソンで優勝、ナイキ厚底シューズ最新第四モデルが解禁で厚底シューズ進化の歴史を振り返る、という内容であった。

9 月はコロナ禍でテニスの全米オープンが開催され、大坂なおみ選手が優勝。大坂なおみ選手は人種差別と警察への抗議でも注目されていて、7 試合に 7 つの異なるマスクを用意して試合に臨んだ。優勝という偉業もさることながら、マスクをつけて社会に訴える行動を大きく取り上げていた。

10 月は選抜高校野球や夏の甲子園大会が中止になり、選手達のアピールの場が激減した中でのドラフト会議を取り上げた。

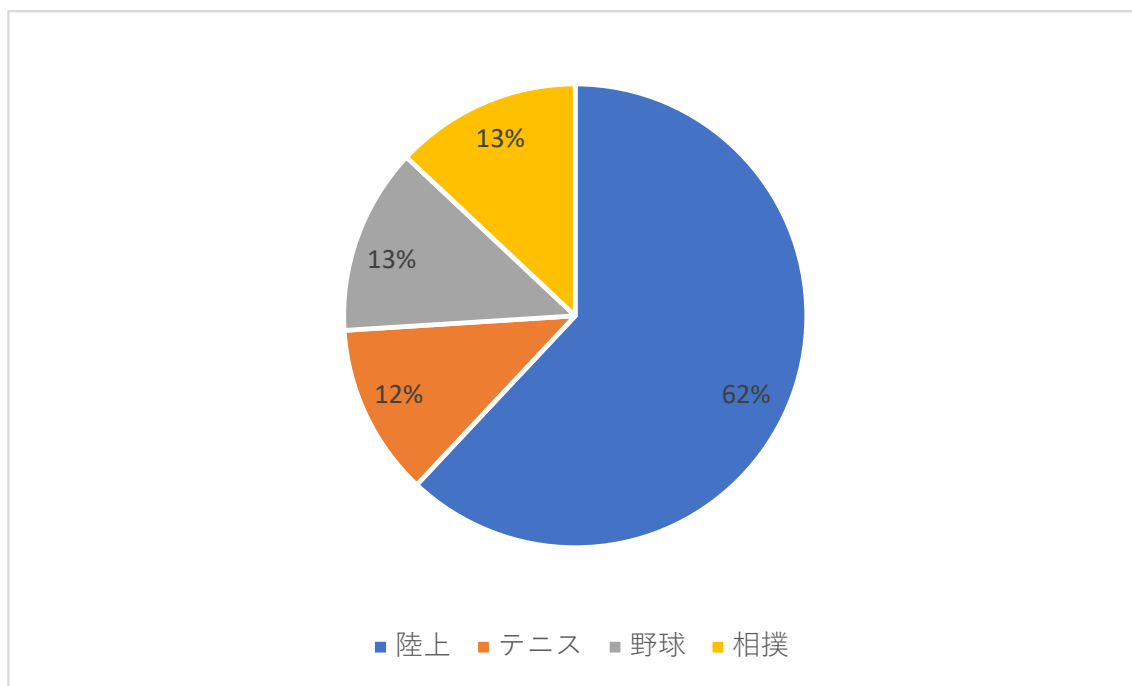


図 22 2020 年スポーツ別割合

12. 2021 年

1) 放送回数と取り上げられた話題

2021 年にひるおびは 253 回放送され、そのうちスポーツに関する話題の放送回数は 57 回（スポーツ放送割合 22.5%/年）であった。月別では 8 月の 11 回が最多であった（図 23）。

2 月は大坂なおみ選手が全豪オープン優勝。4 月には松山英樹選手が日本人で初めてマスタース制覇。6 月は MLB オールスターに大谷翔平選手が出場。

7 月、8 月は延期された東京オリンピックが開催され、卓球混合ダブルス水谷隼・伊藤美誠ペアの金メダル獲得、柔道、阿部一二三・詩選手の兄妹金メダル、女子バスケットボール銀メダル獲得、野球侍ジャパン金メダルなどを扱った。

11 月は大谷翔平選手の MVP 獲得を取り上げた。

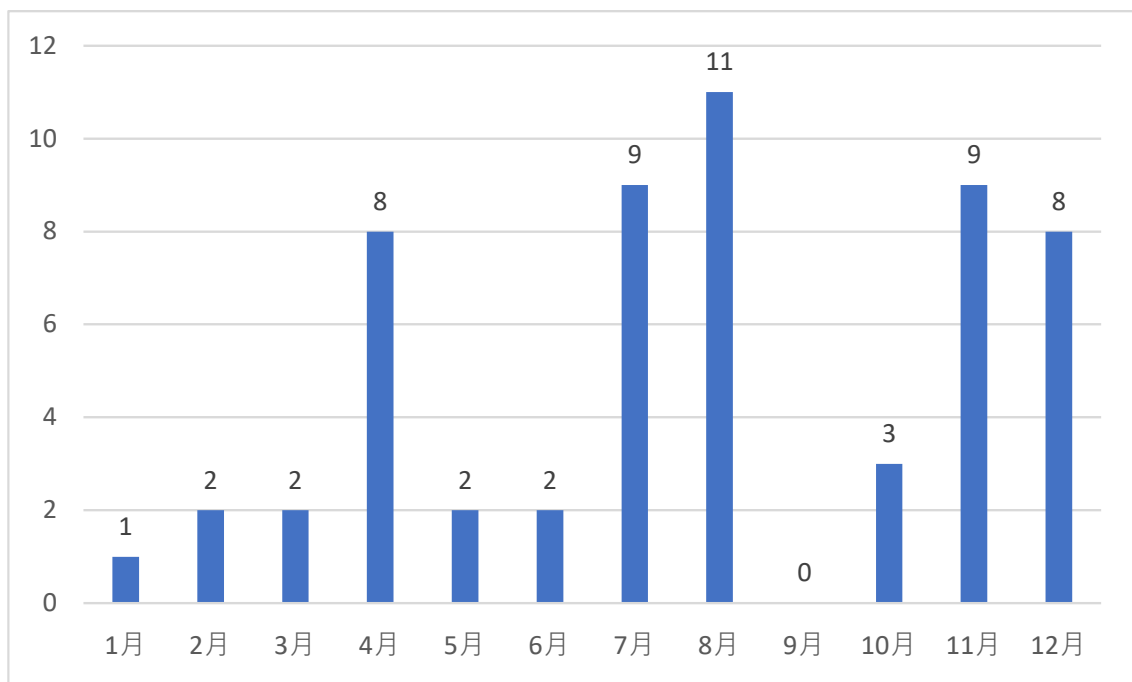


図 23 2021 年月別放送回数

2) 大会別・種目別の分析

最多は東京オリンピックの 19 回。放送割合は 33%であった（図 24）。日本でのオリンピックなので、情報番組も連日オリンピックコーナを作り、日々のメダル獲得状況を伝えた。獲得数は金 27 個、銀 14 個、銅 17 個の計 58 個。過去最多となった。

卓球混合ダブルス水谷隼・伊藤美誠ペア金メダル獲得、柔道、阿部一二三・詩兄妹金メダル獲得、女子バスケットボールは銀メダル獲得、野球侍ジャパン金メダル獲得など、放送中に結果が出るため、企画ではなくニュース速報として報じていた。地元で開催されるオリンピックの情報番組での伝え方は、これまでのオリンピック時に放送していた人柄や選手たちの秘話を伝える過去のスタイルとは明らかに違っていった。

野球は 13 回取り上げて放送割合が 23%であった。6 月のオールスター出場大谷翔平選手、11 月の大谷翔平選手 MVP 獲得。オリンピックの年であるのに、大谷選手の活躍を情報番組は大きく取り上げていた。まさに歴史的偉業であり、成績はもちろん、大谷選手が高校生の時に書いた目標達成シートを細かく紹介して、人柄を伝えていた。

ゴルフは松山英樹選手のマスターズ初制覇を取り上げた。日本人だけでなく、アジア人としても初の快挙。歴史的偉業である。番組は 4 日間伝え続けた。特に、解説者、アナウンサーの涙の実況には大きな反響があった。映像使用に制限がないので、競技の状況から解説場面に至るまで、様々な映像を放送することが出来た。

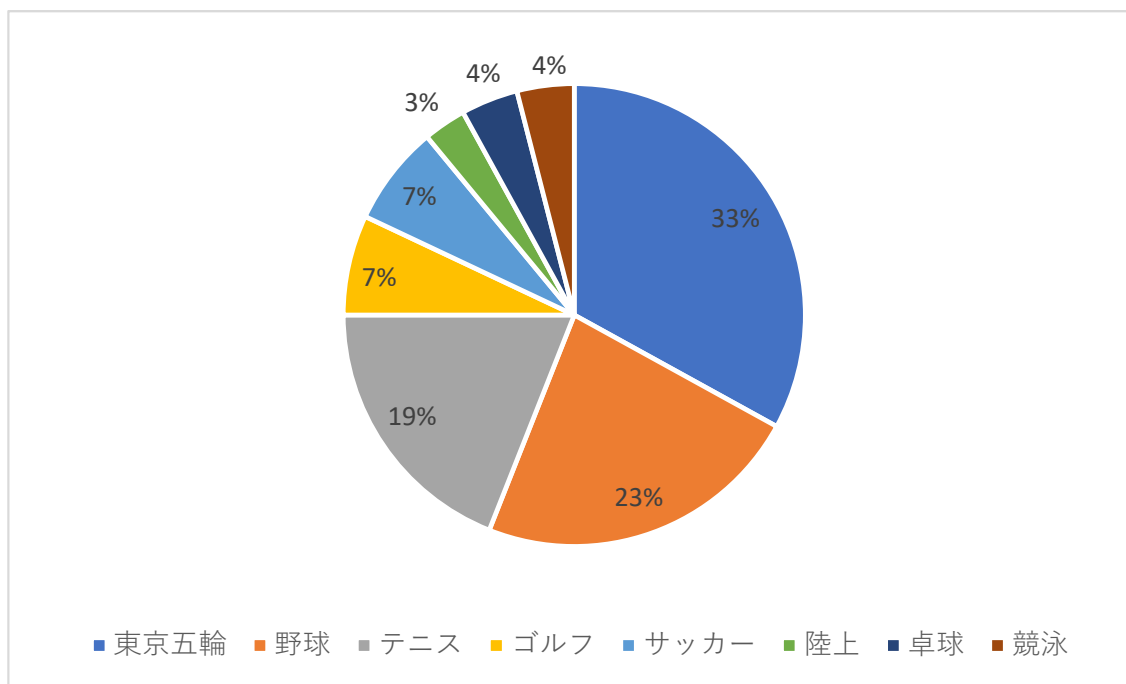


図 24 2021 年スポーツ別割合

13. 2022 年

1) 放送回数と取り上げられた話題

2022 年にひるおびは 249 回放送され、そのうちスポーツに関する話題を放送回数は 78 回（スポーツ放送割合 31.3%/年）であった（図 25）。

1 月は箱根駅伝での青学優勝。2 月の 12 回は北京五輪で、フィギアスケート男子、羽生結弦選手の 4 回転半へのこだわりを特集した。また、女子は波乱の北京五輪で、当時 15 歳のカミラ・ワリエワ選手がロシアオリンピック委員会の選手として出場し、団体で金メダルを獲得したが、前年 12 月のドーピング検査で禁止薬物の陽性反応が発覚した。スキージャンプでは高梨沙羅選手がスーツ規定違反で失格した。

3 月はサッカーW 杯出場決定。4 月はロッテの佐々木朗希選手が 28 年ぶりの完全試合達成し、次の試合も 8 回までパーフェクトピッチング。8 月は大谷翔平選手が二桁勝利、二桁本塁打を達成し、9 月には投球回数と規定打席の両方の規定に到達したことを伝えた。

9 月はヤクルト村上宗隆選手が王貞治さんに並ぶ 55 号。10 月には王貞治さんを超える 56 号ホームランを達成。11 月のサッカーW 杯は初めての 2 大会連続の決勝トーナメント出場であり、11 月 18 日から 12 月 12 日まで 17 日連続してサッカーを取り上げた。

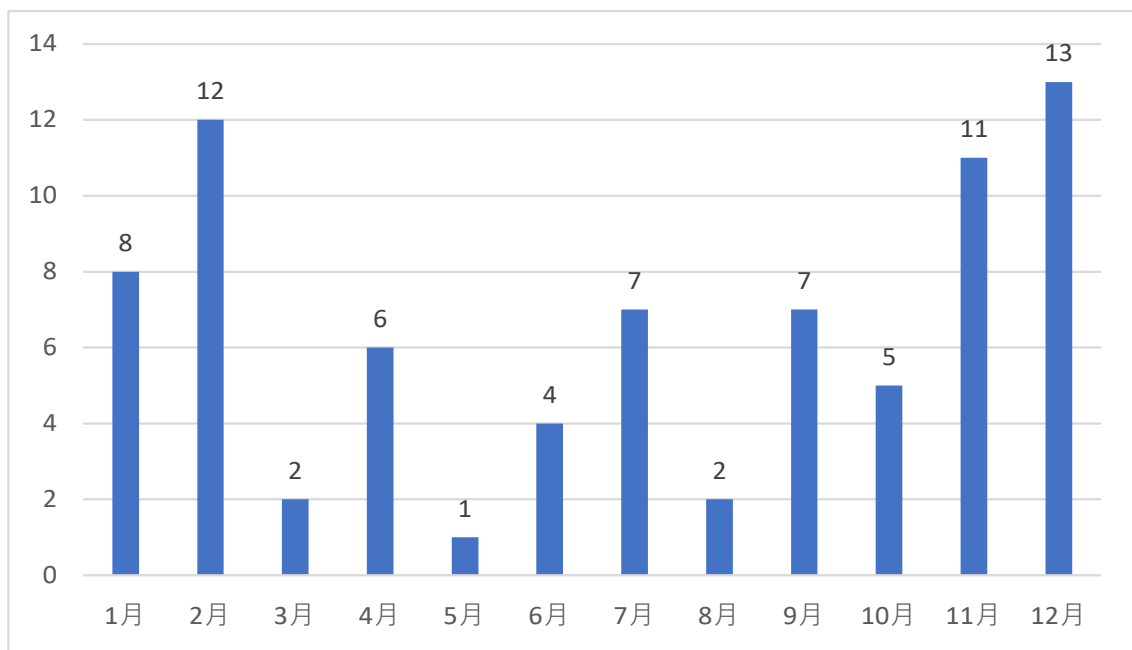


図 25 2022 年月別放送回数

2) 大会別・種目別の分析

最多は野球の 27 回（35%）であった（図 26）。取り上げた回数において、オリンピックイヤーに他の競技がオリンピックを超えたのは 13 年間で初めてだった。

野球はまずメジャーリーグ大谷翔平選手が 8 月にベーブ・ルースを超えたと評価された二桁勝利、二桁本塁打を達成したことや、シーズン最後までニューヨークヤンキースのジャッジ選手と MVP を争う 2 年連続の活躍だったこと、さらにはシーズン後に 2023 年 3 月に予定されている WBC 第 5 回大会に参加する意思を表明したことなど、年間を通して活躍を報じた。国内においても、4 月はロッテの佐々木朗希選手が 28 年ぶりの完全試合達成。次の試合も 8 回までパーフェクト試合をしたこと。9 月はヤクルト村上宗隆選手が王貞治さんに並ぶ 55 号、10 月には王貞治さんを超える 56 号を記録したことを取り上げた。日本の野球でも歴史的偉業が達成されるなど、新しい選手の活躍が目立った年であった。

北京五輪は 13 回。フィギアスケート男子、羽生結弦選手の 4 回転半へのこだわりを特集した。女子のフィギアスケートは、当時 15 歳のワリエワ選手がロシアオリンピック委員会の選手として出場。メダルを獲得するが、その後に前年 12 月のドーピング検査で禁止薬物の陽性反応が発覚しメダル取り消しされたことを報じた。さらにスキージャンプで高梨沙羅選手がスーツ規定違反で失格になるなどの話題や、カーリング女子銀メダル獲得などを扱った。

サッカーは 25 回（32%）で、3 月の W 杯予選では、日本の予選だけでなく、ウクライナの予選を取り上げた。カタール大会は「ドーハの悲劇」を経験した森保監督が、死の組と言われたグループ E 組を 1 位通過。ドイツ、スペインを撃破して「ドーハの歓喜」に変えた全試合を取り上げた。

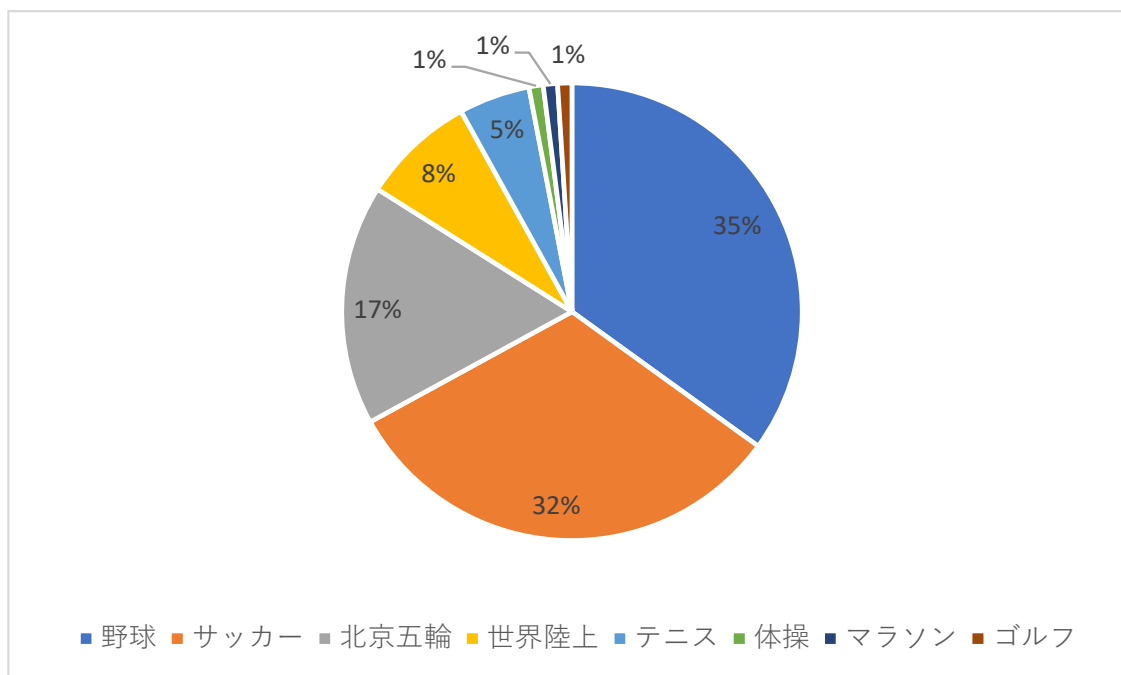


図 26 2022 年スポーツ別割合

第 2 項 13 年間のスポーツ放送回数

1) 13 年間の総スポーツ放送回数

13 年間の全放送回数が 3335 回。その中で「スポーツ」に関わる話題を取り上げたのが 862 回あった。割合にして 25.8%。ほぼ 4 日に 1 日のペース、1 週間に 1 日はスポーツに関わる話題を伝えたことになる（表 2）。お昼の時間帯でも事件や事故、天気などの情報と並んでスポーツが日常的な話題になっていた。

表 2 ひるおびの放送回数とスポーツの放送回数・内容

年	年間 放送回数	スポーツ放送回数 (%)	主な内容
2010	256	49 (19.1)	バンクーバー五輪、サッカー W 杯大会、宮里藍米ツアー優勝、世界バレー、フィギアスケートなど
2011	265	71 (26.8)	サッカーなでしこ女子 W 杯ドイツ大会優勝、フィギア浅田真央選手、世界陸上、体操選手権など
2012	262	80 (30.5)	ロンドン五輪、フィギア浅田真央選手、イチロー選手移籍、松井秀喜選手引退、錦織圭選手（全豪ベスト 8）、五輪マラソン選考、高梨沙羅選手 W 杯、
2013	256	71 (27.7)	野球（WBC）、田中将大選手（楽天優勝）、上原浩治選手（ワードシリーズ優勝）、陸上世界選手権、フィギア浅田真央選手、羽生結弦選手
2014	256	80 (31.3)	ソチ五輪、錦織圭選手（全米 準優勝、楽天オープン優勝）、サッカー W 杯
2015	257	66 (25.7)	錦織圭選手（全豪 8 位、全仏 8 位など）、ラグビー W 杯（ブライトンの軌跡）、サッカーなでしこ W 杯など
2016	259	50 (19.3)	リオデジャネイロ五輪、相撲（琴奨菊、白鵬、豪栄道の優勝、千代の富士の死去）など

2017	255	63	(24.7)	相撲（稀勢の里優勝・横綱昇進、日馬富士事件、貴乃花親方と相撲協会との対立）、野球 WBC、フィギア世界選手権、松山英樹選手とトランプ大統領のゴルフなど
2018	256	123	(48.0)	平昌五輪、大谷翔平選手（MLB デビュー・新人王獲得）、日大アメフトタックル問題、サッカー W 杯、大坂なおみ選手全米優勝など
2019	256	66	(25.8)	大坂なおみ選手（世界ランク 1 位）、錦織圭選手（全仏ベスト 8，全英ベスト 8）、陸上サニブラウン選手 9 秒台、稀勢の里引退、ラグビー W 杯日本大会など
2020	255	8	(3.1)	相撲（幕尻徳勝龍優勝）、2020 オリンピック・パラリンピック延期、大坂なおみ選手（全米優勝、マスクにメッセージを出してのアピール）
2021	253	57	(22.5)	東京五輪、松山英樹選手マスターズ制覇、大谷翔平選手（オールスター出場、MVP 獲得）など
2022	249	78	(31.3)	北京五輪、大谷翔平選手（二桁勝利、二桁本塁打）、佐々木朗希選手完全試合、村上宗隆選手本塁打日本記録更新、サッカー W 杯、箱根駅伝青山学院大学優勝
合計	3335	862	(25.8)	

対象となった 13 年間は、毎年のように国際大会が開催されており、オリンピック、サッカー W 杯、野球の WBC がなかった年は 2017 年、2020 年の 2 回だった。

13 年間で 2010 年のバンクーバー五輪、2012 年ロンドン五輪、2014 年ソチ五輪、2016 年リオデジャネイロ五輪、2018 年平昌五輪、2020 年東京五輪（21 年開催）、2022 年北京五輪と、夏季オリンピック 3 大会、冬季オリンピック 4 大会が開催されていた。

オリンピック以外の国際大会では、サッカーは W 杯が、男子は 2010 年南アフリカ大会ベスト 16、2014 年ブラジル大会、2018 年ロシア大会の 2022 年カタール大会の 4 大会、女子は 2011 年、2015 年、2019 年の 3 大会が開催された。

ラグビーは 13 年間のうちに 2 回のワールドカップを取り上げていた。2015 年ラグビー W 杯イングランド大会では南アフリカに勝利し、世界中に「ブライトンの奇跡」と報じられた。2019 年にはアジアで初めての W 杯が日本で開催。キャッチコピーは「4 年に一度じゃない。一生に一度だ」であった。日本の初のベスト 8 入りを大きく取り上げた。

テニスも 2014 年の錦織選手の全米オープン準優勝、2018 年には大坂なおみ選手が全米オープンテニス優勝。日本人選手が四大大会のシングルスを制したのは男女通じて史上初であった。

ゴルフでも 2021 年男子の 4 つのメジャーゴルフ選手権大会の一つであるマスターズ・トーナメントで松山英樹選手が優勝という歴史的快挙を取り上げた。個人競技の国際大会で日本人の活躍が目立った 13 年間でもあった。

一方 2017 年の日馬富士暴行事件、2018 年日大悪質タックル問題、女子体操体罰問題などスポーツ界での不祥事も大きく報じられた。

一番多く報じられた年は 2018 年。平昌オリンピック、サッカー W 杯ロシア大会、大坂なおみ選手の全米オープン優勝に加え、日大の悪質タックル問題。1 年 256 回の放送で 123 日スポーツを取り上げていた。割合で見ると 48%。およそ 2 日に 1 日はスポーツを取り上げていたことになる。一番少なかった年は 2020 年。1 年 255 回の放送でスポーツを取り上げたのは 8 日。コロナ禍で情報番組はほとんどスポーツを取り上げなかった。

2) 13 年間の月別回数

13 年間で最も多い月は 2 月の 96 回で、2 月に取り上げたスポーツの多くは冬季オリンピックである。今回の調査期間の 13 年間で冬季オリンピックは 4 回あり、2010 年バンクーバーオリンピック（2/12～2/28）20 回、2014 年ソチオリンピック（2/7～2/23）32 回、

2018年平昌オリンピック(2/9～2/25)24回、北京オリンピック(2/4～2/20)の13回と冬季オリンピックだけで89回、2月の総数の約93%を占めていた。

次に多いのが8月の83回で、8月に多く取り上げていたのは夏季オリンピックで、2012年ロンドン五輪(7/27～8/12)33回、2016年リオデジャネイロ五輪(8/5～8/21)24回、2021年東京五輪(7/23～8/8)19回。3つ合わせて76回、8月の総数の約92%をしめていた。

8月に開催された世界陸上はこの13年間で4大会、2011年大邱(8/27～9/4)9回、2013年モスクワ(8/10～8/18)13回、2015年北京(8/22～8/30)4回、2017年ロンドン(8/4～8/13)/4回。取り上げた回数が30回だった。

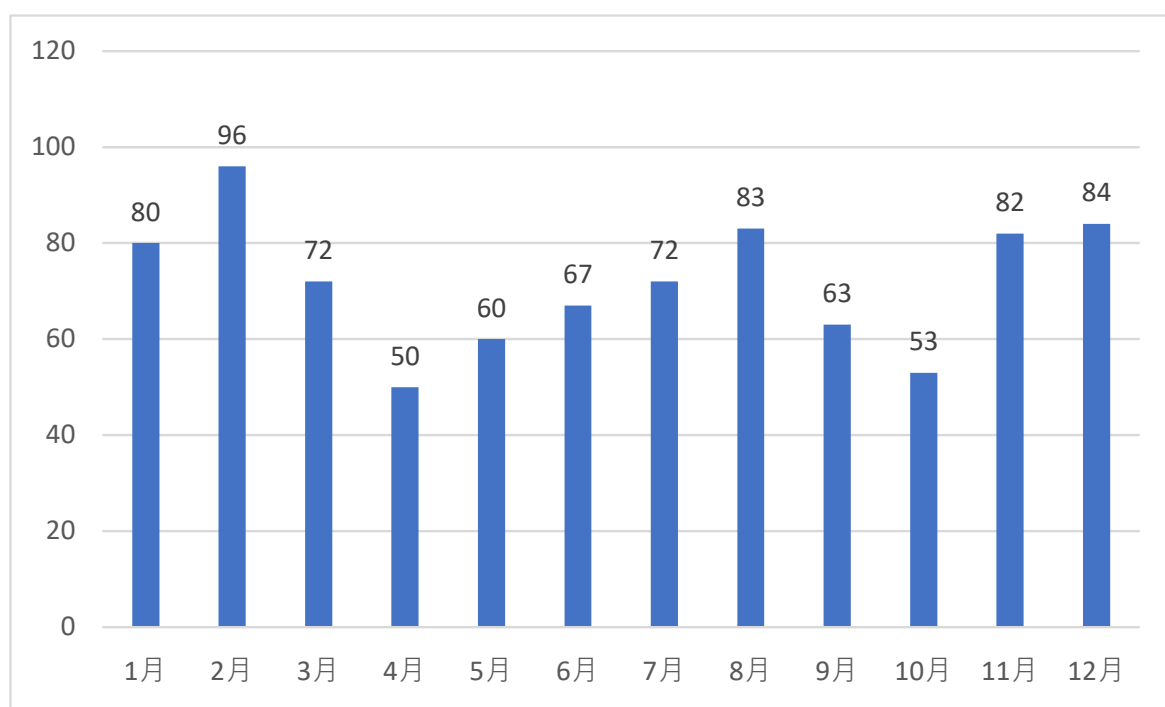


図 27 13 年間の月別放送回数

7月は2011年のサッカー女子W杯優勝が34回。7月の約47%をしめていた。

11月、12月、1月の大半はフィギュアスケートの話題である。ISUグランプリファイナルでの日本人選手の活躍、2013年から2016年まで羽生結弦選手が4連覇、さらに国内大会ではあるが12月の全日本選手権を取り上げていた。

6月はサッカーW杯を取り上げる事が多かった。2010年南アフリカ大会(6/11～7/11)は13回。2014年ブラジル大会(6/12～7/13)は15回。2018年ロシア大会(6/14～7/15)12回の合計40回、6月に取り上げており、13年間の6月の約67%がサッカーの話題であった。

第3項 13年間で取り上げたスポーツの割合

13年間で、最も取り上げられたスポーツに関する話題は、オリンピックで175回(20.3%)、次いで、サッカーW杯127回(14.7%)だった(図28)。

オリンピックは13年のうちに夏季も冬季も合わせて7大会があり、各大会の放送回数の内訳は2010年バンクーバー五輪(20回)、2012年ロンドン五輪(33回)、2014年ソチ五輪(42回)、2016年リオデジャネイロ五輪(24回)、2018年平昌五輪(24回)、2021年東京

オリンピック(19回)、北京五輪(13回)放送された。割合は20.3%で、1週間に1日はオリンピックに関する内容を取り上げた計算となった。

サッカーW杯の内訳をみると、男子の本大会が2010年サッカーW杯南アフリカ大会(13回)、2014年ブラジル大会(15回)、2018年ロシア大会(12回)、2022年カタール大会(21回)。本大会以外の予選と女子の大会を合わせて125回で14.7%であった。

競技別、選手別にみると、テニスが87回(10.1%)、相撲71回(8.2%)、大谷翔平66回(7.7%)、陸上&マラソン66回(7.7%)、フィギュア54回(6.3%)となっていた。

テニス87回では、錦織圭選手、大坂なおみ選手のグランドスラムでの活躍が情報番組でも取り上げられていた。錦織選手は2012年全豪オープンベスト8、2014年全米オープン準優勝。大坂なおみ選手は2018年全米オープン優勝、2019年全豪オープン優勝、2020年全米オープン優勝、2021年全豪オープン優勝。とりわけ2020年の全米オープンは、コロナ禍での開催でコロナとスポーツがどう向き合うかが問われた大会であり、大坂選手が人種差別への抗議で、毎試合異なる名前の記されたマスクをつけて試合に臨んだことを情報番組では大きく取り上げた。

大谷翔平選手は、日本でも二刀流で注目を集めていたが、2018年のメジャーデビューから情報番組では取り上げられるようになった。2019年はオフにトミー・ジョン手術をやり、2021年はメジャーリーグオールスター出場とMVPも獲得、2022年は二桁勝利と二桁本塁打、更に投打に渡って規定に到達と2018年以降毎年取り上げていた。

スポーツ別の割合で見ても、オリンピック、サッカーW杯、世界陸上、ラグビーW杯、松山英樹選手ゴルフマスターズ日本人初制覇と国際大会の多さが目立っている。ただ、2022年の佐々木朗希選手の完全試合、村上宗隆選手の三冠王、56号本塁打は日本のプロ野球での出来事であったが、歴史的快挙として取り上げた。

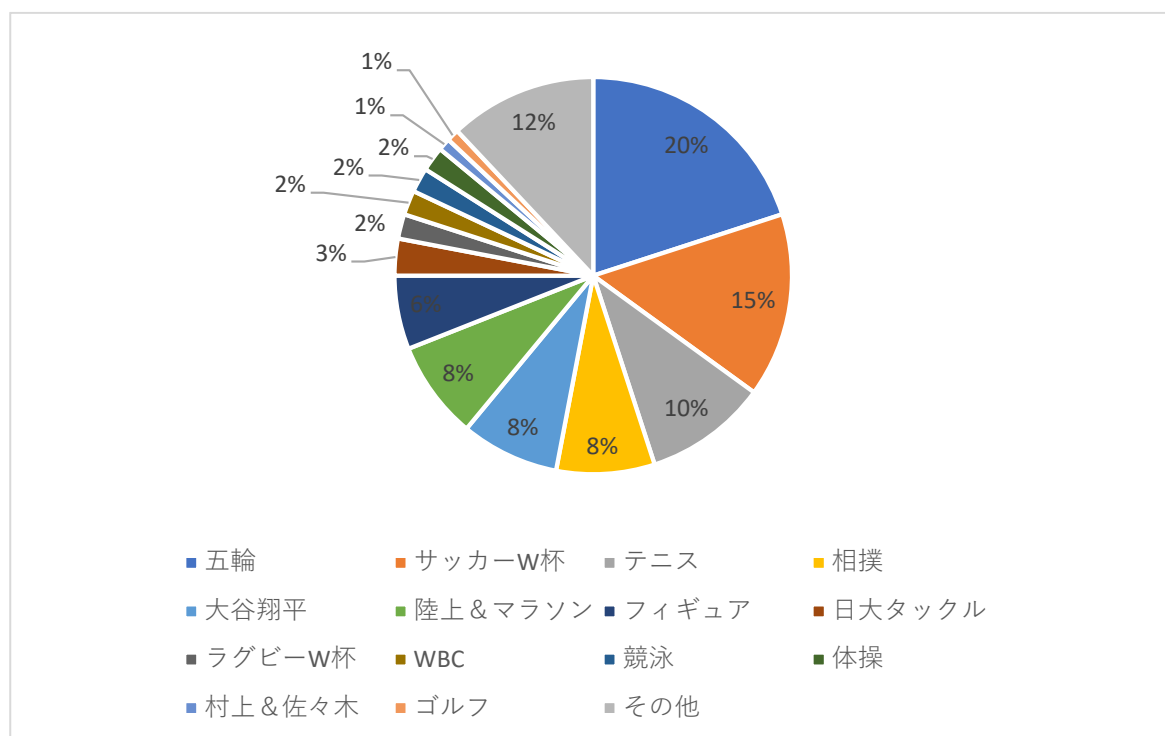


図 28 13 年間で取り上げたスポーツの割合

第2節 番組制作者へのアンケートの調査結果

第1項 回答者の属性

今回の調査では情報番組、スポーツ番組、報道番組を複数担当している場合、情報番組担当者として計算を行なった。アンケート調査は285名から回答が得られた。現在所属している番組の内訳は、情報番組を担当しているスタッフが180人、週末のスポーツ番組を担当しているスタッフが71人（スポーツ番組54人、ニュース番組内スポーツ担当17人）、そして報道番組を担当しているスタッフ34人であった（図29）。

番組を制作していて、スポーツを取り上げた事があるスタッフが89.5%。スポーツを取り上げた事がない、全く担当したことのないスタッフが10.5%であった（図30）。

回答者の年齢構成をみると、40歳から44歳が20.4%、25歳から29歳が18.2%と続いた（図31）。そして男女比は67.4%対32.6%だった（図32）。

また、スポーツ経験者が93.3%で（表3）、7割近くが都道府県大会以上のレベルで活躍していた（図33）。

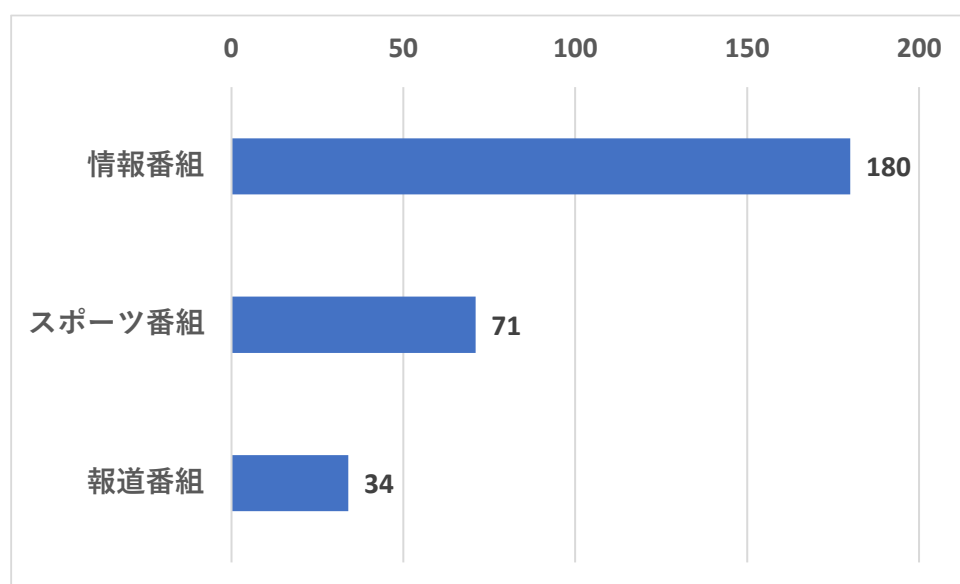


図29 現在所属している番組

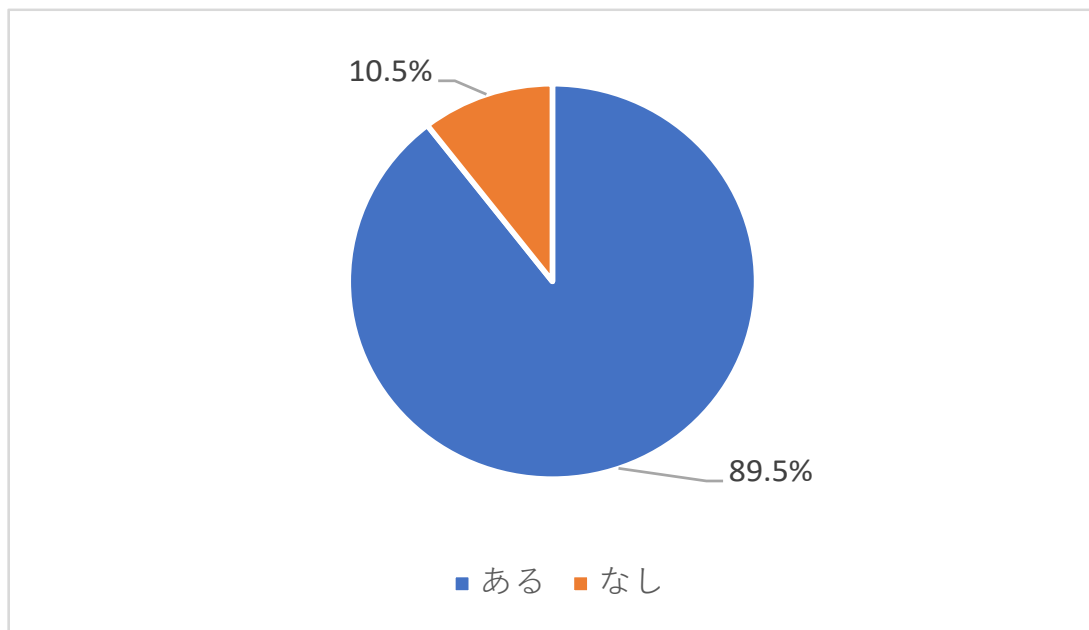


図 30 番組でスポーツを取り上げた、担当した経験

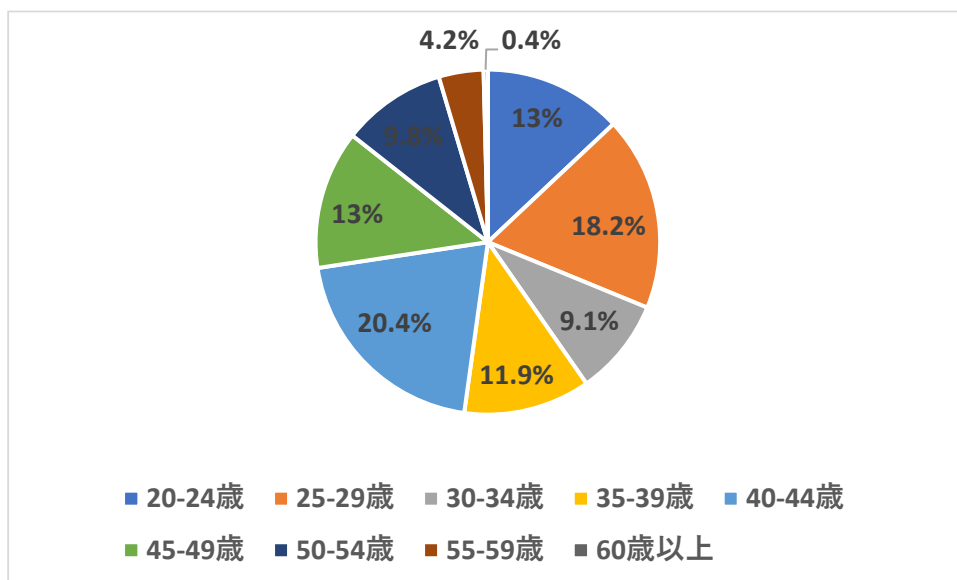


図 31 回答者の年齢

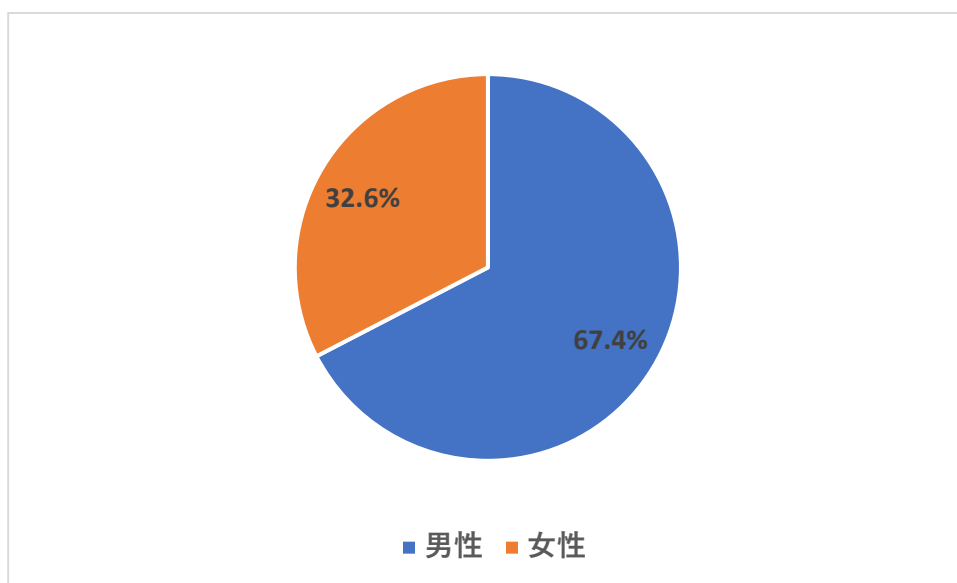


図 32 男女比

表 3 回答者のスポーツ経験

	スポーツ経験がある	スポーツ経験がない	回答者
報道番組	32 人 (94. 1%)	2 人 (5. 9%)	34 人
スポーツ番組	67 人 (94. 5%)	4 人 (5. 5%)	71 人
情報番組	167 (92. 8%)	13 (7. 2%)	180 人
総計	266 人 (93. 3%)	19 人 (6. 7%)	285 人

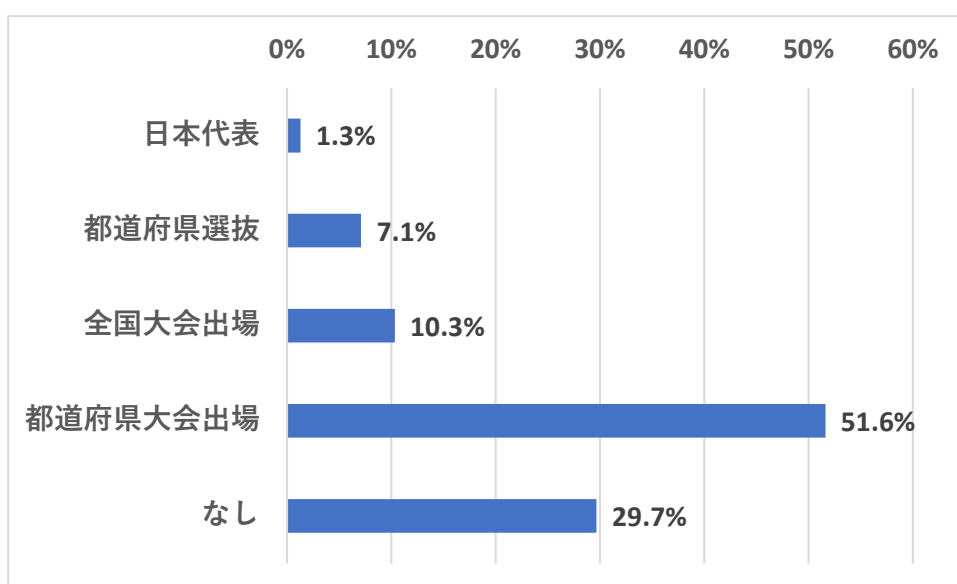


図 33 回答者の競技レベル

第2項 最も印象に残ったスポーツ

最も印象に残ったスポーツは「オリンピック・パラリンピック」が一番多く 68 人で、次に「大谷翔平」、「サッカーW 杯」、「ラグビーW 杯」と続いた。上位 4 つは報道番組、スポーツ番組、情報番組で同じ順位だった。「ラグビーW 杯」に関しては情報番組 18 人に対して報道番組、スポーツ番組ではそれぞれ 2 人だった。スポーツ番組に特化して多い内容は「松山英樹」の 8 人、情報番組に特化して多い内容は「日大悪質タックル」の 7 人であった。これはスポーツ報道というよりも、傷害事件の可能性もあり、情報番組は大きく扱っていた。(表 4)

表 4 スポーツを取り上げた中で最も印象に残った内容

内容	報道番組	スポーツ番組	情報番組	総計
オリンピック・パラリンピック	12	14	42	68
大谷翔平	12	12	39	63
サッカーW 杯	3	9	21	33
ラグビーW 杯	2	2	18	22
村上宗隆	0	2	15	17
松山英樹	1	8	2	11
日大悪質タックル	1	1	7	9
WBC	0	3	5	8
佐々木朗希	0	2	5	7
箱根駅伝	0	1	6	7
大坂なおみ	0	0	5	5
世界陸上	0	3	0	3
体罰問題	1	0	2	3
大相撲八百長問題	0	2	1	3
なし	0	0	3	3
イチロー	1	0	2	3
池江璃花子	0	2	0	2
アジア大会	0	1	0	1
サッカー東日本大震災チャリティーマッチ	0	1	0	1
スケートボード女子パーク 岡本碧優選手	0	0	1	1
パリサンジェルマン メッシ・ネイマール・エムバペ	0	1	0	1
プロボクシング・畑岡隆則選手のタイトルマッチ	0	1	0	1
ボクシング 井岡一翔 VS 八重樫東	0	1	0	1
学校部活動の地域移行	0	0	1	1
亀田三兄弟	0	0	1	1
錦織圭	0	0	1	1

高校野球。甲子園出場チームの日本一への挑戦	0	1	0	1
山本由伸	0	1	0	1
渋谷日向子	0	1	0	1
所英男（格闘家）	0	1	0	1
新井貴浩選手 広島カープ復帰	0	1	0	1
新庄剛志	0	0	1	1
浅田真央	0	0	1	1
大相撲 日馬富士暴力問題 ～貴乃花引退～	1	0	0	1
北島康介	0	0	1	1
総計	34	71	180	285

第3項 最も印象に残ったスポーツを取り上げた理由

1) 最もあてはまる理由

スポーツを取り上げた中で最もあてはまる理由について聞いたところ、報道、スポーツ、情報番組のスタッフ全体の 50.3%が「成績（記録）が歴史的である」と選択。次に、「社会性・事件性がある」で 15%。そして「元気が出る、夢がある」が 9.1%、ストーリー（ケガからの復活）が 6.6%、「放送する権利を持っているから」が 4.89%と続いた（図 34）。

さらに 3 番組ごとに分析してみると「成績（記録）が歴史的、偉業である」と回答した人が 3 番組とも高い傾向にあった（図 35）。中でも特に情報番組が 56.1%と高く、一方でスポーツ番組は 40.8%、報道番組は 40%を切っていた。成績にこだわっているのはむしろ情報番組であった。

「社会性・事件性がある」を理由に挙げたのは報道番組が突出して高く 32.4%、次に情報番組が 14.4%、スポーツ番組は 10%以下であった。

全体の理由で 3 位につけた、「元気が出る。夢がある」はスポーツ番組 12.7%、「ストーリー（ケガからの復活）など」は、情報番組が一番高く 7.2%であった。

また「放送する権利を持っているから」はスポーツ番組が 18.3%と飛び抜けて高く、「視聴率が良かったから」は報道番組が一番高く 5.9%。視聴率を気にしていたのは報道番組であった。

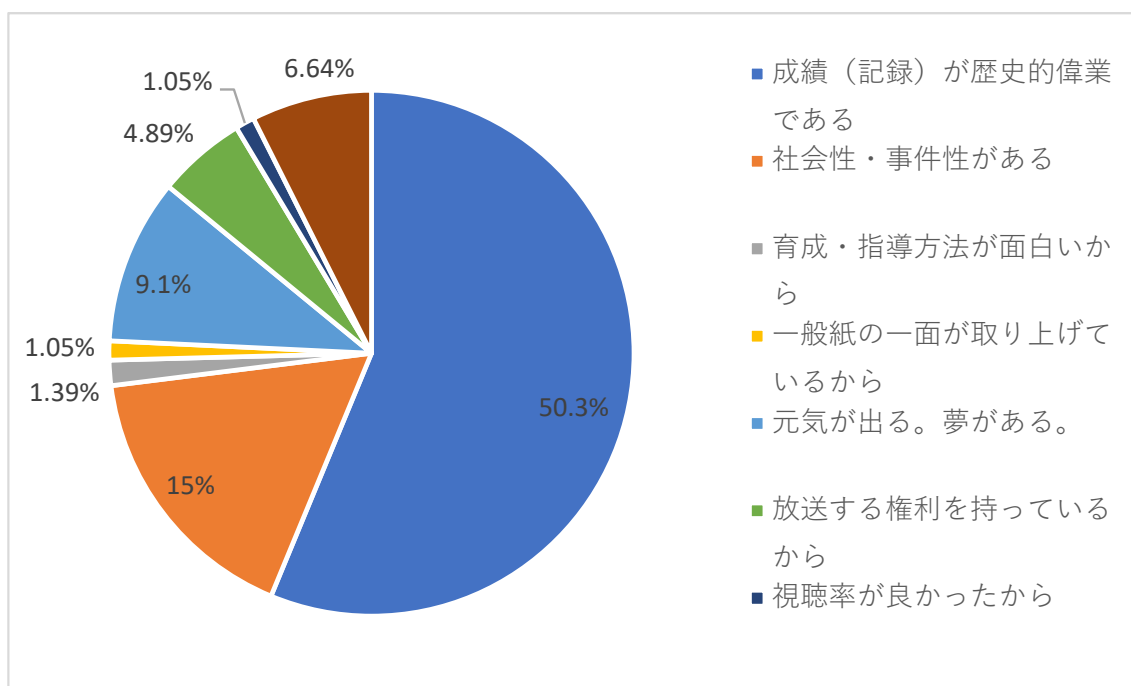


図 34 最も印象に残ったスポーツを取り上げた理由

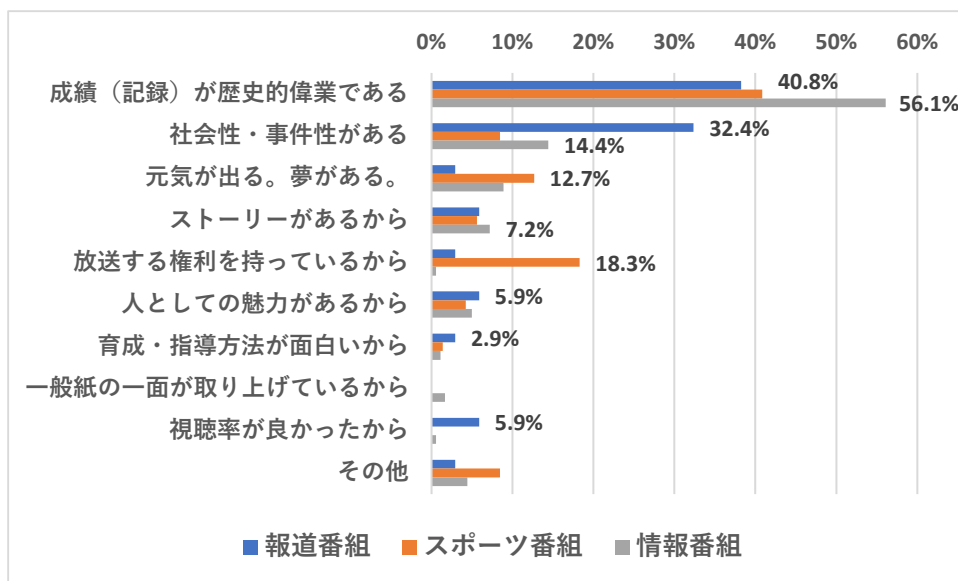


図 35 最も印象に残ったスポーツを取り上げた理由

2) 取り上げた理由の 5 段階評価

取り上げた理由については、3つの番組に5段階評価で聞いた。その結果、最も高かったのは、スポーツ番組（4.56）と情報番組（4.46）が「元気が出る。夢がある」で、報道番組（4.26）は「社会性・事件性がある」であった（図 36）。

番組別に見ると、報道番組は「社会性・事件性がある」4.26、「視聴率が良かったから」3.62で3番組の中で一番高かった。報道番組はスポーツを取り上げる際にも「社会

性・事件性がある」ことが大きな理由になっていた。また、ここでも視聴率を理由にしているのは報道番組であることが目立つ結果となった。

スポーツ番組が3番組の中で最も高かったのは4項目。「放送する権利を持っていたから」3.55、「ストーリー（ケガからの復活）」4.06、「人としての魅力があるから」4.30、「元気が出る・夢がある」4.56であった。放送する権利の重要性は、映像使用の問題に大きく関わってくる。日々のスポーツニュースなどは特に影響が大きいことが伺える。

情報番組が3番組で最も高かったのは3項目。「成績（記録）が歴史的、偉業である」4.42、「育成・指導方法が面白い」3.11、「一般紙の一面が取り上げているから」3.67であった。取り上げる理由は歴史的偉業であり、そして一般紙の一面に取り上げられるという「世の中の関心の大きさ」が大きな要素になっていた。

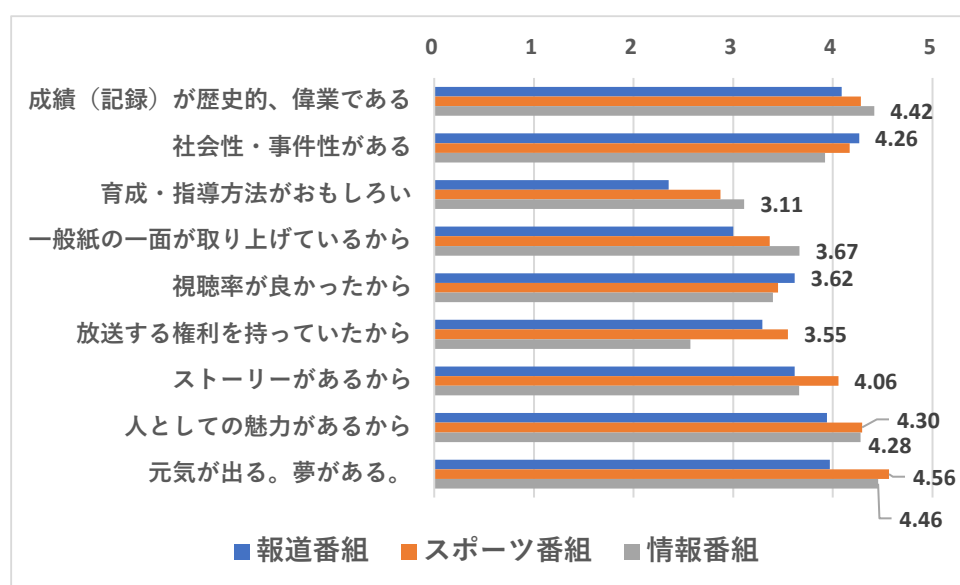


図 36 スポーツを番組に取り上げる理由の5段階の平均値

第4項 取材対象

取材対象は報道番組では「専門家」が最も高く 28.3%、次に「街の人」13.2%、「恩師」9.4%であった。

スポーツ番組は「選手本人」が 27.4%、「監督・コーチ（現在）」21.1%、「選手の家族」9.7%であった。

情報番組は「専門家」30.2%、「街の人」19.3%、選手本人も 10%を超えていた（図 37）。

スポーツ番組では「選手本人」、「監督・コーチ」「選手の家族」。報道番組は「専門家」、「街の人」、「恩師」。情報番組と報道番組の取材対象が「専門家」と「街の人」で共通していた。

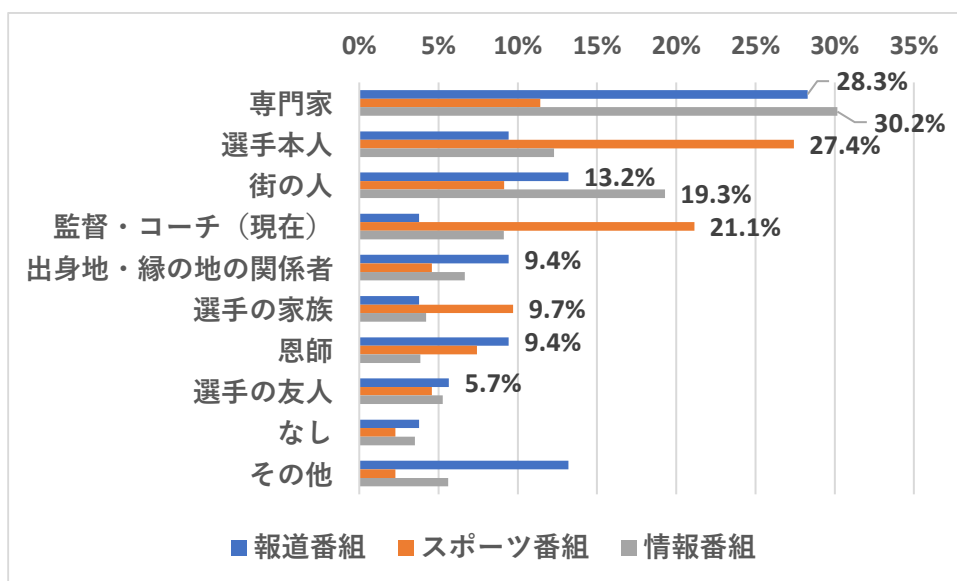


図 37 取材対象者（報道番組、スポーツ番組、情報番組）

第5項 取材の際に意識するポイント

取材対象者に取材する際に意識するポイントを尋ねた。「選手への配慮」が46%で「視聴者が求めているもの」が36.5%であった（図38）。

他にも、少数ながら「スクープ性」や「専門的な技術や考えが視聴者にちゃんと伝わること」、「視聴者、取材対象者、クライアントのバランス」という意見があった。

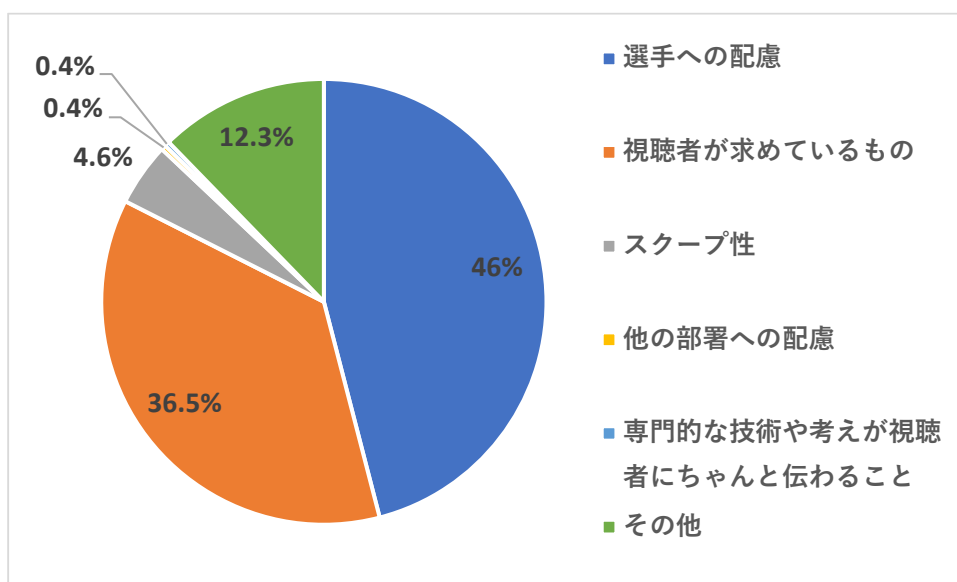


図 38 取材するときに意識するポイント

第6項 情報番組への期待

情報番組がスポーツを伝えるにあたり、報道番組やスポーツ番組を制作しているスタッフは情報番組に何を望むのか。報道番組やスポーツ番組のスタッフは情報番組でスポーツを伝える際に何を伝えて欲しいのか。さらに現在情報番組を制作しているスタッフは自分たちがつくる情報番組で何を伝えるべきなのかの検討材料として、情報番組がスポーツを通して伝えたいこと、伝えるべきことは何かについて聞いた。

全体の39.7%が人物・ドラマ（人柄）、続いて19.5%が大記録・歴史的偉業。10.3%が使える情報、ためになる情報。8.6%が独自であることの素晴らしさ・個性、8.0%が変化する世の中（影響）、4.9%が問題提起（変革）、日々の結果は3.3%であった（図39）。

さらに3つそれぞれの番組の分析では、情報番組が伝えるべきだと思う項目は「人物・ドラマ（人柄）」がいずれの番組も高い結果となった。特に報道番組が高く47.1%。次に情報番組が38.3%と続いた（図40）。

「大記録・歴史的偉業」を伝えるべきだと考えた番組は情報番組で27.2%。続いてスポーツ番組が22.5%と高い結果となった。また、「変化する世の中」を伝えるべきだと考えたのも情報番組で13.9%であった。

「使える情報・為になる情報」を伝えるべきだと考えたのは、スポーツ番組が最も高く15.5%であった。「独自であることの素晴らしさ・個性」は報道番組11.8%。「問題提起」も報道番組が最も高く8.8%であった。

報道番組がスポーツを通して情報番組に伝えて欲しいのは「人柄」「独自であることの素晴らしさ・個性」「問題提起（変革）」であった。

スポーツ番組が情報番組に求めるものは、「人柄」「使える情報・為になる情報」。そして情報番組が考える情報番組が伝えるべきことは「人柄」「歴史的偉業」「変化する世の中」であった。

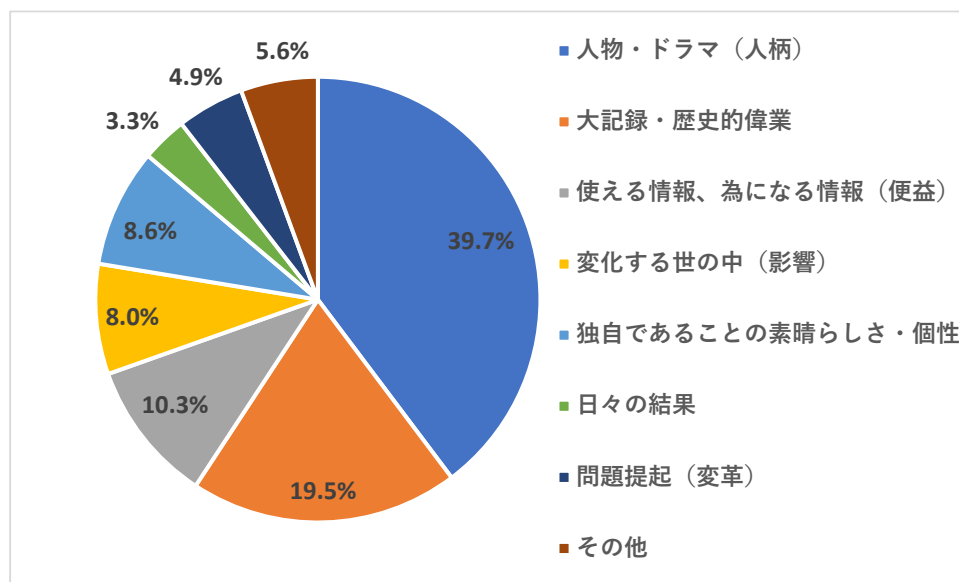


図39 情報番組がスポーツを通して伝えたいこと、伝えるべきこと

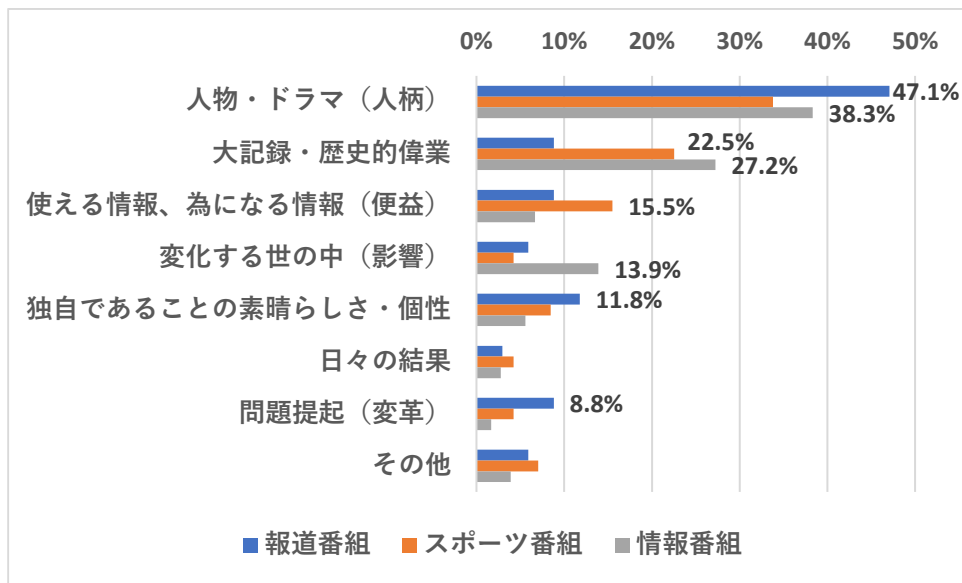


図 40 「報道番組」「スポーツ番組」が考える情報番組が伝えること

第 3 節 取材対象者（元アスリート・現指導者）へのアンケート調査

取材対象者である川口氏、福西氏、五郎丸氏、原氏の 4 人全員「情報番組」をみたことがあり、「情報番組」がスポーツを取り上げていることを知っていて、さらに「スポーツ番組」、「情報番組」の両方からの取材経験があった。

Q スポーツ番組から取材された放送内容で納得できたこと、できなかったこと

川口氏

A. 納得できなかった場面では、私自身が試合に負け感情を抑えきれず号泣している（言い方は良くないですが暴れている）場面が映像として残り、その場面が放送で流れました。プレー以外の選手にとって最も見られたくない場面が映像として流れてしまうことは私にとって悔しさと羞恥心以外何も残りませんでした。

福西氏

A. 納得できたときは、自分が話したことが理由も含めてすべて放送されたとき。納得できなかったときは、理由つきで否定的に話したことが、理由をカットして放送したとき

五郎丸氏

A. チームや背景ではなく、五郎丸ポーズがフォーカスされたこと。

原氏

A. 納得できたこと。陸上競技の強化の本質は「規則正しい生活」をしっかりと行わせること。監督夫妻が町田寮に住み込み、24 時間体制で選手のサポートをしている。その地道な取り組みが強い青学大へと成長したことを伝えて頂いたとき大変うれしく思った。

納得できないこと。箱根駅伝の成績が振るわなかった際に「監督がテレビに出すぎだから現場指導していないんじゃない?!」だから弱くなったんだと。あるいは、監督が〇〇作

戦とか、しゃべりすぎで目立つ存在はよくない・・・だから弱くなるんだとコメンテーターから言われたこと。

Q 情報番組とスポーツ番組のどちらに取材される方がいいか。その理由は。

川口氏

A. 現役時代はスポーツ番組が良いと思っていましたが、現役を退いた現在は情報番組が良いかと思っています。

(理由) サッカーの普及の観点から多くの視聴者に興味を持たれ人気拡大につながる。競技する側の側面だけでなく、選手のバックグラウンドを提供して頂ける情報番組には娯楽性があり、スポーツを知りたい欲求が増す。以上の2つが理由です。

福西氏

A. スポーツ番組

(理由) スポーツの少し深いところまで発信してくれることが多いため。

五郎丸氏

A. 番組によって異なる。

(理由) スポーツ番組と情報番組ではなく誰がどのように報道するかが大事です。

原氏

A. 情報番組

(理由) 業界の枠を超えてお伝えいただくことで、当該スポーツの認知度があがるため。また当該スポーツファン以外の方から興味を持っていただき、より多くのファンからの応援を頂くことができるから。励みとなる

Q 選手・指導者として伝えられて嬉しいこと上位3つ

以下の5つから、選択し、順位をつけてもらった。

- ①成績 ②技術 ③人柄 ④エピソード(ケガからの復活など)
⑤伝えられていることとは違う事実 ⑥練習方法・指導法

川口氏 1. 成績 2. 技術 3. 人柄

福西氏 1. 技術 2. 人柄 3. エピソード(ケガからの復活など)

五郎丸氏 1. エピソード(ケガからの復活など) 2. 伝えられていることとは違う事実
3. 技術

原氏 1. 成績 2. エピソード(ケガからの復活など) 3. 人柄

五郎丸氏の回答には「結果ではなく結界につながった背景とは何か。家族の支えではなく本質を伝えてほしい」との記述があった。

Q 情報番組とスポーツ番組でのスポーツの伝え方に違いを感じるか。その理由は。

川口氏

A. 違いを感じます。

(理由) スポーツ番組は、アスリートの側面から選手を知ることができる。情報番組は、競技から離れた一人の人間として選手を知ることができる。

福西氏

A. 違いを感じます。

(理由) 情報番組の視聴者がスポーツに興味が深くない方々が多いからなのか、簡単な部分が多い感じがします。

五郎丸氏

A. 結果を問わない

(理由) 負けても報道されるから

原氏

A. 違うと感じます。

(理由) スポーツ番組は結果や勝負の名場面、戦術を伝えることを主に考えられ編集されているように思います。情報番組は、スポーツの歴史、勝敗に至るプロセス、支える人々に対してフォーカスし編集されているように思います。

Q スポーツ番組に何を期待するか

川口氏

A. サッカーにおいてはゴールシーンだけでなく、GK のセーブ集も是非映像で流して頂きたいと思います。

福西氏

A. その競技の奥深さを伝えてもらいたいです。

五郎丸氏

A. 放送枠。

原氏

A. スポーツ結果を幅広く知りたいため、数多くの競技種目に対して正確な結果をリアルタイムに伝えてほしい。また、一つの競技に対しての名場面や戦術をより深く掘り下げてほしい。

Q 情報番組がスポーツを伝えることに何を期待するか

川口氏

A. 専門性と同時に、選手の人間としての魅力を視聴者の方々に提供して頂きたいと思います。

福西氏

A. その競技の奥深さを伝えてもらいたいです。

五郎丸氏

A. 選手との距離感を縮める

原氏

A. スポーツ結果だけではなく、なぜ優勝したのか、なぜ大記録が生まれたのか、なぜ復活したのかなど、それらのプロセスを知りたい(裏側の舞台・支えてきた関係者など)。該当スポーツをどういう視点で見ればより楽しむことができるのか、視聴者やファンの立場としての見方、楽しみ方を伝えて欲しい。

第4節 「スポーツ番組」と「情報番組」、同じ話題での比較

本節では、情報番組「ひるおび」とスポーツ番組「news23 スポーツコーナー、S☆1」が同じ話題をどのように放送したのか。放送時間と内容について分析した結果を示す。

対象になる話題は製作者に実施した「各番組のスポーツの取り上げ方に対するアンケート調査」で質問した「取り上げた話題の中で記憶に残っているもの」で挙げられた上位10番組である（表5）。

上位10から、放送時間の違いが顕著である2015年ラグビーW杯イングランド大会、2021年松山英樹マスターズ初制覇、2021年大谷翔平 MVP 獲得、2022年箱根駅伝青山学院大学優勝、2021年佐々木朗希投手完全試合達成、2022年サッカーW杯カタール大会を対象に、放送時間、放送内容の比較をした。

表5 「取り上げた話題の中で記憶に残っているもの」で挙げられた上位10

内容	報道番組	スポーツ番組	情報番組	総計
オリンピック・パラリンピック	12	13	42	67
大谷翔平	12	12	39	63
サッカーW杯	3	9	21	33
ラグビーW杯	2	2	18	22
村上宗隆	0	2	15	17
松山英樹	1	7	2	10
日大悪質タックル	1	1	7	9
WBC	0	3	5	8
佐々木朗希	0	2	5	7
箱根駅伝	0	1	6	7

第1項 放送時間と映像使用制限

2015年ラグビーW杯イングランド大会、2021年松山英樹マスターズ初制覇、2021年大谷翔平 MVP 獲得、2022年箱根駅伝青山学院大学優勝、2021年佐々木朗希投手完全試合達成、2022年サッカーW杯カタール大会の6つの話題で、NEWS23（スポーツコーナー）、S☆1、ひるおび！の3番組での放送時間は0分から96分までの差があった（表6）。6つの話題のうち、映像使用制限がある話題が3つ。松山選手マスターズ制覇、大谷選手 MVP、佐々木朗希投手完全試合の映像は制限なく使用できた。いずれにしても情報番組での放送時間が一番長かった。なお、S☆1は週末限定の番組のため、放送日にずれがあった。

表6 印象的な話題の各番組での放送時間（分）と映像使用制限

ひるおびの放送日・話題	news23	S☆1	ひるおび	映像 使用制限	備考
2015/9/21 ブライトンの奇跡	1	2	50	あり	S☆1の放送 2015 9/20
2021/4/12 松山英樹マスターズ初制覇	0	8	67	無	news23 ニュース枠 で15分放送

2021/11/19 大谷翔平 MVP	0	5	72	無	news23 ニュース枠 で 18 分放送
2022/1/4 箱根駅伝青学優勝	0	0	87	あり	-
2022/4/11 佐々木朗希完全試合	0	14	59	無	news23 ニュース枠 で 5 分放送
2022/12/2 日本代表対スペイン代表	0	15	96	あり	S☆1 の放送 2022 12/3 news23 ニュース枠 で 17 分放送

第 2 項 6 つの話題の放送状況

1) ブライトンの奇跡

2015 年ラグビーW 杯イングランド大会、「日本代表」対「南アフリカ代表」戦は終了間際の日本チームの大逆転劇によって話題となった試合で、ブライトンの軌跡と言われる試合である。このブライトンの軌跡について news23 のスポーツコーナーでは 1 分、週末の S☆1 でも 2 分の放送だった。映像使用に制限があるため、試合映像をあまり使えないため、スポーツ番組での放送時間は必然的に少なかった。情報番組「ひるおび」でも同じく映像使用に制限があるが 50 分間放送していた。

2) 松山英樹マスタース初制覇

2021 年松山英樹選手はマスタースを制覇した。同年のマスタース 4 日目は 4 月 12 日月曜日の早朝であり、優勝当日の news23 においては、スポーツコーナーで全く取り上げなかったが、報道枠である番組冒頭の 23:01~23:16 までの 15 分間取り上げた。日本人初制覇ということもあってなのか、スポーツニュースではなく報道として扱われていた。S☆1 では 4 月 18 日（日曜日）に 8 分間放送していた。マスタースは TBS の独占放送のため映像使用に制限がない。ひるおびは優勝当日に 67 分、その後も週末まで扱い続けた。

3) 大谷翔平 MVP

2021 年大谷翔平選手のアメリカンリーグ MVP 獲得に関しては、11 月 19 日の「news23 のスポーツコーナー」では放送がされなかった。しかし、23:31~23:49 までの 18 分、報道枠でニュースとして放送された。MVP の発表が 11 月 19 日金曜日であったが、翌日 20 日土曜日の「S☆1」は、28 分の放送時間のうち 5 分しか扱われなかった。「ひるおび」は 72 分放送していた。

4) 青山学院大学優勝

箱根駅伝は日本テレビの独占放送であるため、映像使用に制限がある。2022 年箱根駅伝青山学院大学優勝は「news23 のスポーツコーナー」「S☆1」では、全く扱われていなかった。対して情報番組である「ひるおび」は、原監督と飯田貴之(青山学院大学陸上部 主将)をゲストに呼び、ボード展開で限られた映像を使用しながら 87 分間放送した。

5) 日本代表対スペイン代表

2022 年サッカーW 杯カタール大会「日本代表対スペイン代表」戦に関しても、映像使用制限があるにも関わらず、情報番組である「ひるおび」はグループ E 組の初戦、日本代表対ドイツ代表戦の 5 日前、11 月 18 日からゲストに福田正博氏を呼んで積極的に取り上げた。最終的には 12 月 20 日まで合計 21 回放送し、11 月 18 日から 12 月 13 日までは 17 日間連続で取り上げた。

第 5 節 3 つの話題における放送内容の分析

上記で比較した 6 つの話題から 3 つを選び、ひるおびで伝えた内容を分析した。

第 1 項 2021 年大谷翔平 MVP 獲得

この日のひるおびでは、「大谷翔平選手満票でメジャーMVP 選出 日本人初の快挙」というタイトルで伝えた。まずはメジャーリーグで MVP を獲得した 2001 年のイチロー選手との比較を紹介した。イチロー選手は打率 350(首位打者)、盗塁 56(盗塁王)、対する大谷選手は本塁打 46、投手として 9 勝 2 敗でタイトルはなかった。しかし MVP 選考の投票権を持つ全米野球記者協会の 30 人(ア・リーグ本拠地のある 15 都市から記者 2 人)全員が大谷選手に投票。イチロー選手は 289 票(2 位と 8 ポイント差)で満票ではなかった。イチロー選手は記録を塗り替え、大谷選手は歴史を塗り替えていると伝えていた。

さらに成績だけではなくプレー中のマナーの良さに注目した。7 月 7 日の対レッドソックス戦で、投手大谷選手の速球で相手打者のバットが折れてしまった。その直後に、大谷選手自身がその折れたバットを拾って打者に渡すエピソードや 6 月 18 日の対タイガース戦での、四球を選び一塁に向かう途中でゴミを発見し大谷選手がゴミを拾ってポケットに入れるエピソードを紹介した。このような大谷選手の行動はいつから生まれたのかについて、高校生の頃に書かれた目標達成シートを紹介しながら、検証する内容を放送した。

体のケア	サプリメントをのむ	FSQ 90kg	インステップ改善	体幹強化	軸をぶらさない	角度をつける	上からボールをたたく	リストの強化
柔軟性	体づくり	RSQ 130kg	リリースポイントの安定	コントロール	不安をなくす	力まない	キレ	下半身主導
スタミナ	可動域	食事 夜7杯 朝3杯	下肢の強化	体を開かない	メンタルコントロールをする	ボールを前でリリース	回転数アップ	可動域
はっきりとした目標、目的をもつ	一喜一憂しない	頭は冷静に 心は熱く	体づくり	コントロール	キレ	軸でまわる	下肢の強化	体重増加
ピンチに強い	メンタル	雰囲気 に流されない	メンタル	ドラ1 8球団	スピード 160km/h	体幹強化	スピード 160km/h	肩周りの強化
波をつくらない	勝利への執念	仲間を 思いやる心	人間性	運	変化球	可動域	ライナー キャッチ ボール	ピッチングを増やす
感性	愛される人間	計画性	あいさつ	こみ拾い ②	部屋そうじ	カウント ボールを 増やす	フォーク 完成	スライダー のキレ
思いやり	人間性	感謝	道具を 大切に使う ①	運	審判さん への態度	遅く落差 のある カーブ	変化球	左打者への 決め球
礼儀 ③	信頼される人間	継続力	プラス思考	応援される人間になる	本を読む ④	ストレートと 同じフォーム で投げる	ストライク からボール に投げる コントロール	奥行きを イメージ

図 41 目標達成シート

大谷選手は高校生の時にドラフト1位指名を受けるため（目標）に8つの項目を立てていた。その中に「運」があり、その「運」を導くために①「道具を大事に使う」や②「ゴミ拾い」。また「人間性」を高めることも必要で、そのために③「礼儀」があった。

さらに④「本を読む」から大谷選手が「言葉」を大事にしているエピソードを紹介。好きな言葉は「権利と義務」。花巻東高校野球部は部員が約100人。そのうちベンチ入りが18人で試合に出るのは9人。花巻東高校野球部佐々木監督が常々選手に伝えていた「バッターが打ってボールがグラウンドに転がった時、初めてバッターに塁まで全力で走る権利が生まれる。走ることをできない人（試合に出ることができない選手）に対して全力でプレーする義務はこうして目に見える形で果たさないと伝わらない」という言葉を今も意識してメジャーリーグでプレーしていると伝えていた。満票でのMVP獲得という情報をきっかけにして「人柄」を紹介した放送であった。

第2項 2021年松山英樹マスターズ制覇

TBSでは早朝からマスターズ・トーナメント最終日の模様を生中継していた。マスターズ・トーナメントはTBSの独占放送である。

日本人初のメジャー制覇がかかっていただけに視聴率のグラフは右肩上がり、世帯平均視聴率（TBS系列地上波／後半の日本時間12日午前5時～8時20分）が12.1%（関東地区）。瞬間最高視聴率は、優勝を決めた午前8時3分から同5分ごろの17.7%であった。同日のひるおびは独占放送のアドバンテージを生かして午前10時25分からの枠で、夕暮れのオーガスタから表彰式の終わった松山選手の生出演を中継し、歴史的快挙であるマスターズ優勝直後の感想を本人に伝えてもらった。

午後の枠では松山選手の最終日の一打一打を徹底分析するわけだが、その前にいかにこの優勝が歴史的快挙であり、素晴らしい出来事であるのかを表現するのに「沈黙の55秒」と題してこの写真を使った。



図42 涙の解説者「沈黙の55秒」2021年4月13日TBS「ひるおび！」より

実況の小笠原アナウンサーと解説の中嶋常幸プロ、宮里優作プロが流した涙である。毎年現地から中継しているが、コロナのため司会者も解説者もオーガスタに行くことができなかった。そこでこの年はクロマキー処理といって、放送上はオーガスタ・ナショナル・ゴルフクラブからの映像と合成できる、「グリーンバック」と呼ばれる殺風景なスタジオから放送していたのである。優勝の瞬間、中嶋プロの目から涙が溢れる。それを感じた小笠原アナウンサーが涙声に。宮里プロはもう言葉にならない。今までマスターズに挑戦してきた全ての日本人プレーヤー達の想いが流させた涙。日本人初のメジャー制覇が誕生した嬉し涙。この涙の沈黙が約55秒間続いた。放送上はオーガスタ・ナショナル・ゴルフクラブが映されているので、沈黙ではなかったが、ひるおびはここに注目。スポーツ中継上は絶対に放送しない殺風景なスタジオでの涙をあえて放送した。殺風景なスタジオでの3人の涙。55秒間の沈黙は、松山英樹選手が成し遂げたマスターズ優勝という「歴史的偉業」によって起きた「事件」であったと放送した。

第3項 2022年W杯カタル大会

ひるおびはカタル大会を合計21回放送した。しかし、この大会は映像使用に制限があるため、試合映像以外で伝えるために様々な工夫を凝らしたフリップを作成した。

1) グループリーグ E 組 日本代表初戦 ドイツ戦

初戦の 11 月 23 日ドイツ戦当日の放送では、「ドーハの悲劇」後のカタールでの W 杯予選、アジア杯、親善試合から、日本代表勝利の方程式と題して「カタールでは負けていない」フリップを独自に作成。実際ドイツ戦に勝利して、この方程式は生かされた。

1993年	 日本 2-2  イラク 	W杯予選
2008年	 日本 3-0  カタール 	W杯予選
2011年	 日本 1-1  ヨルダン 	アジア杯
	 日本 2-1  シリア 	アジア杯
	 日本 5-0  サウジアラビア 	アジア杯
	 日本 3-2  カタール 	アジア杯
	 日本 2-2  韓国 	アジア杯
	 日本 1-0  オーストラリア 	アジア杯
2013年	 日本 2-1  カナダ 	親善試合
	 日本 1-0  イラク 	W杯予選
2021年	 日本 1-0  中国 	W杯予選
2022年	 日本 2-1  ドイツ 	W杯
 12戦 9勝3分け 無敗		

図 43 「カタールでは負けない」フリップ

ドイツ戦の視聴率は午後 10 時のキックオフであったにもかかわらず、ビデオリサーチによると関東地区の平均世帯視聴率は 35.3%（個人視聴率 22.1%）。瞬間最高視聴率は試合終了後に 40.6%を記録した。ひるおびは北京オリンピックと比較した。北京オリンピックの関東地区の開会式は平均世帯視聴率が 21.3%（個人視聴率 13.2%）。瞬間最高視聴率は選手団の入場で 25.2%。さらに関心の高さを表すために、ひるおびでは 11 月 23 日の水道の配水量を示した（図 44）。試合開始の 22 時から平均の配水量を下回り、ハーフタイムの間は配水量が跳ね上がる。後半が始まると再び平均の配水量を下回り、試合終了後に配水量が跳ね上がっている。いかに、試合中にトイレを我慢していたかを伝えるデータであった。

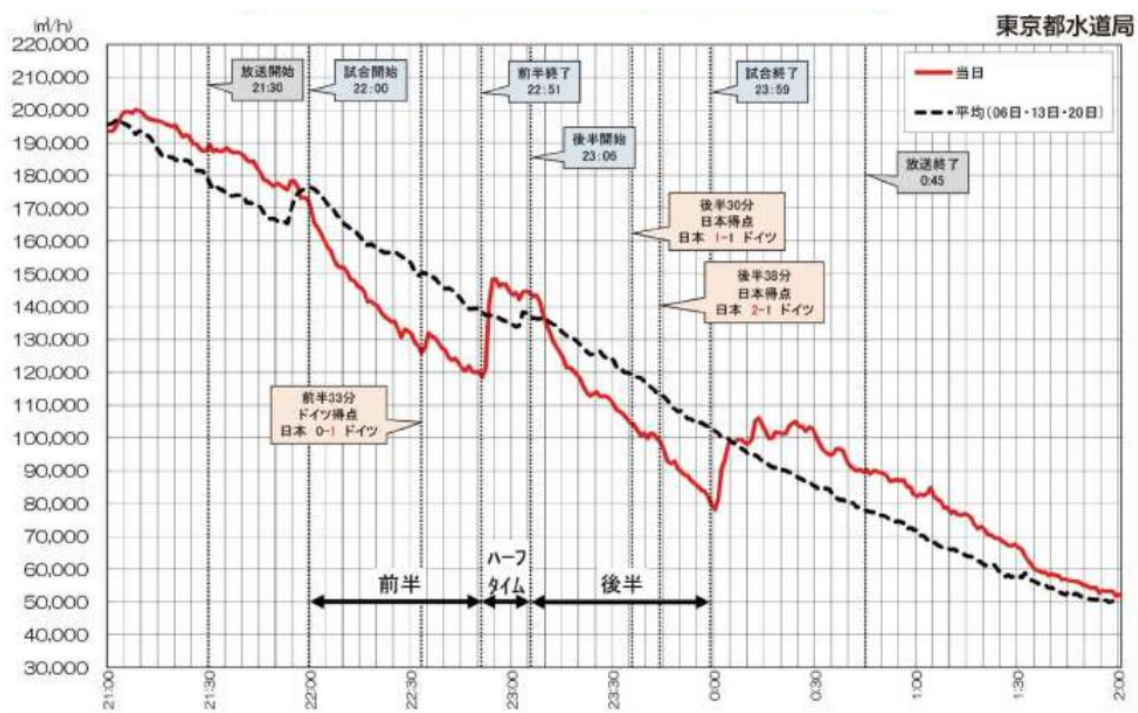


図 44 11 月 23 日の主要配水量

2) グループリーグ E 組 日本代表対スペイン戦

さらにこのカタール大会で世界をざわつかせた「三苦の 1 ミリ」が生まれたスペイン戦。12 月 2 日午前 4 時のキックオフにどのくらいの視聴者が関心を示しているのかを表すために、都内のマンションの灯りを午前 3 時、午前 4 時、午前 5 時と撮影した。徐々に灯りのついてる部屋が増えていた (図 45)。

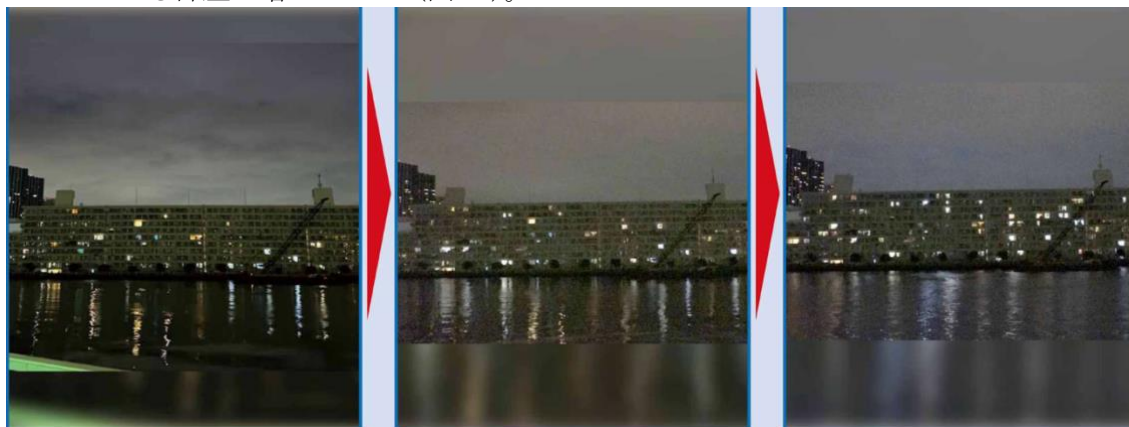


図 45 マンションの部屋の灯りの変化

「三苦の 1 ミリ」ではスタジオに 12 センチのラインを引いてピッチ内、ピッチ外を作り、「三苦の 1 ミリ」のボールの位置を再現。あらゆる角度からの映像を生放送した。また、「三苦の 1 ミリ」を説明する上でどうしても欠かせないのがサッカーのルール。これもわかりやすく紹介するフリップを作成した (図 46)。さらに今回の W 杯で発揮したテクノロジーの進化。ボールの中に埋め込まれたセンサーチップについても説明するフリップを作成した (図 47)。

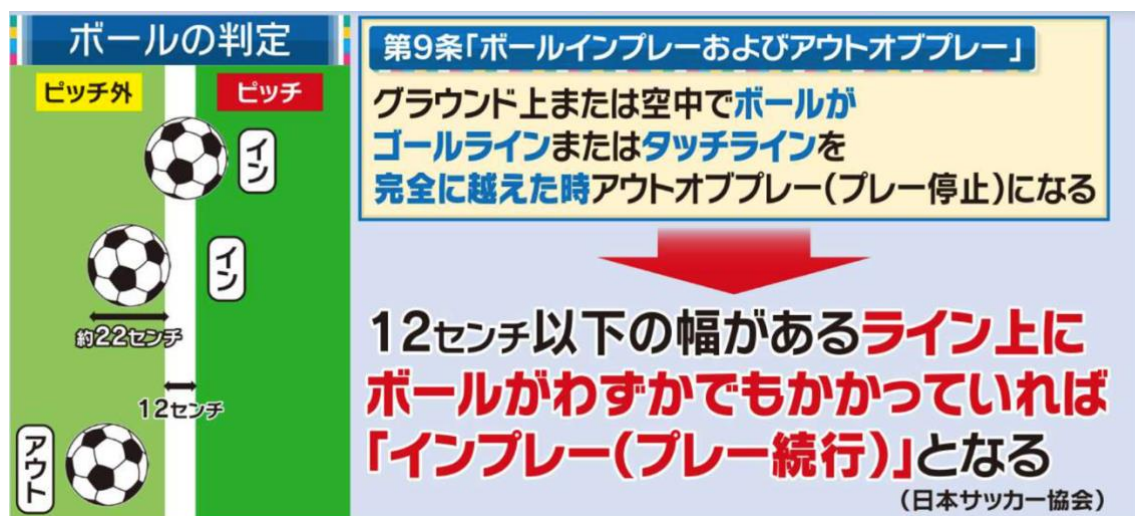


図 46 ボールの判定「サッカー規則 2022/2023」



図 47 FIFA ワールドカップ 2022 公式球

3) 2022 年 W 杯カタール大会でのスタジオゲスト

放送した 21 回すべてで、スタジオに元代表選手などのゲストを招いていた（表 7）。元代表選手は 1993 年 FIFA ワールドカップアジア地区最終予選、日本代表対イラク代表戦、いわゆる「ドーハの悲劇」の経験者である福田正博氏と、1996 年アトランタ五輪男子サッカーグループリーグ D 組第 1 戦日本五輪代表対ブラジル五輪代表選、いわゆる「マイアミの奇跡」の経験者である前園真聖氏。さらにスペインサッカーに詳しいスポーツジャーナリストの小澤一郎氏。スポーツ番組ならば当然のゲスト解説者であるが、情報番組でもそれに劣らないゲストをスタジオに呼び、先に紹介した水道使用量や灯りがつく部屋の数のような社会の変化以外に、フリップを使用しながら戦術などの専門的な内容についてもわかりやすく、深く説明してもらった。

表 7 W 杯カタール大会中のスタジオゲスト

日付	話題	ゲスト
11 月 18 日	サッカー W 杯	福田正博、前園真聖
21 日	サッカー W 杯	福田正博

日付	話題	ゲスト
22 日	サッカーW 杯	上川徹、福田正博
23 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
24 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
25 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、本並健治
28 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
29 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
30 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
12 月 1 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
2 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
5 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
6 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
7 日	サッカーW 杯	福田正博、小澤一郎
8 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖
9 日	サッカーW 杯	福田正博、本並健治、権田修一
12 日	サッカーW 杯	福田正博、小澤一郎
15 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖
16 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖
19 日	サッカーW 杯	小澤一郎、松井大輔
20 日	サッカーW 杯	福田正博、小澤一郎、亘崇詞

第4章 考察

本研究では、「情報番組」がどのような理由や基準でスポーツを取り上げて、どんな内容を伝えているのか。スポーツを伝える「情報番組」の役割を明らかにするために、情報番組で取り上げられたスポーツの話題・内容とその理由について、様々な角度から調査し、分析した。その結果、情報番組が扱うスポーツの話題には、国際大会とそれ以外では異なる特徴があり、さらには、使用するスポーツ競技の映像に制限があるかないかでその放送内容が変わってくるということが明らかとなった。

また、本研究のユニークな点は、制作にあたるスタッフの考えを聞いた事である。回答者のほとんどはスポーツ経験者で、その7割近くが都道府県大会出場レベル以上の成績を持つことは興味深い結果であった。さらに、所属している部局を超えて協力し合い、また取材内容を共有し合い、より良い番組、放送内容とするための努力が繰り返されていることを見いだすことが出来た。つまり、情報番組において、スポーツは週1回以上伝えられる強力なコンテンツとなっているが、伝える内容の多くは、スポーツ局や報道局のスタッフが、日々の地道な取材をつづけられていることに支えられ、成り立っていた。

本章では、「情報番組」でスポーツを取り上げる際の基準、「情報番組」がスポーツを伝える際の工夫、「情報番組」がスポーツを伝える独自の役割を中心に考察する。

第1節 情報番組がスポーツを取り上げる基準

情報番組は放送時期の濃淡はあるが、頻度によると週に1回以上、スポーツに関する話題を伝え、長い時には90分伝えていた。

情報番組でスポーツを取り上げる場合、オリンピック、ワールドカップ、世界選手権、テニス4大大会、メジャーリーグといった、国際的に名高い大会で成績を残したチームや選手を扱うことが多いことが分かった。

第1項 国際大会における基準

13年間を通して、番組でスポーツを取り上げる基準が見えてきた。国際大会で活躍した日本のチーム、または日本人選手であること。では、活躍とは何か。13年間で取り上げた862回の中で175回と、最も多く取り上げたオリンピックではメダル獲得が基準になっていた。壮行会や開会式も取り上げるが、番組ではメダル獲得ボードを作り、メダル獲得をきっかけにして、メダルを獲得した競技は必ず取り上げた。また、オリンピック前に行われる、オリンピック選考を兼ねた体操、水泳、卓球などの世界大会もオリンピックでメダルが期待されそうな選手の場合は取り上げていた。

サッカーを取り上げる基準はW杯出場。男子の場合はW杯の予選から取り上げていた。女子は予選ではなく、本戦に出場した場合のみ取り上げていた。しかし女子は2011年W杯優勝、2015年W杯準優勝。2011年のW杯優勝によるなでしこ効果で、2012年はアルガルベカップ準優勝、W杯U-20(日本開催)も取り上げていた。

テニスの基準はグランドスラム(全豪オープン、全仏オープン、ウィンブルドン選手権、全米オープン)でベスト8以内。この条件をクリアできる日本人選手は2人。錦織圭選手と大坂なおみ選手。13年間で87回テニスを取り上げているが、全てこの2人である。相撲の成績の基準は優勝か昇進、または引退。さらに連勝記録も取り上げる基準であった。情報番組においてフィギアスケートの評価はとて高く、オリンピック以外のGPシリーズ、全日本選手権、四大陸選手権で日本人選手が出場していれば取り上げていた。

つまり、情報番組で取り上げるスポーツは、メダル獲得、テニスのグランドスラムでのベスト8以上や連続記録などの好成績がきっかけとなっていることがわかった。しかし、これをきっかけとしながら、成績だけでなく、人となりや幼少期までに遡りエピソードを

探し、放送しているのが情報番組の特徴の一つと言える。これらの映像、特に幼少期の映像を得るには、選手や選手家族と信頼関係のあるスポーツ番組の取材から提供されるものが多くあることが分かった。

第2項 歴史的偉業と社会性・事件性、そして問題提起

取り上げ方の特徴として、定期的な国際大会（オリンピックやサッカーW杯）以外では「各番組のスポーツの取り上げ方に関するアンケート調査」の結果、大きく2つに分類された。歴史的偉業(50.3%)と社会性・事件性のある話題(15%)である。

1)歴史的偉業を達成した日本チーム、または日本人選手には、2015年ラグビーW杯イングランド大会、南アフリカ戦勝利。2021年松山英樹選手マスターズ制覇、2021年大谷翔平選手ア・リーグ MVP 獲得、2022年大谷翔平選手 104年ぶり二桁勝利&二桁本塁打、2022年佐々木朗希投手完全試合達成、2022年村上宗隆選手 56号本塁打など、一般紙の新聞の一面を飾る社会的なニュースになる話題が該当する。

事件性を含む話題は、2017年日馬富士暴行問題。現役の横綱が起こした暴行問題、その結果日馬富士が引退したことや、その後相撲協会と貴乃花親方が全面対決したこと、部屋制度、一門、親方の存在が、日本の様々な組織や家族の問題として取り上げられた。13年間の放送で相撲を71回取り上げている。そのうちの43回が2017年。その2017年の1月と3月は稀勢の里連続優勝で18回。残りの25回が不祥事であった。相撲については取組というより、事件性の要素が大きかった。

さらに、事件性の内容では、2018年日大悪質タックル問題。日大フェニックスと関西学院大学ファイターズとの定期戦で起こった悪質タックル。「日大は不誠実である」関西学院大学の怒りの会見。日大選手も謝罪会見で「QBを潰せ」とコーチ監督から指示があったと明言。対して日大監督コーチが緊急会見を開き、悪質タックルを否定。関東学連が日大前監督とコーチを除名処分。日大のナンバー2であった前監督の強大な権力が問題となり、6月には日大の職員が田中理事辞任求め会見。悪質タックル問題は日大理事長の責任問題に発展した。2018年は28回この日大悪質タックル問題を取り上げた。

2)社会性のある話題では、2022年サッカーW杯カタール大会でのウクライナ予選を取り上げた。2月24日にウクライナ侵攻が始まってから、FIFAはW杯欧州予選グループD2位のウクライナ対イングランドのプレーオフの日程を3月24日から6月1日に変更。一方同じくW杯欧州予選グループH2位ロシア代表チームに対してはFIFA主催大会への参加を認めないことを決定。さらにウクライナのチームを支えたヨーロッパ各国の姿勢を伝えた。この内容は、news23の4分もスポーツコーナーではなく、ニュース枠で伝えていて、実質スポーツ番組ではウクライナのワールドカップ予選はスポーツ番組（S☆1、news23のスポーツコーナー）では伝えられていなかった。

表 8 ウクライナのW杯予選

放送日・話題	news23	S☆1	ひるおび!
2022/6/6「ウクライナW杯」	ニュース枠4分	放送なし	45分

それ以外でも2010年バンクーバーオリンピックでのスノーボード・ハーフパイプ男子代表国母和宏選手の服装と会見での発言。2020年テニスの全米オープン。大坂なおみ選手が人種差別と警察への抗議で7試合異なるマスクを用意して臨んだ大会などを取り上げた。

3) 社会性・事件性のある話題を取り上げることが情報番組の特徴の一つと言えるが、それは同時に社会への問題提起を伴う場合がある。佐々木朗希選手の2試合連続完全試合に関する放送では、2試合連続完全試合よりも、大事に育てる方針を優先させた球団の価値観の変化、さらにそれに理解を示す世の中の変化を伝えていた。具体的には、4月10日に28年ぶりに完全試合を達成した次の試合も佐々木投手は8回までパーフェクトピッチング。しかし2試合連続間全試合達成目前の9回表で交代。1試合だけでも偉業なのに2試合連続完全試合はどうたたえていいのかわからないほどの前人未到大記録である。その可能性があったのに井口監督は何故交代させたのか。ひるおびは2019年7月の高校野球宮城県大会を紹介した。準決勝で129球を投げて完封勝利した佐々木投手を大船渡高校の国保監督は故障を防ぐためという理由で決勝戦に出場させなかった。以降、ロッテに入団してからも1年目は開幕戦前に160キロを計測するも、肘に違和感を覚えスロー調整。一軍・二軍ともに公式戦登板は無く、肉体強化を図る1年。2年目は中10日間隔で調整して、11試合3勝2敗。そして3年目で完全試合達成と紹介した。「肩は消耗品である」という問題提起を、番組を通して行っていた。

第2節 報道番組、スポーツ番組、情報番組の相違点

第1項 番組制作者達の考え方

報道番組がスポーツを取り上げた理由として「社会性・事件性」の回答が高い。取材内容においては、「問題点、課題点」「価値・影響力」が高かった。また取材対象者として最も高い結果は「専門家」であった。この結果から、報道番組の取り上げ方として、スポーツの結果に対する価値や問題点を伝えることが特徴として挙げられ、その内容を伝えるために専門家の意見を取り入れる傾向にあることが考えられる。

スポーツ番組が、報道番組と情報番組と比較して特に高い傾向が現れたのは取材対象者で「選手本人」「監督・コーチ（現在）」「選手の家族」であった。取材内容としては「試合内容・結果」。スポーツ番組の取り上げ方として試合結果を伝えることが特徴として挙げられ、その内容を伝えるために選手を中心とした関係者から取材を行っていることが考えられる。番組制作のなかでもスポーツ番組が最も選手の情報を有していると言える。

情報番組がスポーツを取り上げたなかで最も印象に残った内容として「成績（記録）が歴史的、偉業である」の回答が高い。取材対象者として「専門家」「街の人」が高い。

これらから情報番組は、日々の試合結果ではなく突出した記録や出来事が生じた際に、如何にそれが影響力の大きい出来事であるのかを、「専門家」や「街の人」といった選手本人ではない第三者の声を拾い上げること、特に報道番組とは異なる点は「街の人」の反応を伝えることでより多くの人に記録の偉大さを広げ、喜びや感動を伝えるようにしていることが考えられる。また、報道番組担当者は情報番組に「問題提起」「独自であることの素晴らしさ」を求め、スポーツ番組担当者は「使える情報、為になる情報」を求める声が多かった。

情報番組が取り上げるべきだと思う内容においては、いずれの番組も「人柄」が最も高い結果となったことから、情報番組が、試合結果を単に伝えるのではなく、その結果にまつわる選手や指導者、家族、裏方スタッフ等のサイドストーリーを伝えていくことは一つの特徴と言える。

さらに情報番組は長い時間をかけてひとつの話題を取り上げることが可能であり、スポーツを通して見えてきた社会の問題点をより深く伝えることや、スポーツ番組の取材で得た情報ではあるが、スポーツ番組の放送時間では伝えきれない監督の指導法といった一般社会でも使える情報・為になる情報を、より多くの人により深く知ってもらうことも特徴の一つである。また、「変化する世の中」という点は情報番組に特化した内容であり、世の中の動向を伝えていくことも情報番組の特徴であると言える。

第2項 取材対象者（元アスリート・現指導者）の視点

今回の調査では取材対象者の全員が「情報番組」と「スポーツ番組」の違いを認識していた。「情報番組」と「スポーツ番組」のどちらに取材される方がいいかという質問に対して、川口氏の「サッカーの普及の観点から多くの視聴者に興味を持たれ人気拡大につながる。競技する側だけでなく、選手のバックグラウンドを提供して頂ける情報番組には娯楽性があり、スポーツを知りたい欲求が増す」と原氏の「業界の枠を超えてお伝えいただくことで、当該スポーツの認知度があがるため。また当該スポーツ以外の方から興味を持っていただき、より多くのファンからの応援を頂くことができるから。」にあるように、取材対象者が「情報番組」に求めているのは、そのスポーツ競技の普及であった。

選手・指導者として伝えられて嬉しいこと上位3つ合計12のうち、成績が2、技術が3、人柄が3、エピソードが3であった。やはり取材対象者が伝えて欲しいのは成績（結果）であり技術であった。五郎丸氏の「本質を伝えて欲しい」との記述もアスリートの本音を言い表していた。

また、スポーツ番組から取材された放送内容で納得できなかったこととして、川口氏の「試合に負け感情を抑えきれず号泣している（言い方は良くないですが暴れている場面）」、五郎丸氏の「チームや背景ではなく、五郎丸ポーズがフォーカスされたこと」など、現実には取材されたくない内容もあった。

番組制作者へのアンケート調査で、取材時に意識するポイントとして、「選手への配慮」が46.2%で「視聴者が求めているもの」が36.4%であった。制作スタッフは選手へ配慮しつつ、視聴者が求めている取材をするという姿勢であるが、取材する側と取材される側では、取材したいこと、されたいことは必ずしも一致しないことが明らかになった。

「情報番組」がスポーツを伝えることに期待することは、川口氏「専門性と人間の魅力」、福西氏の「競技の奥深さ」、五郎丸氏の「選手との距離を縮める」、原氏の「結果よりもプロセスが知りたい」であった。「各番組のスポーツの取り上げ方に関するアンケート調査」で「スポーツ番組」や「報道番組」のスタッフが「情報番組」に求めている歴史的偉業、人柄、使える情報・為になる情報、変化する世の中に加えて、取材対象者は競技の「専門性」や「奥深さ」を伝えることを「情報番組」に期待していた。

情報番組は選手の人間としての魅力を伝えることで選手と世の中との距離を縮めることを期待され、選手が偉業に至ったプロセスを伝えることで、そこから見えてくるチーム作りや指導法、さらに独自の練習方法など、そのスポーツ競技の専門性や奥深さを伝えることが期待されていた。

第3項 映像使用制限による効果

国際大会での偉業や、それ以外の社会性・事件性に関わらず共通することとして、試合映像を制限なく使えるかどうかは、情報番組での放送内容、放送時間とくにその配分に大きな影響を及ぼしていた。

特徴的だったのは、2021年の松山英樹選手マスターズ制覇に関する報道と2022W杯である。前者のマスターズは地上波ではTBSの独占放送であった。そのため、情報番組では松山選手のマスターズ制覇の凄さを伝えるために、松山選手が優勝した瞬間の解説者らの55秒もの沈黙時間をカットすること無く、あえてマスターズ制覇がもたらしたスタジオでの「事件」として放送した。

テレビ放送による沈黙は、「事件」としての要素もあるが、伊藤（2020）によると効果的な沈黙はスポーツの名場面となる要素の一つであることから、沈黙はまた優勝の感動を伝えるコンテンツとして情報番組でも扱われたものと推察される。後者のW杯ではひるおびで使える映像には制限があった。そのため、フィリップをたくさん作成し、詳しい解説をゲストに依頼するなど、試合映像が少ないことを様々な工夫で補っていた。これは、放

送局にとって、映像使用に制限があるスポーツ競技をどう伝えるかという課題を、情報番組がスポーツ番組に比べて放送時間に余裕があることでなし得た一つの例である。今後、放映権価格の高騰により、世界的なスポーツ大会の放映権をテレビ局が持たないケースも想像されるため、情報番組が専門的なところを分かりやすく伝える工夫は今後も続けていく必要がある。

第4項 スポーツ経験者による番組制作

今回、解答した多く的人是はスポーツ経験を有していた。サッカーや野球に限らず、年齢を重ねるごとに競技を行う人口が減るピラミッド構造。一方、年齢を重ねるとともにその競技に関わる人が増えるという考え方。選手はもちろん、審判や指導者、スポンサーやメディアといったスポーツ競技の発展には欠かせない人々が増えていく構図。これが逆台形モデル（平田, 2012）である。今回、スポーツ報道は逆台形モデルによって支えられていることが本研究で示された。逆台形モデルの重要性は多くの研究で指摘されているが、実証した初めての研究といえるだろう。

今回アンケートに答えた人がまた、特に熱心な集団であった可能性もあるが、スポーツに関わる報道が、スポーツ経験者により支えられ、作られていることをスポーツに関わる指導者や競技団体の関係者達は認識し、今後のメディア活用に大いにいかすべきであろう。

第3節 「情報番組」がスポーツを伝える独自の方法

情報番組「ひるおび」はスポーツ番組、「news23のスポーツコーナー」や「S☆1」と比較して圧倒的に長く放送時間を確保できていた。競技映像の仕様に制限がある場合でも、その話題を長く放送するために「情報番組」には独自の方法があった。

第1項 「競技のルール」「社会の変化」「人柄」を丁寧に説明する

スポーツ番組の視聴者と違い、情報番組の視聴者はスポーツに詳しいとは限らない。したがって、スポーツ競技のルールをできるだけ丁寧に説明した。「三苦の1ミリ」でもインプレーとアウトプレーのルールを丁寧に説明したように、2022年の佐々木投手の完全試合達成の時にも完全試合のルール「野球で1人の投手が相手チームを無得点に抑えるだけでなく、無安打、無四球、無失策で1人の走者も出さず、相手を完全に封じ、その試合の最終回まで完投して勝った場合」とルールを説明。その後で2005年8月の西武対楽天戦、西口文也投手が9回終了まで完全試合だったが、10回にヒットを打たれて完全試合を逃したケースを紹介した。いかに完全試合の達成が困難であることを伝えることに重きを置いていた。

「社会の変化」については、W杯カタール大会の場合は全国各地のパブリックビューイング、スポーツバーでの盛り上がりを日本地図に入れ込んで表現した。さらに視聴率だけで比較するのではなく、水道配水量の違いや、マンションの灯りの変化に注目し、世の中の注目度の高さをつぶさに伝えるために様々な独自のフリップを作成した。

「人柄」は「各番組のスポーツの取り上げ方に関するアンケート」で情報番組がスポーツを通して伝えるべきことの2位に入っていた重要な要素である。人柄を伝えるには3つの取材方法が確認された。

- ① 本人やその家族を取材して、「人間性」を伝える。
- ② ライバルとの関係取材して、「成長の過程」を伝える。

③ 支えてきたスタッフを取材して、選手を支える「環境」を伝える。

「人間性」を知るために、趣味や好きな食べ物、ファッションはもちろん子供の頃の夢、卒業文集に書いてきた目標などを徹底的に調べていた。2022年のサッカーワールドカップカタール大会での三苫選手と田中碧選手もそうであるが「成長の過程」に欠かせないのがライバル関係である。2010年バンクーバーオリンピックではフィギアの浅田真央選手とキム・ヨナ選手、2018年平昌オリンピックでの小平奈緒選手と韓国の李相花選手との友情の物語などがその例である。成功したアスリートの環境こそ選手を語る要素として欠かせない。その他、メンタルコーチなどチームを編成して活動しているアスリートの環境なども伝えていた。

第2項 専門家として経験者をキャスティング

サッカーW杯2022年「カタール大会」では全放送日において、経験者をキャスティングしていた。他にも、2022年にスポーツを扱った回をみると、スポーツを取り上げた話題でよんだ専門家は53人で、延べ人数は145人いた（詳細は資料1で提示）。

「情報番組」ではより長い時間をかけてより視聴者にわかりやすく伝えるために、スポーツ番組に劣らない専門家を呼び、専門的なことをわかりやすく伝えるための工夫をしていた。専門家のキャスティングがスポーツ番組に劣らなかったことは、情報番組がルールや戦術、ポジショニングなど、よりスポーツに特化した内容を伝えることを可能にした。この点において、2022年のサッカーW杯カタール大会は、「情報番組」がスポーツを伝える上で、より専門性を高めていく契機となる大会であったと言える。

このように専門性の高いことを伝えたことは、これまで情報番組が誰にでも分かるように伝えてきたこととは明らかに矛盾していた。情報番組の視聴者が必ずしもスポーツに詳しいわけでもないのに、より専門性を増してきたのは何故なのか。理由は時間稼ぎ。つまり放送時間を長くするための手段であった。午後の2時間はすべてサッカーの話題で通し、2時間すべてでなくても取り上げる日数が17日連続放送となると、結果（成績）、人物（人柄）、社会の変化だけでは伝える要素が圧倒的に足りなかった。しかも今回は映像使用に制限がある。その為ゴールに至る幾つかの細かいパスをボード展開で解説して、その後一度しか放送できない映像（ゴールシーンなど）を見せるような演出に終始せざるを得なかった。例えば「三苫の1ミリ」が生まれたシーンでも、その三苫選手へボールが渡る前の4つのパスに注目し、伊藤選手から田中選手。田中選手から右サイドの堂安選手にパス。そして堂安選手がグランダーの低いパスを出し、前田選手は追いつけず、ギリギリで間にあった三苫選手、といったパス回しを細かく丁寧にボードを使って解説した。その際フォーメーションの解説も加わり、とても専門的な解説であったが、評判も良く、結果的に、この見せ方がサッカーという競技の本質的な面白さの解説にもつながっていた。

さらに驚いたことにひるおびは、決勝トーナメントで日本がクロアチアに敗れてからもW杯を取り上げ、12月19日の決勝戦はPK戦となった試合を詳しく解説。メッシ選手がPKを蹴るのに7歩下がり、エムバペ選手は5歩下がる理由を検証した。翌日20日は大会終了後であるにも関わらず、引き続き優勝したアルゼンチンのメッシ選手の特集、最後にカタール大会を振り返り、日本の活躍やモロッコのベスト4が印象的であったアジア・アフリカ勢の躍進、レフェリングに大きな変化をもたらした半自動オフサイド判定技術の導入や審判団の女性参加などを紹介した。結果的に情報番組がスポーツ番組化していた。

以上のように、情報番組は13年間、スポーツを伝え続けていた。そしてその中で、人柄や戦績だけでなく、戦術などのより専門的なことを伝えるようになっていた。そして放送時間は、報道番組やスポーツ番組を上回るようになっていた。このような側面から考えると、スポーツに関わる人々は情報番組がスポーツを伝えることの意義、情報番組の意

義、情報番組がスポーツの普及や勝利、資金に及ぼす影響について再考すべきタイミング、スポーツメディアという分野の見方を変えるべき時であると考えてる。

第5章 結論

情報番組「ひるおび」の13年間の全放送回数が3335回。そのうちスポーツを取り上げたのが862回であった。割合にして25.8%。お昼の時間帯でも事件や事故、天気などの情報と並んでスポーツが日常的な話題になっていることが明らかになった。

そして「ひるおび」の13年間の分析から「情報番組」がスポーツに関わる話題を取り上げる基準が見えてきた。国際大会で活躍した日本のチーム、または日本人選手であること。国際大会ではなくても成績が歴史的偉業であった場合。また、社会性や事件性を含む話題である。さらに、オリンピックならメダル獲得、サッカーのW杯の場合は本大会出場という基準も加わっていた。

スポーツ番組は日々の結果を伝えている。試合結果を伝えることが特徴なので、その内容を伝えるために選手を中心とした関係者から取材を行っている。そのため番組制作のなかでもスポーツ番組が最も選手の情報を有していると言える。しかし、情報番組は、日々の試合結果ではなく突出した記録や出来事が生じた際に、如何にその出来事の影響力が大きいのかを、「専門家」や「街の人」といった選手本人ではない第三者の声を拾い上げることで、より多くの人に記録の偉大さを広げ、喜びや感動を伝えていた。

「各番組のスポーツの取り上げ方に関するアンケート調査」では、「スポーツ番組」や「報道番組」のスタッフが「情報番組」に求めているのは、歴史的偉業、人柄、使える情報・為になる情報、変化する世の中であった。中でも情報番組が取り上げるべきだと思う内容においては、報道番組のスタッフもスポーツ番組のスタッフも「人柄」が最も高かった。一方で取材対象者が情報番組に求めるものは、「選手の魅力」や「選手との距離を縮める」といった「人柄」に近いものもあったが、「結果よりプロセス」、さらには競技の「専門性」や「奥深さ」といった、スポーツ競技の普及であった。

これらのことから、情報番組は試合結果を単に伝えるのではなく、その結果にまつわる選手の人柄や家族、裏方スタッフ等のサイドストーリーを伝えていくことが重要な役割と言える。人柄を伝えることは、取材対象者が情報番組に期待していた、選手やスポーツ競技と世の中の距離を縮めることに繋がっている。

また、情報番組はスポーツ番組に比べて、長い時間をかけて一つ的话题を取り上げることが可能であることから、偉業達成に至るプロセス、独自の練習方法や監督の指導方法、チームづくりといった、学校や会社ですぐに置き換えて使える情報や為になる情報を伝えることも重要な役割と言える。

さらに、日々スポーツ番組が取材している伝えきれない素材を、無駄にせず、さらに磨きをかけて情報番組で放送するという意味では、情報番組がスポーツ番組の受け皿になっているという側面があり、これも大事な役割の一つと言える。

そして今回明らかになった情報番組がスポーツを伝える最も大きな役割は、スポーツ番組が取材してきた素材も含めて、スポーツ競技本来の面白さを、スポーツファンではない人達に伝えることであった。そのために、取り上げたスポーツ競技のルールを丁寧に説明し、社会の変化をつぶさに伝え、スポーツ番組に劣らない専門家を贅沢にキャスティングして、わかりやすいフリップを作成し、その競技本来の魅力を、スポーツ番組にも劣らない専門的な解説を加えて、スポーツ番組よりも時間をかけて伝えていた。まさに取材対象者が求めていたスポーツ競技の普及につながる大きな役割と言える。

謝辞

本研究を行うにあたり、多くの方に多大なるご協力とご指導を賜りました。関わってくださった全ての方々に心より感謝申し上げます。

毎日3時間の生放送の後に大学院に通うことができるのか。授業についていけるのか。そんな不安は初日のMBA エssenシャルズ of 山岡先生の授業で吹っ飛びました。仕事が終わった後に自分のために学ぶことが、こんなにも充実して楽しい時間であるとは思っていませんでした。平田研究室17期の同期の皆さん、学生修士の岡田さん、小林さん、札野さん、陶宇凡さん、吉田さんはもちろんですが、他のゼミの皆さんとの意見の交換にも大変刺激を受けました。ありがとうございました。

そして研究指導教員である平田竹男先生に感謝申し上げます。「自分の為になるテーマを選んでください。自分の為になる研究をしてください。研究はこの先の人生を豊かにします」、一年を過ごすにあたって大変心強い言葉をいただきました。この言葉で研究を楽しむことが出来ました。中村好男先生には研究目的と結論に対して貴重な助言とご示唆をいただきました。中村先生の一言がなければ、今回の結論に達することはできなかったと思います。児玉ゆうこ先生と畔蒜洋平先生は、修士論文を作成することがフルマラソンだとすると、最高のペースメーカーになっていただきました。お二人のお陰で、息が乱れることなく完走できたと思います。ありがとうございました。

そしてTBSの情報番組、スポーツ番組、報道番組のスタッフの皆様においては、日々の番組制作でお時間のない中アンケートにご協力いただきました。また、青山学院大学陸上部監督の原晋様、そして平田研究室17期の川口能活様、福西崇史様、五郎丸歩様には、元アスリート、そして現役の指導者という立場で取材対象者の意見を伺いました。特に原監督には箱根駅伝前のお忙しい中で対応していただきました。心より感謝いたします。

最後に、早稲田大学大学院スポーツ科学研究科でご指導くださった教授、及び講師の皆様にお礼を申し上げます。皆様のおかげで、忘れられない充実した57歳の一年を過ごすことが出来ました。ほんとうにありがとうございました。

参考文献

大橋未歩 (2012)、オリンピック金メダリストがスター選手になった際の報道環境、早稲田大学スポーツ科学研究科修士論文

山本夏生(2018)、テレビのバラエティ番組がスポーツ/スポーツ選手を取り込む過程とその理由:スポーツバラエティ番組の制作者の意図を中心に. 一橋大学スポーツ研究 37, 37-52.

林 建一(2019)、画像処理技術によるスポーツ弾性システム/研究報告コンピュータビジョンとイメージメディア (CVIM)

宮下牧恵(2021)、放送研究レポート:テレビでは届かないメッセージを SNS で「スポーツ×ヒューマン」の事例から. 放送研究と調査, 71(8), 96-99.

大橋充典(2020)、日本におけるメディア・スポーツ研究のパースペクティブ:健康科学. 42, 47-55, 九州大学健康科学編集委員会

伊藤隆佑(2020)、歴代オリンピック名場面における実況アナウンスの成功要因、早稲田大学スポーツ科学研究科修士論文

平田竹男(2012)、スポーツビジネス最強の教科書、東洋経済新報社

付録

付表1 2022年 ひるおびの専門家ゲスト一覧

	トピック	キャスティング
1月4日	駅伝	原晋、飯田貴之、大迫傑
11日	テニス（ジョコビッチ）	沢松奈生子
12日	体操（内村）	小林信也
13日	テニス（ジョコビッチ）	沢松奈生子
14日	テニス（ジョコビッチ）	沢松奈生子、小林信也
17日	テニス（ジョコビッチ）	沢松奈生子
24日	北京五輪（テクノロジー）	宮家邦彦、福島香織
31日	北京五輪（テクノロジー）	なし
2月3日	野球（ビッグボス）	川崎宗則、原晋
4日	北京五輪開幕（モーグル）	附田雄剛
8日	スキージャンプ（団体）	竹内摂、菊池彩花
9日	フィギュア（鍵山）	佐野稔、村上佳菜子
10日	フィギュア（羽生）	佐野稔
11日	フィギュア（鍵山）	佐野稔、村上佳菜子
15日	フィギュア（ワリエワ）	八木由里、村上佳菜子、野上大介、三宮恵利子
16日	フィギュア（ワリエワ）	村上佳菜子、菊池彩花、加藤大平
17日	フィギュア（ワリエワ）	大澤明美、安藤美姫、早川吉尚
18日	フィギュア（ワリエワ）	菊池彩花、加藤条治、佐野稔、村上佳菜子、加藤大平
21日	フィギュア（ワリエワ）	高橋成美、佐々木正明、大澤明美、岩渕麗楽、野上大介
22日	フィギュア（ワリエワ）	中村逸郎、佐々木正明
3月25日	サッカーW杯予選	福田正博、中澤佑二
30日	野球（大谷）	岩村明憲
4月1日	野球（大谷）	五十嵐亮太、川崎宗則
8日	ゴルフ（マスターズ）	なし
11日	野球（佐々木）	槇原寛己、五十嵐亮太
15日	野球（鈴木誠也）	川崎宗則
18日	野球（佐々木）	槇原寛己、近藤祐司、里崎智也
22日	野球（大谷）	槇原寛己
5月6日	サッカー（暴力問題）	小林信也、溝口紀子
6月2日	サッカーW杯（ウクライナ）	廣瀬陽子、小原凡司
6日	サッカーW杯（ウクライナ）	高橋杉雄、駒木明義
13日	野球（大谷）	里崎智也、福島良一

27 日	野球（大谷）	川崎宗則
7 月 7 日	野球（大谷）	五十嵐亮太
18 日	陸上（世界陸上）	なし
19 日	陸上（世界陸上）	なし
20 日	陸上（世界陸上）	なし
21 日	陸上（世界陸上）	なし
22 日	陸上（世界陸上）	なし
28 日	陸上（世界陸上）	北口榛花
8 月 11 日	野球（大谷）	岩村明憲、五十嵐亮太
26 日	野球（エンゼルス）	福島良一、高橋尚成
9 月 2 日	野球（大谷）	川崎宗則、岩村明憲
7 日	野球（大谷）	五十嵐亮太、岩村明憲
12 日	野球（大谷）	槇原寛己、川崎宗則
13 日	野球（エンゼルス）	古内義明、五十嵐亮太
14 日	野球（村上）	槇原寛己、真中満
19 日	野球（大谷）	岡島秀樹
26 日	野球（大谷）	なし
10 月 3 日	野球（大谷）	五十嵐亮太
4 日	野球（村上）	槇原寛己、里崎智也
6 日	野球（大谷）	高橋尚成
19 日	野球（大谷）	槇原寛己、古内義明
20 日	野球	斎藤佑樹
11 月 10 日	野球（新球場）	五十嵐亮太、古内義明
16 日	野球（新球場）	槇原寛己
18 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖
21 日	サッカーW 杯	福田正博
22 日	サッカーW 杯	上川徹、福田正博
23 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
24 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
25 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、本並健治
28 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
29 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
30 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
12 月 1 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
2 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
5 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎

6 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖、小澤一郎
7 日	サッカーW 杯	福田正博、小澤一郎
8 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖
9 日	サッカーW 杯	福田正博、本並健治、権田修一
12 日	サッカーW 杯	福田正博、小澤一郎
15 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖
16 日	サッカーW 杯	福田正博、前園真聖
19 日	サッカーW 杯	小澤一郎、松井大輔
20 日	サッカーW 杯	福田正博、小澤一郎、亘崇詞
21 日	WBC	槇原寛己
